宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第 194 集

銀座第１遺跡
（五次調査）

Ginza 1 site

東九州自動車道 (都農～西都間) 建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書６４

２０１１

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第194集

『銀座第１遺跡（五次調査）』　正　誤　表

ページ・図番号	誤	正
p.21　左29行目	21はチャート製の	22はチャート製の
p.21　左30行目	22も凹基鏃であるが	21も凹基鏃であるが
p.26 第２表21番	石材→**チャート**	石材→**ホルンフェルス**
p.26 第２表22番	石材→**ホルンフェルス**	石材→**チャート**

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道 (都農～西都間) 建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成 11 年度から実施しております。本書は平成 20 ～ 21 年度にかけて実施した銀座第 1 遺跡 (五次調査) の発掘調査報告書であります。

今回の五次調査では、旧石器時代から近世にかけての遺構・遺物が確認されました。特に、縄文時代早期の陥し穴状遺構が検出されたことで、遺跡周辺で狩猟が行われていたことが分かりました。

また、弥生時代の竪穴建物跡や中世の掘立柱建物跡・竪穴建物跡が検出され、検出された遺構やその周辺から土器や陶磁器など、当時の様子を知るための遺物が確認できました。これらのことは当地の歴史を考える上で重要な資料となります。

本書が学術資料となるだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたってご協力いただいた関係諸機関および地元の方々に対しまして、厚く御礼申し上げます。

平成 23 年 1 月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長　森　　隆　茂

例　言

1　本書は、東九州自動車道 (都農～西都間) 建設に伴い、平成 20~21 年度に実施した児湯郡川南町所在の銀座第 1 遺跡 (五次) の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は西日本高速道路株式会社 (ＮＥＸＣＯ西日本) 九州支社宮崎工事事務所の委託により、宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。

3　現地での実測・写真撮影等の記録は、主に吉野達三、松本茂、重留康宏、深江龍哉が行った。

4　整理作業は、遺物洗浄、注記、接合、実測、トレースを整理作業員が行った。土器類の分類は松林豊樹の助言を得、石器類の分類や石材同定および石器実測は松本茂が行い、陶磁器類の分類については堀田孝博、松林豊樹、鉄製品については柳田晴子の助言を得た。なお、本書で使用した遺物写真は吉野達三が撮影した。

5　次の業務はそれぞれ業者に委託した。

基準点測量・グリッド杭設置	：	(有) 進藤測量設計事務所
空中写真撮影	：	(有) ふじた

6　本書で使用した周辺遺跡位置図は国土地理院発行の 5 万分の 1 図をもとに、周辺地形図等はＮＥＸＣＯ西日本九州支社宮崎工事事務所から提供の 1,000 分の 1 図をもとに作成した。

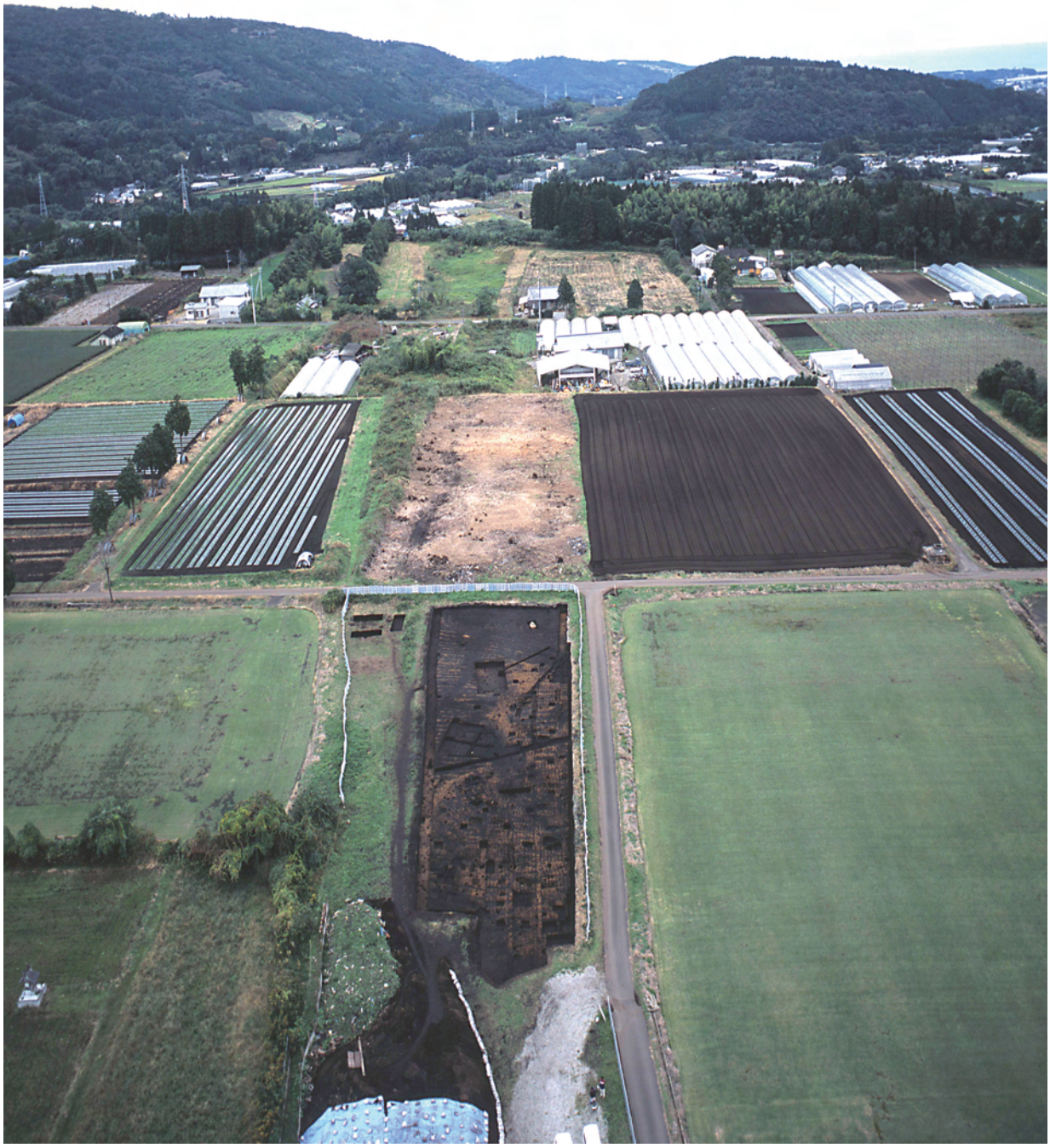
7　国土座標は平面直角座標第Ⅱ系（世界測地系）に基づく。また、標高は海抜絶対高である。

8　本書で使用した方位は座標北 (G.N.) を基準にし、位置図等の一部に磁北 (M.N) を使用した。

9　土層断面・土器等の色調については農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」に準拠した。

10　本書の執筆・編集は、土器・鉄製品・本文を吉野達三、石器を松本茂が行い、装飾高坏を今塩屋毅行が担当した。

11　出土遺物、その他の諸記録は宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。



銀座第 1 遺跡 (五次) 発掘調査区遠景　南西から北東を臨む

S1・S51(竪穴建物跡) 完掘状況

南区東壁土層断面 (鬼界アカホヤ火山灰層堆積状況)

本文目次

第Ⅰ章　はじめに…… 1
　第１節　調査に至る経緯…… 1
　第２節　調査の組織…… 1
第Ⅱ章　遺跡の環境…… 2
　第１節　地理的環境…… 2
　第２節　歴史的環境…… 2
第Ⅲ章　調査の経過と方法 …… 5
　第１節　事前調査 …… 5
　第２節　調査区の設定と調査経過 …… 6
　第３節　整理作業及び報告書作成 …… 6
第Ⅳ章　五次調査の記録 …… 8
　第１節　調査の概要 …… 8
　第２節　基本層序 …… 11
　第３節　旧石器時代～縄文時代早期の遺構と遺物 …… 13
　　１　旧石器時代～縄文時代早期の概要 …… 13
　　(1)　南区の概要 …… 13
　　(2)　北区の概要 …… 13
　　２　遺構と遺物…… 13
　　(1)　自然流路跡 …… 13
　　ア 旧石器時代 …… 13
　　イ 縄文時代早期 …… 13
　　(2)　陥し穴状遺構 …… 16
　　(3)　集石遺構 …… 19
　　(4)　土坑 …… 19
　　３　遺物 …… 21
　　(1)　南区出土石器 …… 21
　　(2)　北区出土石器 …… 21
　　(3)　事前調査時出土石器 …… 21
　第４節　弥生時代～古墳時代の遺構と遺物 …… 27
　　１　弥生時代～古墳時代の概要 …… 27
　　２　遺構と遺物 …… 27
　　(1)　竪穴建物跡 …… 27
　　S1・S51　ア遺構　イ遺物 …… 27
　　S95・S44　ア遺構　イ遺物 …… 38
　第５節　中世～近世の遺構と遺物 …… 43
　　１　中世～近世の概要 …… 43
　　２　遺構と遺物 …… 43
　　(1)　竪穴建物跡 …… 43
　　S2　ア遺構　イ遺物 …… 43
　　S3　ア遺構　イ遺物 …… 43
　　S4（竪穴建物跡）・S5~S6（土坑） …… 43
　　(2)　掘立柱建物跡 …… 47
　　S262　ア遺構　イ遺物…… 47
　　S263　ア遺構　イ遺物…… 47
　　S264　ア遺構　イ遺物…… 47
　　(3)　南区出土土器 …… 47
　第６節　その他の遺構と遺物 …… 50
　　１　遺構 …… 50
　　２　遺物 …… 51
第Ⅴ章　五次調査のまとめ …… 56
　１　旧石器時代 …… 56
　２　縄文時代早期 …… 56
　３　弥生～古墳時代 …… 56
　４　中世～近世 …… 56
　５　近代～現代 …… 56
第Ⅵ章　総括 …… 58
　１　旧石器時代 …… 58
　２　縄文時代早期 …… 58
　３　弥生～古墳時代 …… 58
　４　中世～近世 …… 58

挿 図 目 次

第 1 図　宮崎県児湯郡川南町の概略図 …… 2
第 2 図　銀座第 1 遺跡と周辺遺跡位置図 …… 3
第 3 図　事前調査トレンチ配置図 …… 5
第 4 図　銀座第 1 遺跡調査区配置図 …… 7
第 5 図　南区 k-Ah 上面検出遺構分布図 …… 9
第 6 図　北区遺構・遺物分布図 (AT 上面検出) …… 10
第 7 図　南区遺構・遺物分布図 (AT 上面検出) …… 10
第 8 図　南区調査深度図 …… 10
第 9 図　南区土層断面実測図 …… 12
第 10 図　南区土層断面位置図 …… 12
第 11 図　南区土層断面実測図 …… 14
第 12 図　南区自然流路跡分布図 …… 14
第 13 図　北区土層断面実測図 …… 15
第 14 図　北区自然流路跡分布図 …… 15
第 15 図　S102(陥し穴状遺構) 実測図 …… 16
第 16 図　S103(陥し穴状遺構) 実測図 …… 17
第 17 図　S104(陥し穴状遺構)S108(土坑)・
S112(陥し穴状遺構) 実測図 …… 18
第 18 図　S104 出土石器実測図…… 18
第 19 図　集石遺構実測図 …… 19
第 20 図　土坑実測図 …… 20
第 21 図　南区旧石器時代～縄文時代早期
出土石器実測図 …… 22
第 22 図　南区縄文時代早期出土石器実測図 …… 23
第 23 図　北区旧石器時代～縄文時代早期
出土石器実測図…… 24
第 24 図　事前調査旧石器時代～縄文時代早期
出土石器実測図…… 25
第 25 図　S1・S51(竪穴建物跡) 実測図 …… 28
第 26 図　S1 出土土器実測図① …… 30
第 27 図　S1 出土土器実測図② …… 31
第 28 図　S1 出土土器実測図③ …… 32
第 29 図　S1 出土土器実測図④ …… 33
第 30 図　S1 出土土器実測図⑤ …… 34
第 31 図　S1 出土石器実測図① …… 34
第 32 図　S1 出土石器実測図② …… 35
第 33 図　S51 出土石器実測図 …… 35
第 34 図　S95・S44(竪穴建物跡) 実測図…… 39
第 35 図　S95 出土土器実測図 …… 40
第 36 図　S95 出土石器実測図① …… 40
第 37 図　S95 出土石器実測図② …… 41
第 38 図　S44 出土土器実測図 …… 41
第 39 図　S44 出土鉄製品実測図 …… 41
第 40 図　調査区内出土石器実測図 …… 41
第 41 図　S2(竪穴建物跡) 実測図 …… 44
第 42 図　S2 出土土器・須恵器・瓦質土器
実測図…… 44
第 43 図　S2 出土鉄製品実測図 …… 45
第 44 図　S3(竪穴建物跡) 実測図 …… 45
第 45 図　S3 出土土器・須恵器・瓦質土器
石器実測図…… 45
第 46 図　S4(竪穴建物跡)、S5・S6(土坑)、
S46 一部 (溝状遺構) 実測図 ……46
第 47 図　掘立柱建物跡実測図
S262・S263・S264…… 48
第 48 図　S262・S264 出土土器実測図 …… 49
第 49 図　中世 南区出土土器実測図 …… 49
第 50 図　S36(土坑) 実測図 …… 50
第 51 図　S46(溝状遺構) 及び周辺遺構実測図 …… 52
第 52 図　S49(土坑) 出土遺物実測図 …… 52
第 53 図　中世～近世調査区内出土遺物実測図 …… 53
第 54 図　近世以降調査区内出土遺物実測図 …… 55
第 55 図　装飾高坏 (宮崎県内出土) 実測図 …… 57
第 56 図　銀座第 1 遺跡 (一～五次)
遺構分布図 (中世) …… 59
第 57 図　銀座第 1 遺跡 (一～五次)
遺構分布図 (近世)…… 60

表 目 次

第 1 表　東九州自動車道 (都農～西都間)
基本層序【銀座第 1 遺跡 (五次)、
川南町域、新富・高鍋域との比較】…… 11
第 2 表　石器計測表 …… 26
第 3 表　土器観察表 …… 36~37
第 4 表　石器計測表 …… 37
第 5 表　土器観察表 …… 42
第 6 表　石器計測表 …… 42
第 7 表　鉄製品計測表 …… 42
第 8 表　遺物観察表 (土師器・須恵器・陶磁器・瓦質土器)… 46
第 9 表　石器計測表 …… 46
第 10 表　鉄製品計測表…… 46
第 11 表　土師器観察表…… 50
第 12 表　遺物観察表 (土器・陶磁器)…… 52
第 13 表　遺物観察表 (土器・土師器・須恵器
・陶磁器・瓦質土器)…… 54
第 14 表　鉄製品計測表…… 54
第 15 表　近代出土遺物観察表…… 54
第 16 表　石器計測表…… 54
第 17 表　装飾高坏
(宮崎県出土) 観察表……57

図 版 目 次

巻頭図版1
○銀座第1遺跡(五次)発掘調査区遠景 南西から北東を臨む

巻頭図版2
○S1・S51(竪穴建物跡)完掘状況
○南区東壁土層断面(鬼界アカホヤ火山灰層堆積状況)

巻末図版1 …… 61
○S1(竪穴建物跡)遺物検出状況
○S1(竪穴建物跡)完掘状況
○S95・S44(竪穴建物跡)完掘状況
○S2(竪穴建物跡)完掘状況
○S3(竪穴建物跡)完掘状況
○S4(竪穴建物跡)、S5・S6(土坑)、
S46(溝状遺構)完掘状況

巻末図版2 …… 62
○S102(陥し穴状遺構)
埋土堆積状況
○S103(陥し穴状遺構)
完掘状況
○S112(陥し穴状遺構)
検出状況
○S260(集石遺構)
検出状況
○S112(土杭)完掘状況
○S111(土杭)完掘状況

巻末図版3 …… 63
○南区　土層断面
(k-Ah堆積状況)中央部西より
○北区　土層断面
(AT上攪乱状況)南部北東より
○南区土層断面
(AT堆積状況)北東部南西より
○南区
(AT面傾斜堆積状況)中央部北西より

巻末図版4 …… 64
○S104出土遺物(剥片)「1」
○南区
旧石器～縄文時代早期出土遺物①
「2,3,4,5,6,7,8,9,10,11,12」
○南区
旧石器～縄文時代早期出土遺物②
「13,14,15,16,17,18,19,20」
○北区
旧石器～縄文時代早期出土遺物
「21,22,23,24,25,26,27,28」
○事前調査
旧石器～縄文時代早期出土遺物①
「29,30,31」
○事前調査
旧石器～縄文時代早期出土遺物②
「32,33,34,35,36,37,38,39,40」
○S1(竪穴建物跡)出土遺物①
「41,42,43」
○S1(竪穴建物跡)出土遺物②
「44,45,46,47」

巻末図版5 …… 65
○S1(竪穴建物跡)出土遺物③
「48,49」
○S1(竪穴建物跡)出土遺物④
「50,51,52,53」
○S1(竪穴建物跡)出土遺物④
「54.55.56.57.58」
○S1(竪穴建物跡)出土遺物⑤
「59,60,61」
○S1(竪穴建物跡)出土遺物⑥「62」
○S1(竪穴建物跡)出土遺物⑦「63」
○S1(竪穴建物跡)出土遺物⑧「64」
○S1(竪穴建物跡)出土遺物⑨「65」

巻末図版6 …… 66
○S1(竪穴建物跡)出土遺物⑩「66」
○S1(竪穴建物跡)出土遺物⑪「67」
○S1(竪穴建物跡)出土遺物⑫「68」
○S1(竪穴建物跡)出土遺物⑬「69」
○S1(竪穴建物跡)出土遺物⑭
「70,71,73,74」
○S1(竪穴建物跡)出土遺物⑮「72,75」
○S1(竪穴建物跡)出土遺物⑯「76,77」
○S1(竪穴建物跡)出土遺物⑰「78」

巻末図版7 …… 67
○S1(竪穴建物跡)出土遺物⑱「79」
○S1(竪穴建物跡)出土遺物⑲「80」
○S1(竪穴建物跡)出土遺物⑳「81」
○S1(竪穴建物跡)出土遺物㉑「82」
○S1(竪穴建物跡)出土遺物㉒「83」
○S1(竪穴建物跡)出土遺物㉓
「84,85,86,87」
○S1(竪穴建物跡)出土遺物㉔「88」

○S1(竪穴建物跡)出土遺物㉕
「89,90,91」

巻末図版8 …… 68
○S1(竪穴建物跡)出土遺物㉖「92」
○S1(竪穴建物跡)出土遺物㉗「93」
○S1(竪穴建物跡)出土遺物㉘「94,101,102」
○S1(竪穴建物跡)出土遺物㉙「95」
○S1(竪穴建物跡)出土遺物㉚「96,97」
○S1(竪穴建物跡)出土遺物㉛「98」
○S1(竪穴建物跡)出土遺物㉜「99」
○S1(竪穴建物跡)出土遺物㉝「100」

巻末図版9 …… 69
○S1(竪穴建物跡)出土遺物㉞「103」
○S1(竪穴建物跡)出土遺物㉟「104,105」
○S1(竪穴建物跡)出土遺物㊱「106」
○S1(竪穴建物跡)出土遺物㊲「107」
○S51(竪穴建物跡)出土遺物 「108」
○S95(竪穴建物跡)出土遺物①「109」
○S95(竪穴建物跡)出土遺物②「110,111,112」
○S95(竪穴建物跡)出土遺物③「113」

巻末図版10 …… 70
○S95(竪穴建物跡)出土遺物④
「114,115,116,118」
○S95(竪穴建物跡)出土遺物⑤「117,119」
○S95(竪穴建物跡)出土遺物⑥「120」
○S95(竪穴建物跡)出土遺物⑦「121,122」
○S95(竪穴建物跡)出土遺物⑧「123,124」
○S95(竪穴建物跡)出土遺物⑨「125」
○S95(竪穴建物跡)出土遺物⑩「126」
○S44(竪穴建物跡)出土遺物①「127,128」

巻末図版11 …… 71
○S44(竪穴建物跡)出土遺物②「129,130」
○S44(竪穴建物跡)出土遺物③「131」
○南区Ⅱ層出土遺物「132」
○S2(竪穴建物跡)出土遺物①「133」
○S2(竪穴建物跡)出土遺物②「134,135,137」
○S2(竪穴建物跡)出土遺物③「136」
○S3(竪穴建物跡)出土遺物①「138,139,140」
○S3(竪穴建物跡)出土遺物②「141」
○S3(竪穴建物跡)出土遺物③「142」

巻末図版12 …… 72
○S3(竪穴建物跡)出土遺物④「143」
○S262・S264(掘立柱建物跡)出土遺物①
「144,145,146,147,148,149」
○S262・S264(掘立柱建物跡)出土遺物②
「150,151,152,153」
○中世：南区出土遺物①「154,155,156」
○中世：南区出土遺物②「157」
○中世：南区出土遺物③「158,159,160,161,162」
○中世：南区出土遺物④「163,164」
○S49(土杭)出土遺物 「165,166」

巻末図版13 …… 73
○南・北区表土・Ⅱ層一括出土遺物①
「167,168,169」
○南・北区表土・Ⅱ層一括出土遺物②
「170,171,172,173,174」
○南・北区表土・Ⅱ層一括出土遺物③
「175,176」
○南・北区表土・Ⅱ層一括出土遺物④「177」
○S229(ピット)「178」
南区Ⅱ層P3グリッド一括「179,180」
○南区表土・グリッドⅡ層一括出土遺物
「181,182,183,184,185」
○北区表土・南区グリッドⅡ層一括出土遺物
「186,187,188,189,190」
○南区グリッドⅡ層一括出土遺物「191」

巻末図版14 …… 74
○南区グリッドⅡ層「192」
北区表土一括出土遺物「193」
○南区攪乱「194」
北区表土一括出土遺物「195,196,197」
○事前北区「198」北区「199」
南区表土一括出土遺物「200」
○宮崎県児湯郡川南町出土 装飾高坏「201」

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

東九州自動車道（門川～西都間 59㎞）は、平成８年 12 月国土開発幹線自動車道建設会議において整備計画区間に決定した。そのうち都農～西都間 25㎞について、平成９年 12 月に建設大臣（現国土交通大臣）より日本道路公団へ施行命令が発令された。一方、宮崎県教育委員会では平成 10 年度に同路線上の分布調査を行い、79 遺跡の所在を確認した。そして、平成 11 年度から日本道路公団九州支社との間で委託契約を締結し、宮崎県埋蔵文化財センターが用地買収の進捗に合わせ事前調査、本調査を実施し、現在に至っている。なお、日本道路公団は分割民営化され、平成 17 年 10 月１日から西日本高速道路株式会社九州支社宮崎工事事務所・延岡高速道路事務所となった。

銀座第１遺跡（一次～四次調査）は、平成 14 年度の発掘調査に始まり四次調査の終了する平成 16 年度まで､3 年間の歳月を要した。この間、中・近世の溝状遺構に囲まれた集落跡や縄文～弥生時代の様々な遺物が確認されている。

本遺跡（五次調査）では平成 16 年度に対象区の事前調査が実施され、縄文時代早期の遺物や弥生時代の竪穴建物跡等の遺構の存在が確認された。これを受け平成 20 年８月から 2,500㎡を対象に発掘調査を開始した。また、平成 20 年 11 月には隣接する過密植栽部分の伐採が終了し引き渡しが行われたため、事前調査を実施したところ、縄文時代早期とみられる遺構や遺物が確認された。このため、本遺跡（五次調査）では当初の対象区と過密植栽部分で遺構・遺物の確認される範囲 1,100㎡を合わせ対象面積を 3,600㎡に拡張し発掘調査を実施することとした。

本調査は平成 20 年７月 28 日から平成 21 年４月８日まで実施した。

第２節　調査の組織

銀座第１遺跡の調査組織は次のとおりである。

【調査主体】宮崎県教育委員会
宮崎県埋蔵文化財センター

平成 16 年度

所　長	宮園　淳一
副所長兼総務課長	大薗　和博
副所長兼調査第二課長	岩永　哲夫
調査第一課長	髙山　富雄
総務課主幹兼総務係長	石川　惠史
調査第一課調査第一係長	谷口　武範
主幹兼調査第二係長	長津　宗重

平成 20~22 年度

所　長	福永　展幸 (H20~H21)
	森　　隆茂 (H22)
副所長	加藤　悟郎 (H20)
副所長兼総務課長	長友　英詞 (H20~H21)
副所長	北郷　泰道 (H22)
総務課長	矢野　雅紀 (H22)
調査第一課長	長津　宗重 (H20~H22)
総務課	
主幹兼総務担当ﾘｰﾀﾞｰ	髙山　正信 (H20~H21)
副主幹兼総務担当ﾘｰﾀﾞｰ	長友由美子 (H22)
調査第一課	
副主幹兼調査第一担当ﾘｰﾀﾞｰ	南中道　隆 (H20)
	飯田　博之 (H21~H22)

〔事前調査担当〕（平成 16 年度）
調査第一課調査第二係主事　三品　典生

〔本調査担当〕（平成 20 年度）
調査第一課

調査第一担当主査	吉野　達三
調査第一担当主任主事	松本　　茂
調査第一担当主任主事	重留　康宏
調査第一担当主事	深江　龍哉

〔整理作業・報告書作成担当〕（平成 21 ～ 22 年度）
調査第一課

調査第一担当主査	吉野　達三

第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

川南町は宮崎県中央､沿海部に位置する(第1図)。本町は、上面木山(標高 897m)から東側に派生する山地・丘陵面と、東麓から海岸線にかけて緩やかに傾斜しながら広がる段丘面とからなり、面積は 90.27㎢である。この地域の段丘面は沖積扇状地であり、河川の浸食作用による崖や谷で区切られた状態で分布し、青鹿面、唐瀬原面、川南原面など 14 の面から構成されている。

銀座第 1 遺跡は、川南町の中心市街地より北西へ約 3㎞、児湯郡川南町大字川南字沓袋畑に所在する。ここは、北西から南東へ続く唐瀬原面の緩斜面上にあり、中央部から西側丘陵面にかけて続くなだらかな谷地形の部分に位置している(第２図)。

五次調査区は銀座第 1 遺跡(四次)発掘調査区の北東部に隣接し､調査区の標高は約 127 ｍで、唐瀬原面の緩斜面に沿った町道で南北調査区に分かれている。

第２節　歴史的環境

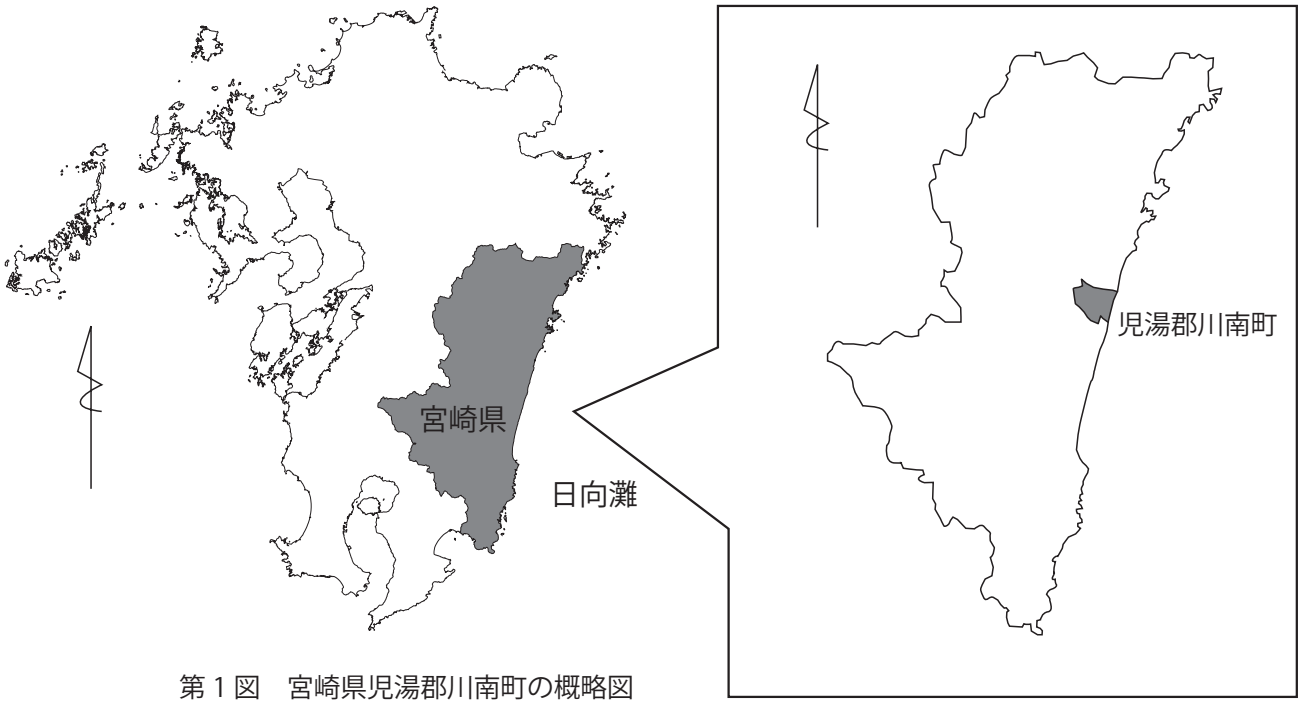
本遺跡の周辺では、東九州自動車道の建設に伴う調査などにより発掘調査された遺跡が増えてきている。本節では本遺跡を取り巻く遺跡について大まかに旧石器時代、縄文時代、弥生～古墳時代、歴史時代に分けて概観する(第２図)。

1　旧石器時代

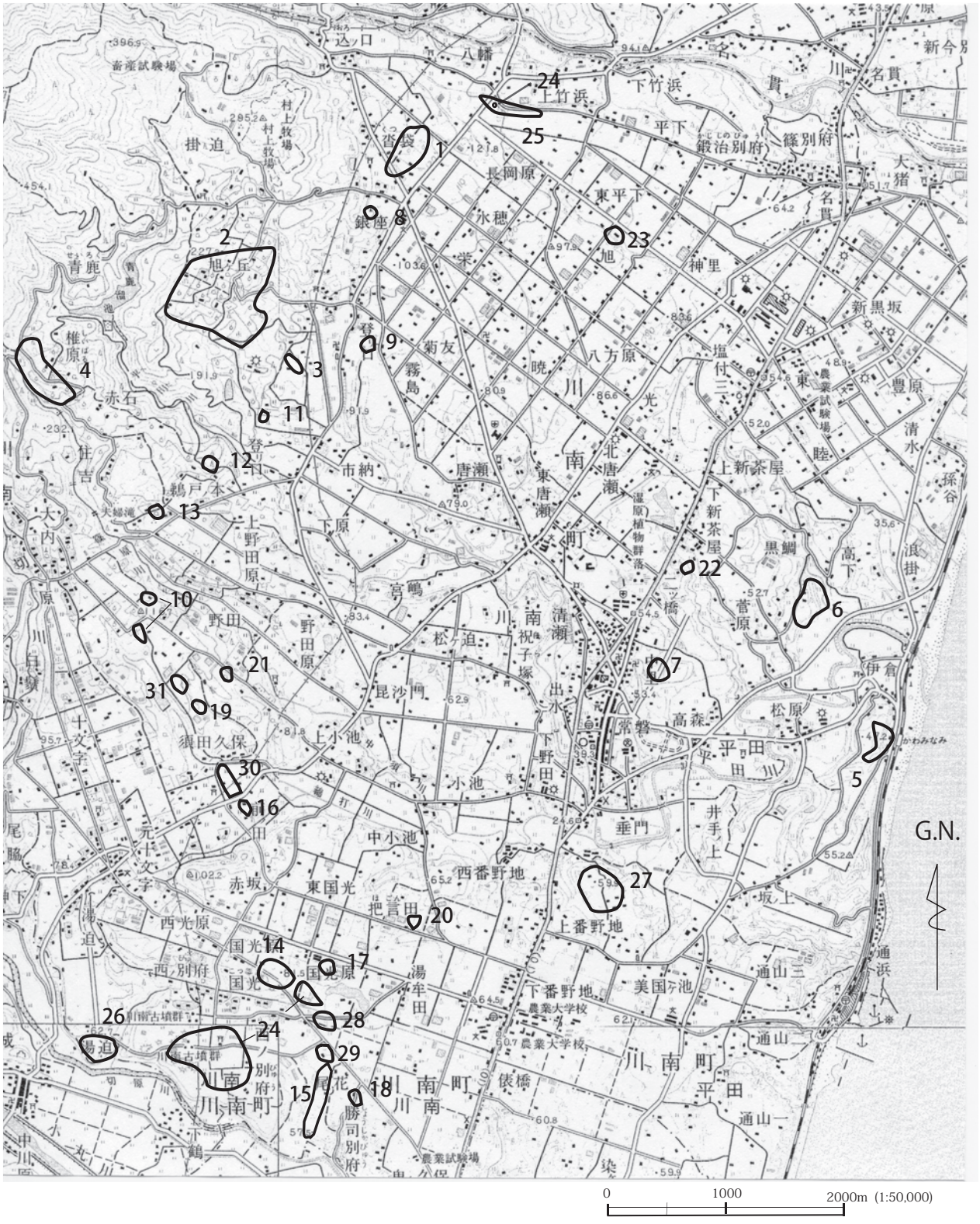
大野寅夫氏の踏査や川南町育委員会が行った分布調査では、旭ヶ丘遺跡、谷ノ口遺跡、椎原遺跡、大久保遺跡、卒手遺跡等で遺物が採集されている。平成５～ 12 年にかけ川南町教育委員会は後牟田遺跡の調査を行った。この遺跡は西日本における旧石器時代最古の遺跡である。ここでは、中期旧石器時代前半から後期旧石器時代後半に渡る７つの文化層が確認され、この時代の研究に大きな成果を残している。

この他にも藏座村遺跡、霧島遺跡が挙げられ、本町の旧石器時代の遺跡の多くが町内の山地や丘陵部に多く分布するという特徴を示していた。

東九州自動車道建設に伴う遺跡発掘調査では、ＡＴ下位～上位にわたり多くの成果が見られる。ＡＴ下位では、中ノ迫第１・市納上第２遺跡で礫群が確認されている。ＡＴ上位では、本遺跡近隣の虚空蔵免遺跡で礫群２基とナイフ形石器・角錐状石器・細石刃核等が、赤石・天神本遺跡でも礫群２基が確認され、ナイフ形石器・角錐状石器・細石刃核が出土している。



第１図　宮崎県児湯郡川南町の概略図



1 銀座第１遺跡　2 旭ヶ丘遺跡　3 谷ノ口遺跡　4 椎原遺跡　5 大久保遺跡　6 卒手遺跡
7 後牟田遺跡　8 藏座村遺跡　9 霧島遺跡　10 中ノ迫第１遺跡　11市納上第２遺跡　12 虚空蔵免遺跡
13 赤石・天神本遺跡　14上ノ原遺跡　15 尾花A遺跡　16 前ノ田村上第２遺跡　17 国光原遺跡　18 尾花坂上遺跡
19 中ノ迫第3遺跡　20 把言田遺跡　21 中ノ迫A遺跡　22 野稲尾遺跡　23 東平下遺跡　24 川南古墳群
25 上ノ原北分B遺跡　26 松山城跡　27 南原A遺跡　28 湯牟田遺跡　29 西ノ別府遺跡　30 前ノ田村上第１遺跡
31中ノ迫第2遺跡

第2図　銀座第1遺跡と周辺遺跡位置図(1/50,000)

2　縄文時代

当初、川南町における縄文時代の遺跡は非常に少なかったが、後牟田遺跡・霧島遺跡・上ノ原遺跡等の発掘調査で、早期の遺構・遺物が確認されてきた。さらに東九州自動車道建設に伴う発掘調査によりその数は急速に増加してきた。赤石・天神本遺跡や前ノ田村上第２遺跡、国光原遺跡では草創期の隆帯文土器が、市納上第２遺跡や尾花坂上遺跡、中ノ迫第３遺跡、国光原遺跡では早期の集石遺構がそれぞれ確認され、押型文土器等が出土している。また、赤石・天神本遺跡では、後・晩期の竪穴建物跡と集石遺構が確認されている。銀座第１遺跡 (三次調査) では、尾鈴山酸性岩類の礫で構成された早期の集石遺構が８基確認され、土器片と石鏃や剥片が出土している。縄文時代の遺跡も旧石器時代と同様に山地や丘陵部に分布している。

3　弥生～古墳時代

弥生時代には、台地や丘陵地縁辺部に中期から後期にかけての遺跡の分布が見られるようになる。前期の遺跡は確認されていないが、藏座村遺跡において竪穴建物跡から中溝式土器が出土している。中期の遺跡では、竪穴建物跡が確認された中ノ迫第２遺跡、後期から終末期の遺跡では、竪穴建物跡が確認された把言田遺跡、中ノ迫第１遺跡 (二次)、中ノ迫Ａ遺跡、上ノ原遺跡、竪穴建物跡と周溝状遺構が確認された野稲尾遺跡、円形及び方形の周溝墓が確認された東平下遺跡などの調査例がある。最近の調査例では、弥生中期から古墳時代にかけて大規模な集落を形成していた尾花Ａ遺跡があげられる。

古墳時代の遺跡では、国指定史跡の川南古墳群があり、弥生時代終末期から古墳時代にかけて大規模な社会集団の存在を想定できる。銀座第１遺跡周辺では、同古墳群第５５号墳 (前方後円墳) を有する上ノ原北分Ｂ遺跡があり、須恵器の無蓋高坏等出土からもこの地域の古墳が当時の首長の墓域であったと考えられる。

4　歴史時代

古代では、奈良時代後半から平安時代前期頃に比定される蔵骨器を伴う上垂門の火葬墓や、戦国期の宗麟原供養塔、戦国末期における城郭として松山城跡などが知られている。また、去飛 (都農町) の駅から、前ノ田 (川南町) そして児湯 (木城町高城) の駅を結ぶ古代官道の存在も推定されている。

中世においては、東九州自動車道の建設に伴う発掘調査で、前ノ田村上第１遺跡や銀座第１遺跡 (一～四次) において中世～近世の居館及び集落・溝状遺構等が検出されている。

近代から現代にかけては、大規模な開拓と農業構造改善事業が進められている。特に太平洋戦争前後には全国から多くの入植者が移住し、このことが現在「川南合衆国」と呼ばれる所以になっている。また、戦争遺跡として旧日本陸軍落下傘部隊基地内の給水塔も存在している。

【引用・参考文献】

川南町教育委員会

・1983「川南町史」

・1983「川南の埋蔵文化財　遺跡詳細分布調査報告書」

・2002「後牟田遺跡 宮崎県川南町後牟田遺跡における旧石器の研究」後牟田遺跡調査団

・1993「松山城跡」『川南町文化財報告』５

宮崎県埋蔵文化財センター

・2001「藏座村遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 53 集

・2006「市納上第１遺跡　市納上第４遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 121 集

・2008「市納上第２遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 170 集

・2008「中ノ迫第２遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 167 集

・2006「銀座第１遺跡 (一・二・三・四次調査)」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 120 集

第Ⅲ章　調査の経過と方法

第 1 節　事前調査

銀座第 1 遺跡は、これまでの一次～四次調査で中・近世を中心とした遺構 (溝状遺構・掘立柱建物跡・土壙墓など) が報告されている。溝状遺構は掘立柱建物跡を囲む形で検出されており、区画溝としての役割が考えられた。また縄文時代の集石遺構や弥生から古墳時代の土器も確認されており、近隣に当該期の集落の存在が想定されていた。

事前調査は、平成 16 年 9 月 1 日から 10 月 28 日と、平成 20 年 11 月 17 日から 18 日の 2 回に分けて実施し、対象面積はそれぞれ 16,700㎡と 3,240㎡であった。

平成 16 年度に行った調査では、A 区で細石刃 1 点が、B 区でナイフ形石器 1 点と打製石鏃 2 点とが出土した。しかし、両区共に大部分が削平を受けており、遺物包含層と考えられる層は一部が残存するのみであった。また、同区内で遺構は検出されず、出土遺物の総数も 10 点に満たなかったため、包含する遺物の密度もかなり希薄であると考えられた。

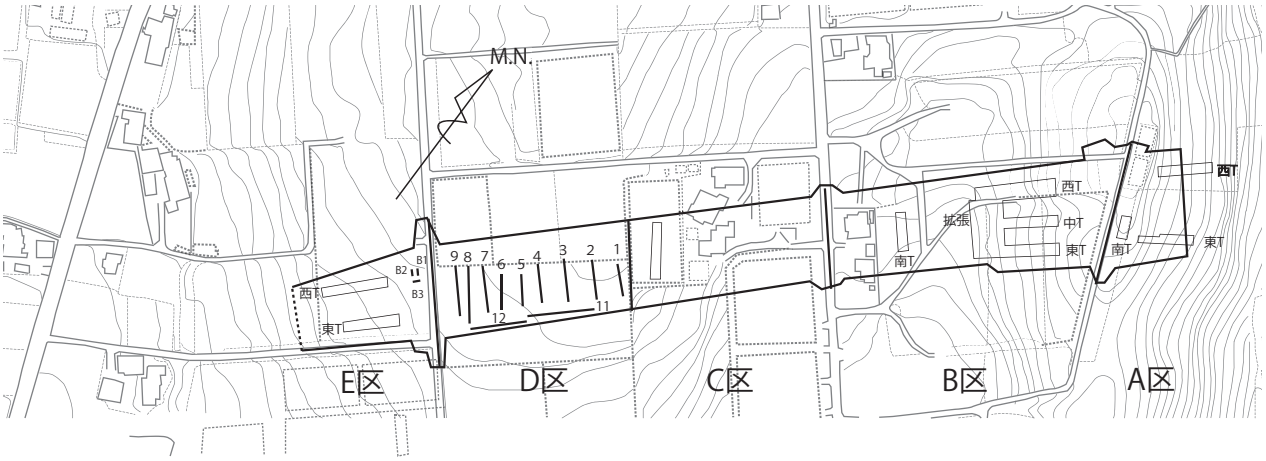
C 区は宅地造成により激しく改変されており、遺構は検出されず遺物も出土しなかった。

E 区では、第Ⅱ層 (K-Ah) 上面で竪穴建物跡を 1 軒確認した。また、第Ⅰ層中から弥生時代後期や中世後半から近世にかけての土器・陶磁器が多数出土した。これらの結果から、E 区内に第Ⅲ層 (K-Ah) 上位を第Ⅱ文化層 (弥生時代～古墳時代)、礫と打製石鏃が出土した第Ⅳ層 (AT) 上位を第Ⅰ文化層 (旧石器時代～縄文時代早期) とし、2,500㎡を調査対象面積とした。

平成 20 年度には 2 回目の事前調査を行った。これは、D 区 (面積 3,240㎡) の事前調査であり、銀座第 1 遺跡 (五次) 調査と並行して実施した。ここでは、対象範囲に東西と南北方向に計 11 箇所のトレンチ (第 3 図) を設定し、重機による表土掘削と人力による精査を行った。この結果、ほとんどのトレンチで削平がＡＴ付近まで及ぶことが判明した。ＡＴ面の傾斜が北から南へ緩やかに下る斜面であることを考慮すると、K-Ah 面も同様の傾斜であったと推定されるが、全体的に耕作深度が K-Ah 層を越えているためこの面での遺構検出は困難であると考えられた。そこで、表土中からの遺物も皆無に近い 5Ｔ以北を調査の対象から除外し、土器片が確認され一部Ⅲ層 (K-Ah) 面の残存が観察される南半の 1,100㎡について本調査の対象とした。遺構検出面は、Ⅲ層 (K-Ah) 上面 (弥生時代～古墳時代)・ＡＴ上面 (旧石器時代～縄文時代早期) としたが、ＡＴ下位に関しては調査の進捗に合わせ、再度トレンチを設定し、遺構・遺物の有無を確認することにした。

また、同時期にカルバートボックス設置部分の事前調査として E 区北部に B1~B3 のトレンチ (第 3 図) を設定し、人力で精査を行った。この部分も上部はトレンチャーの攪乱を受け、AT 面まで遺構・遺物は確認されなかった。

これらの結果を受け、銀座第 1 遺跡 (五次調査) は、調査面積を 3,600㎡とした。



第3図　事前調査トレンチ配置図(1:4,000)　0　20m(1:4000)

第２節　調査区の設定と調査経過

1　調査区の設定

調査区は町道を夾み南区・北区と設定した。グリッド杭は座標第Ⅰ系を基準として 10 m 間隔で設定した (第 4 図)。

2　調査経過 (調査日誌抄)

○　南区

(期間) 平成 20 年 7 月 28 日～平成 21 年 4 月 8 日

20.7.28　重機による表土剥ぎ開始。(~7.31)

7.30　深掘りトレンチを掘削し基本土層を確認。

8.4　作業員へオリエンテーションを実施後作業を開始。調査区周囲にガードフェンスを設 置。同フェンスの耐風養生を実施。

8.5　遺構の精査を開始。

8.21　事前調査のトレンチ跡を完掘。トレンチの南延長部から装飾高坏片、鉄器 (鎌)、土器等が出土。

9.3　竪穴建物跡Ｓ 1 を検出。

9.12　台風 13 号接近に備えて耐風養生を実施。

9.30　台風 15 号接近に備えて耐風養生を実施。

10.3　竪穴建物跡 S2・S3・S4、土坑 S36 を検出。

10.10 竪穴建物跡、土坑の実測を開始。

10.16 ピットを検出。半截後平板にて遺構分布図の作成を開始。

10.21 教職経験 10 年経過研修として発掘作業体験研修を実施。

10.29 ピット等の半截を開始。溝状遺構を検出。

10.30 竪穴建物跡 S1 の遺物取り上げを実施。

11.6　カルバートボックス設置部分の事前調査を実施。

11.11 空中写真撮影を実施。

11.12 竪穴建物跡 S1 の実測を開始。

11.19 重機による第Ⅲ層 K-Ah 面除去を開始。

12.3　竪穴建物跡 S95･S44 を検出。実測を開始。

11.20 第Ⅳ層面の精査を開始。

12.11 縄文時代早期以前の遺物取り上げを開始。

12.15 第Ⅳ層から第Ⅴ層へのグリッド 25% 掘り下げを開始。

12.16　掘立柱建物跡の実測を開始。

21.1.14 陥し穴状遺構 S102 ～ S104、土坑 S 105 ～ S109 を検出し実測を開始。

4.8　南区埋め戻し終了。

○　北区

(期間) 平成 21 年 1 月 13 日～平成 21 年 4 月 8 日

21.1.13　重機による表土剥ぎ開始。(~1.26)

1.14　調査区周辺にガードフェンスを設置。同フェンスの耐風養生を実施。

1.26　北区調査区内にグリッド杭を設置。

1.27　第Ⅳ層から第Ⅴ層へのグリッド 25％掘り下げを実施。

1.29　第Ⅴ層上面にて剥片やナイフ形石器を検出。

2.2　第Ⅴ層上面にて剥片や黒曜石片を検出。

2.5　北区南側の土層断面図を作成。

2.9　北区中央トレンチの断面図と北区西側土層断面図を作成。自然流路跡を確認。

2.20　陥し穴状遺構 S112 と土坑 S110・S111 を検出。実測を開始。

4.8　北区埋め戻し終了。

第３節　整理作業及び報告書作成

1　整理作業

整理作業は当センター本館において以下の工程で行った。

○　平成 21 年 4 月～ 5 月

・遺物 (石器、土器、陶磁器) の水洗、注記

○　平成 21 年 5 月～ 8 月

・遺物 (土器、陶磁器) の接合

○　平成 21 年 8 月～ 10 月

・報告書掲載遺物 (石器、土器、陶磁器) の実測

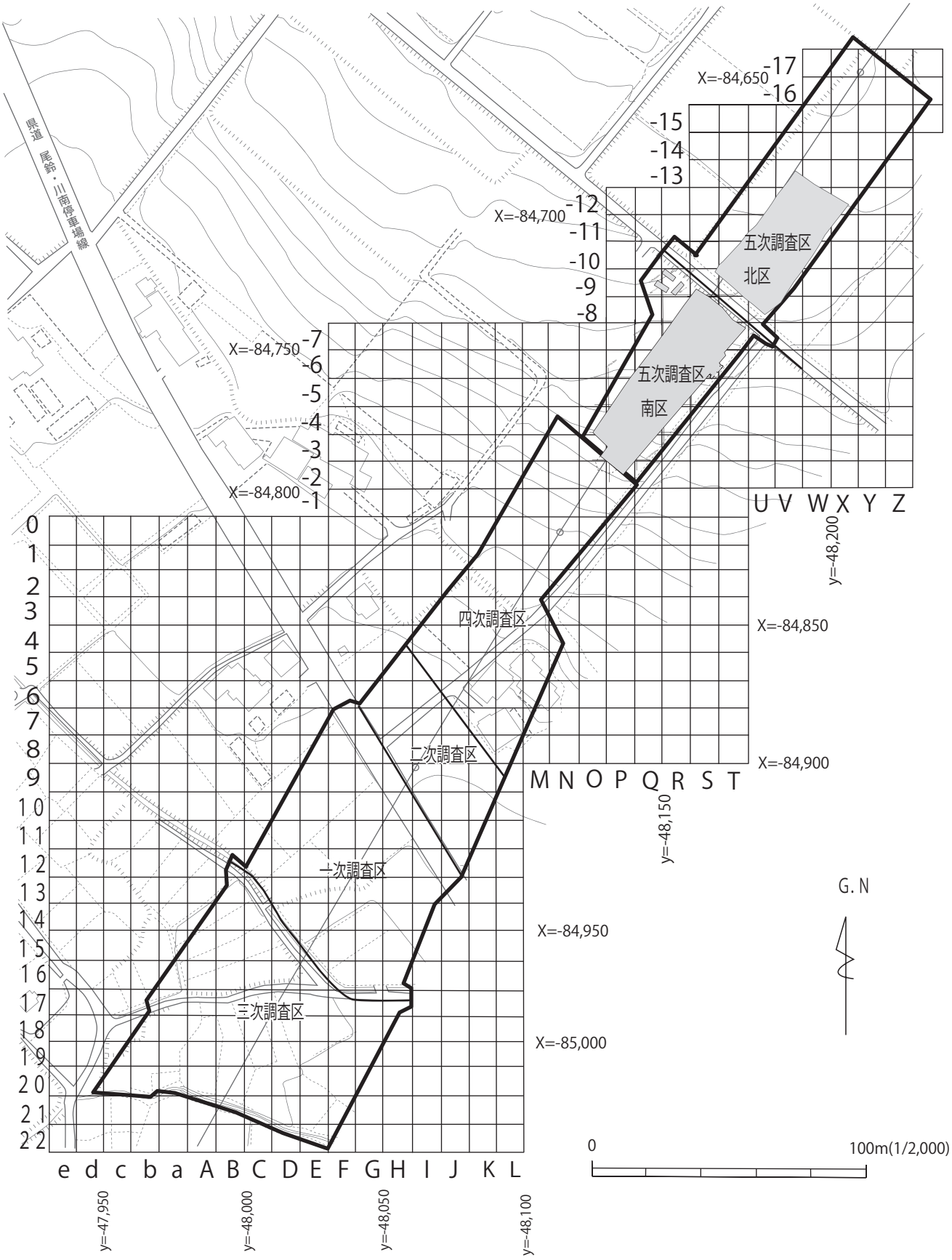
○　平成 21 年 10 月～ 12 月

・報告書掲載遺物 (石器、土器、陶磁器) 及び遺構分布図等のトレース

・報告書掲載遺物 (鉄器) の実測及びトレース

2　報告書作成

報告書作成は整理作業と平行して行い、平成 22 年 9 月に作成を完了した。



第 4 図　　銀座第 1 遺跡調査区配置図 (1/2,000)

第Ⅳ章　五次調査の記録

第 1 節　調査の概要

銀座第 1 遺跡 (五次) は、調査面積 3,600㎡を対象に、後期旧石器時代～縄文時代早期の包含層を第Ⅰ文化層、弥生時代～古墳時代の包含層を第Ⅱ文化層と設定し、平成 20 年 7 月から約 10 ヶ月に渡って実施した。

調査は、まず重機で表土を約 0.4 ～ 1 m程度剥ぎ、深掘りトレンチを設定した。その結果、客土が 1 m以上堆積している部分があることや、対象面積の北側半分が、表土下から K-Ah 層にかけてトレンチャーによる撹乱を激しく受けていることが判明した。この後、発掘作業員を投入し第Ⅱ文化層の精査を開始した。ここでは、Ⅱ層クロボク面から精査を始め、Ⅲ層 (k-Ah) 面で遺構検出を行った。遺構残存状況は比較的良好であったが、中にはトレンチャーによる撹乱の影響を受け、全体を把握できない遺構も見られた。遺構には帰属時期を推定できる遺物を伴うものがあった (第 5 図)。

平成 20 年 11 月 19 日より重機でⅢ (K-Ah) 層剥ぎを開始し、終了後発掘作業員でⅣ層黒褐色ローム面からⅤ層暗褐色ローム面、そしてⅥ層明褐色ローム (姶良 Tn) 面まで、調査区内のグリッド毎に 25％の範囲を設定し精査を開始した。精査開始後第Ⅰ文化層では、後期旧石器時代～縄文時代早期の遺物や、縄文時代早期と推定される遺構や自然流路跡など当時の旧地形等が伺える層の堆積などが見られた (第 6 図・第 7 図)。

ここではグリッド 25％の範囲で遺物を検出した場合、検出範囲を広げ周囲のグリッドを掘り下げていくこととした。各グリッドの調査深度は第 8 図の通りである。

南区の遺構としては、竪穴建物跡 7 軒、掘立柱建物跡 3 棟、溝状遺構 1 条、土坑 9 基、集石遺構 2 基、陥し穴状遺構 3 基、出土遺物の認められた土坑 (2 基) やピット (9 基)、その他 138 基のピットを検出した。更に、土層の堆積状況や変色域などから、自然流路跡を確認した。遺物は、竪穴建物跡から出土した弥生土器を中心に、中世の土師器、中近世の陶磁器・石器・鉄製品等が出土した。

町道より南側を調査中に北側隣接地Ｄ区の事前調査を実施した。この調査は、東九州自動車道 (都農～西都間) 建設用地内ではあるものの、過密植栽がなされた部分であり、平成 16 年度に実施した事前調査から除外されていた部分であったが、樹木の伐採が行われたため、対象地域内の土層の確認や遺構分布・遺物確認のために急遽実施したものであった。

平成 20 年 11 月 17 日～ 18 日に実施した事前調査では、用地内に 11 本に渡るトレンチを設定し精査を行った。その結果、第Ⅰ文化層の存在が確認された。当初この調査区は平成 21 年度に調査予定であったが、関係機関との協議の上、銀座第 1 遺跡 (五次) 調査の延長として実施することが決まった。これを受け、調査区を町道を境に南区と北区に分け、調査期間を延長し、平成 21 年 1 月 16 日より北区の発掘調査を開始した。

北区は客土が 1 mを越える部分が大半を占めており、重機による除去を行い精査を実施した。その結果、遺構としてⅥ層明褐色ローム (AT) 上面で縄文時代早期相当の陥し穴状遺構 1 基と土坑 2 基を検出した。さらに、調査区方向の土層断面による土層の堆積状況と明褐色ローム層 (AT) 上の変色域の状況から南区に繋がると思われる自然流路跡を確認した。

遺物は、表土中から銭貨や水注、キセル等が出土した。Ⅴ層暗褐色ローム上位からは打製石鏃や剥片が、Ⅵ層明褐色ローム (AT) 上位からは後期旧石器時代相当のナイフ形石器が数点出土した。南区と北区は第Ⅰ文化層で陥し穴状遺構を検出した。

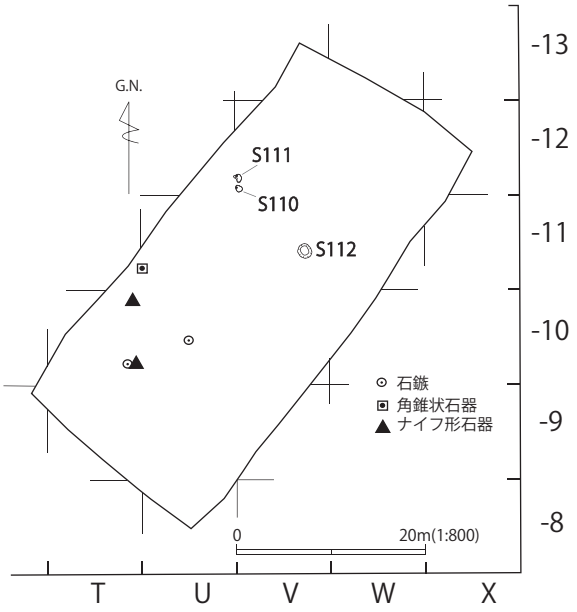
埋め戻しは平成 21 年 2 月 23 日～ 2 月 25 日と平成 21 年 4 月 6 日～ 4 月 8 日の期間で行い遺跡全体の調査を終了した。

以後五次調査の詳細を記述する。

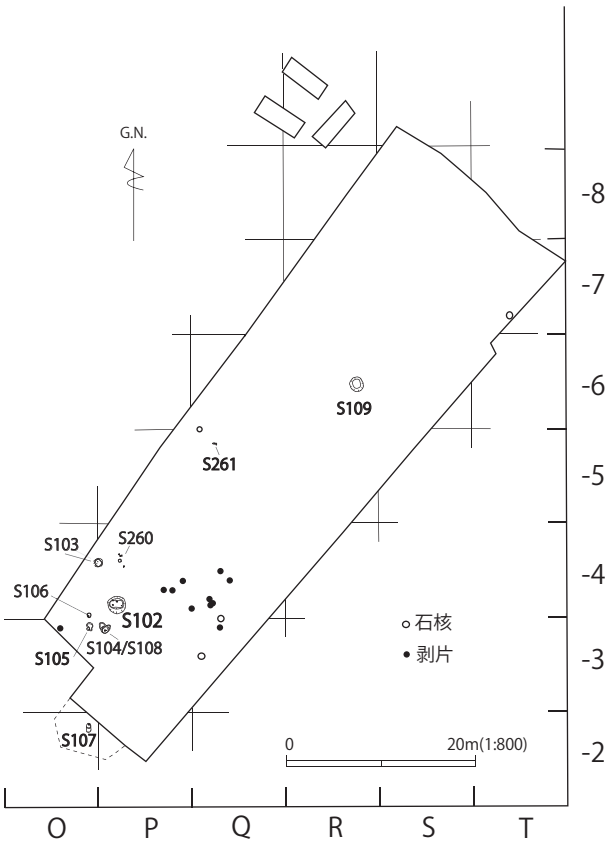
第 5 図　南区 K-Ah 上面検出遺構分布図 (1/400)

0　10m(1:400)

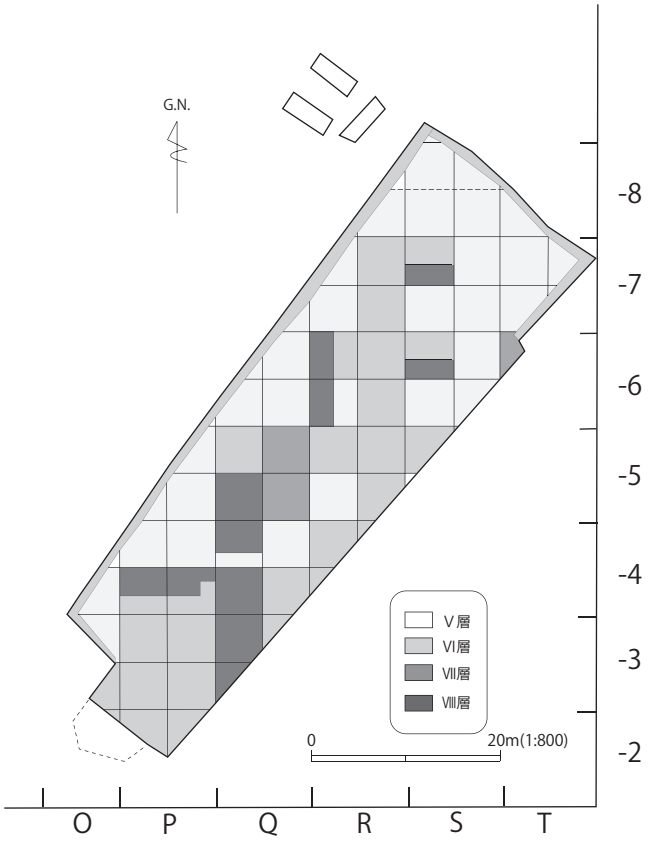
※ … 攪乱



第 6 図　北区遺構・遺物分布図（AT 上面検出）(1/800)



第 7 図　南区遺構・遺物分布図（AT 上面検出）(1/800)



第 8 図　南区調査深度図 (1/800)

第２節　基本層序

銀座第１遺跡 (五次) 調査区は、なだらかな谷地形を形成する斜面上に位置している。このため調査区内では不安定な土層の堆積を呈する場所が多く、場所により堆積状況が異なっていた。

南区では、表土を剥いだ状態でトレンチャーによる撹乱が北側のほぼ全域で見られた。同区中央部から南側にかけて鬼界アカホヤ層 (K-Ah) と黒褐色ローム層の堆積が見られた (第９図 A-B)。

黒褐色ローム層下位には暗褐色ローム層が堆積していたが、南区では ML1 相当の暗褐色ローム層や小林軽石を含む層、更に ML1 より黒味が強い ML1 相当暗褐色ローム層の堆積が見られた (第９図 C-D)。

明褐色ローム層 (AT) 上面では、水成変成に起因する変色域が確認され、明褐色ローム層 (AT) の堆積が無い部分も見られた。表土から 1.0m 以下の深さには赤褐色ローム層が堆積していた (第９図 E-F,H-G)。

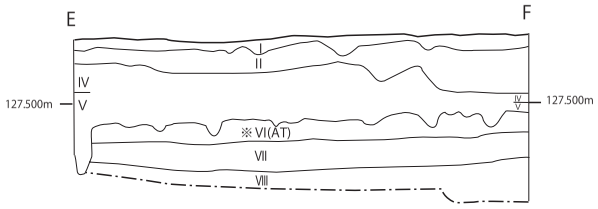
北区の南側では過密植栽の影響と思われる撹乱が表土から 1.5m 以上の深さまで堆積し、その下位では部分的に黒褐色ローム層と明褐色ローム層 (AT) の堆積を確認できた。また、同区南西部も南区と同様に明褐色ローム層 (AT) 上に水成変成と思われる変色域が確認され、同層の堆積が確認できない所も見られた。さらに区内南東側の 2m 以下の深さでは赤褐色ローム層の堆積が確認できた (第 13 図)。

宮崎県埋蔵文化財センターでは東九州自動車道 (都農～西都間) 関連の埋蔵文化財発掘調査に際して、新富・高鍋町域の発掘調査の成果をもとに基本層序を作成し、遺跡間の共通理解を図ってきた。しかし、発掘調査の対象が北へ移動し川南町における発掘調査では既存の基本層序が対応しない事例も出てきた。そこで、川南町域で行われた発掘調査結果をもとに川南町域に対応した基本層序を作成した。

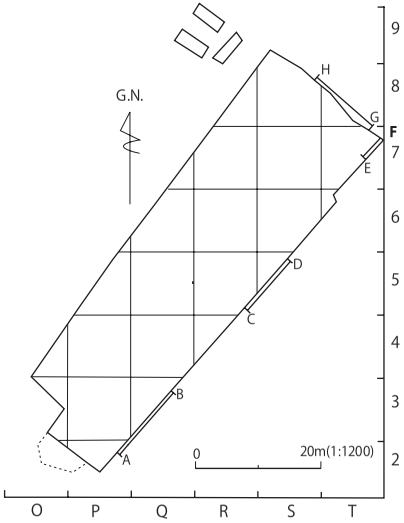
以下が東九州自動車道 (都農～西都間) の土層と比較した本遺跡の基本的な土層堆積状況である (第１表)。

第１表　東九州自動車道 (都農～西都間) 基本層序【銀座第１遺跡 (五次)、川南町域、新富・高鍋町域との比較】

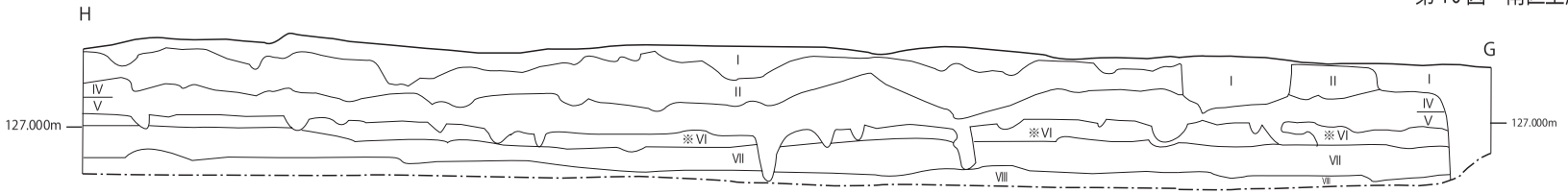
銀座第１遺跡 (五次) 基本層序			川南基本層序			新富・高鍋基本層序		
No	略称	層名	No	略称	層名	略称	層名	年代
Ⅰ		表土	1			表土		
						クロボク	黒色土	
Ⅱ	クロボク	黒色土	2	クロボク		Kr-T h	高原スコリア	AD1235
						クロボク	黒色土	
Ⅲ	K-Ah	鬼界アカホヤ	3	K-Ah	鬼界アカホヤ	K-Ah	鬼界アカホヤ	6.5Ka
Ⅳ	MB0	黒褐色ローム	4	MB0	黒褐色ローム	MB0	黒褐色ローム	
Ⅴa	ML1	暗褐色ローム	5	ML1	暗褐色ローム	ML1	暗褐色ローム	
			6	Sz-S	桜島薩摩	Sz-S	桜島薩摩	11Ka
			7	ML1	褐色ローム	ML1	褐色ローム	
Ⅴb	Kr-Kb	小林軽石を含む層	8	Kr-Kb	小林軽石を含む層	Kr-Kb	小林軽石を含む層	15Ka
Ⅴc	MB1	暗褐色ローム	9	MB1	暗褐色ローム	MB1	暗褐色ローム	
			10	ML2		ML2	褐色ローム	
Ⅵ	AT	明褐色ローム (姶良Ｔｎ)	11	AT		AT	姶良 Tn	24.5Ka
Ⅶ	MB2,3	暗褐色ローム	12	MB2		MB2	暗褐色ローム	
						A-F m	姶良深港	26.5Ka
			13	MB3		A-Ot	姶良大塚	30Ka
						MB3	暗褐色ローム	
Ⅷ	ML3 以下	茶褐色ローム	14	ML3		ML3	褐色ローム	
						Kr-Aw	アワオコシ	41Ka
			15	ML4	明褐色ローム	ML4	明褐色ローム	
			16	Kr-lw		Kr-lw	イワオコシ	50Ka
			17		明黄褐色ローム		明黄褐色ローム	
			18		キンキラローム		キンキラローム	
			19	A-lw	姶良岩戸	A-lw	姶良岩戸	60Ka
			20	Aso-4	阿蘇４	Aso-4	阿蘇４	86~90Ka



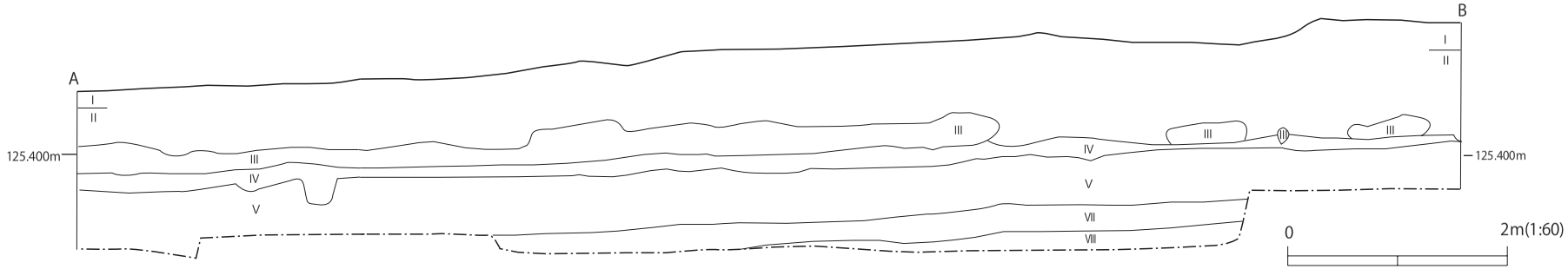
※VI(AT) は水成作用を受けており白色化が見られる。



第10図　南区土層断面位置図(1/1,200)



※VIは水成作用を受けており白色化が見られる。



第9図　南区土層断面実測図(1/60)

第３節　旧石器時代 ～ 縄文時代早期の遺構と遺物

1　旧石器時代～縄文時代早期の概要

旧石器時代の層は基本層序のⅤ層下部、縄文時代早期の層はⅣ層が相当する。南北両区共にⅢ層 (K-Ah) を重機で剥いだ後、各グリッド毎に設定した 25％部分を掘り下げ、縄文時代早期から旧石器時代への調査を行った。また、25％設定域内で遺構・遺物が確認された場合は隣接するグリッドに調査範囲を拡大し、精査を行った。

(1) 南区の概要

南区では、第８図に示す範囲と深度まで調査を行った。これらの面で旧石器時代相当の自然流路跡を３条検出した。遺物は、剥片７点が出土した。縄文時代早期では、自然流路跡を１条、遺構として陥し穴状遺構を３基、集石遺構を２基、土坑を４基を検出した。遺物は、剥片８点が出土した。

(2) 北区の概要

北区はⅥ層 (AT) まで調査を行った。ここでは、旧石器時代相当の自然流路跡を２条検出した。遺物は、石鏃２点、ナイフ形石器４点、剥片１点が出土した。縄文時代早期の遺構は、陥し穴状遺構を１基、土坑２基を検出した。以下、遺構と遺物について詳細を記す。

2　遺構と遺物

第Ⅰ文化層の精査で自然流路跡を検出した。遺構ではないが、当時の周囲の環境を知る上で大変重要であり、この地域の旧地形として報告書に記載する。

(1) 自然流路跡 (旧地形)

ア　旧石器時代

旧石器時代の自然流路跡を南北両区で検出した。南区の自然流路跡は、第 12 図ｂ、ｃ、ｄが該当する。

流路ｂは第 11 図 Q4.5W/R4.5/R-S4.5E の中央部よりやや左にある凹部で Va 層よりやや黒みが強い部分を中心に存在したと考えられる。この凹部を中心に左右 2m 近くⅥ層 (AT) が確認できなかった。また、Ⅴｂ層堆積が一定範囲に確認できた。これは流路跡の振幅に伴う浸食や水成堆積の影響と考えられる。

流路ｃは、第 11 図 S6.5W/T6.5E や S5.5W/T5.5E 中の浸食された凹部分に存在したと考えられる。S6.5W/T6.5E では凹部が複数確認されている。これらは、S5.5W/T5.5E の凹部と比較すると深度は浅いが、その形状から水成浸食の影響と思われる。また流路の振幅範囲もⅥ層 (AT) が確認できない部分が相当すると考えられる。

流路ｄは、第９図 H-G の中央部にある凹部と E-F のⅣ～Ⅴ層から掘り込まれた凹部を結ぶ経路上に存在したと考えられる。E-F のⅥ層 (AT) 中には水成作用を受けたと思われる白色化が確認できた (第 12 図)。

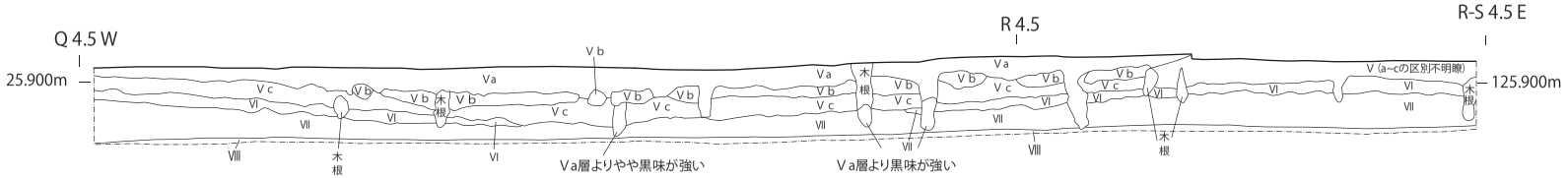
北区の自然流路跡は、第 14 図 e、f が該当する。

流路ｅは、第 13 図 G-H の中央部でⅤ層から掘り込まれた凹部付近に存在したと考えられる。G-H の中央から左にかけⅥ層 (AT) が確認できない部分と水成と見られる変色域 (第 14 図) とがほぼ重なることから、この範囲に振幅があったと思われる。また、位置的に南区の流路ｄに繋がると考えられる。

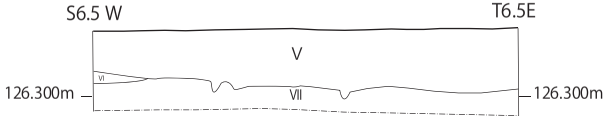
流路ｆは、第 13 図 E-F のⅤ層から掘り込まれた凹部と A-B の凹部を結ぶ経路上に存在したと考えられる。途中の C-D では左部分でⅥ層 (AT) が確認されておらずこの部分を流れていたと思われる (第 14 図)。

イ　縄文時代早期

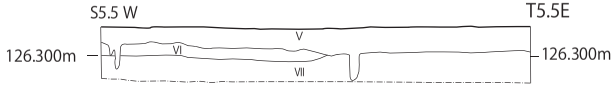
縄文時代早期の自然流路を南区で検出した。第 12 図で示すａが該当すると考える。第 11 図 Q4.5W/R4.5/R-S4.5E では、R4.5 を挟む形で凹部を形成しており凹部の中心線が鉛直より傾き、流路が蛇行した様子が伺える。また調査区内の南壁にも同様の凹部が見られ、凹部の底の部分にやや黒味が残ることから Va 層より以前の流れと推測でき、縄文時代早期相当の自然流路跡であると考えられる。



Q4.5W/R4.5/R-S4.5E

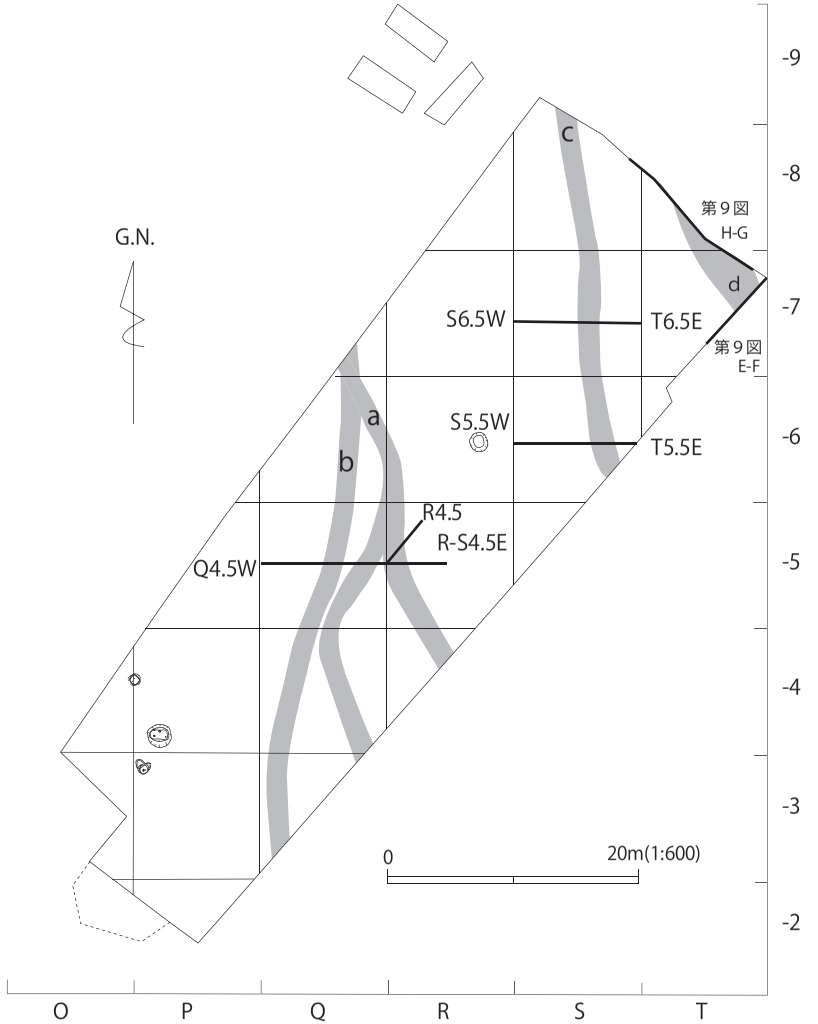


S6.5W/T6.5E

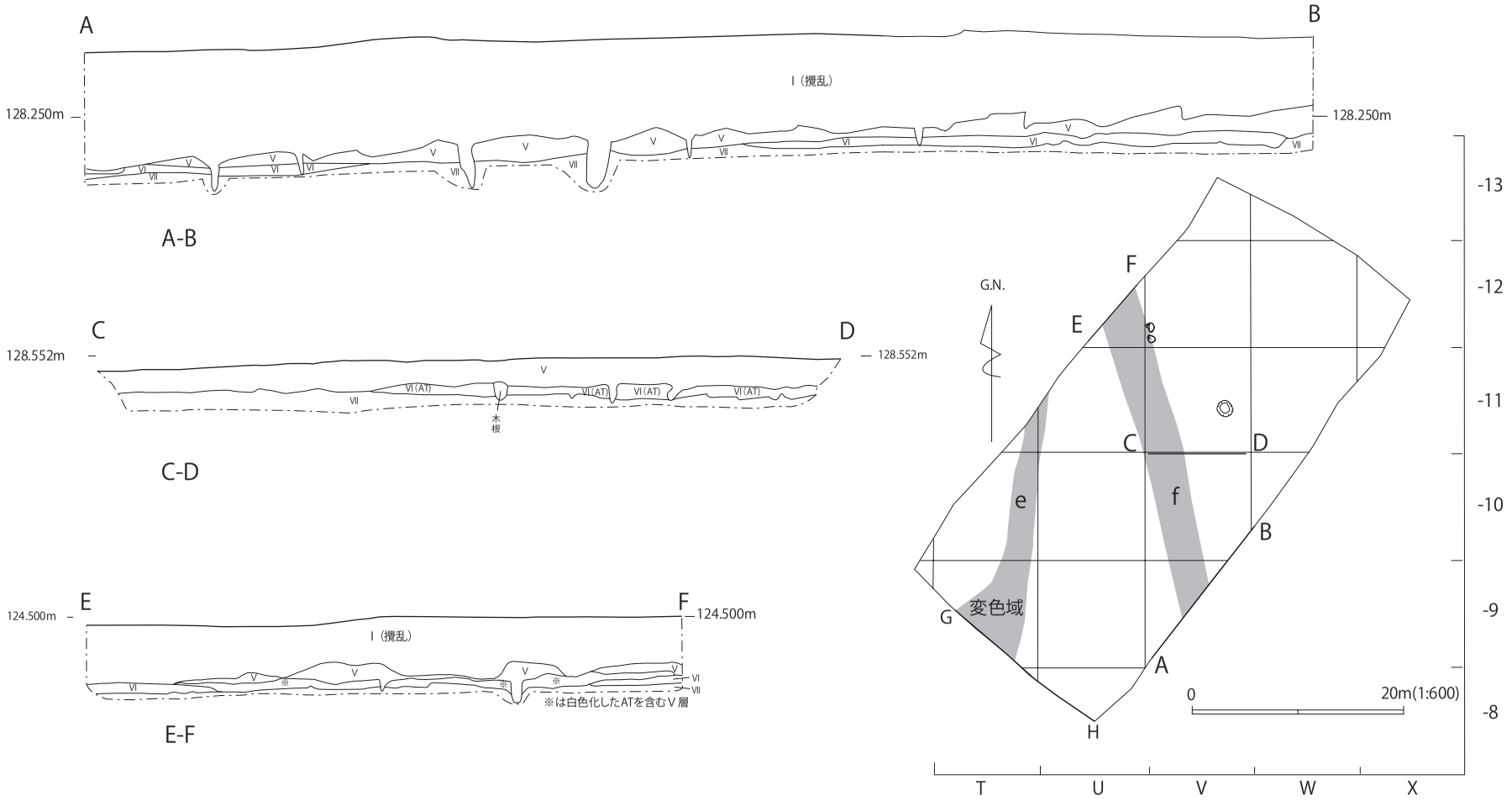


S5.5W/T5.5E

第 11 図　南区土層断面実測図 (1/80)　0　2m(1:80)

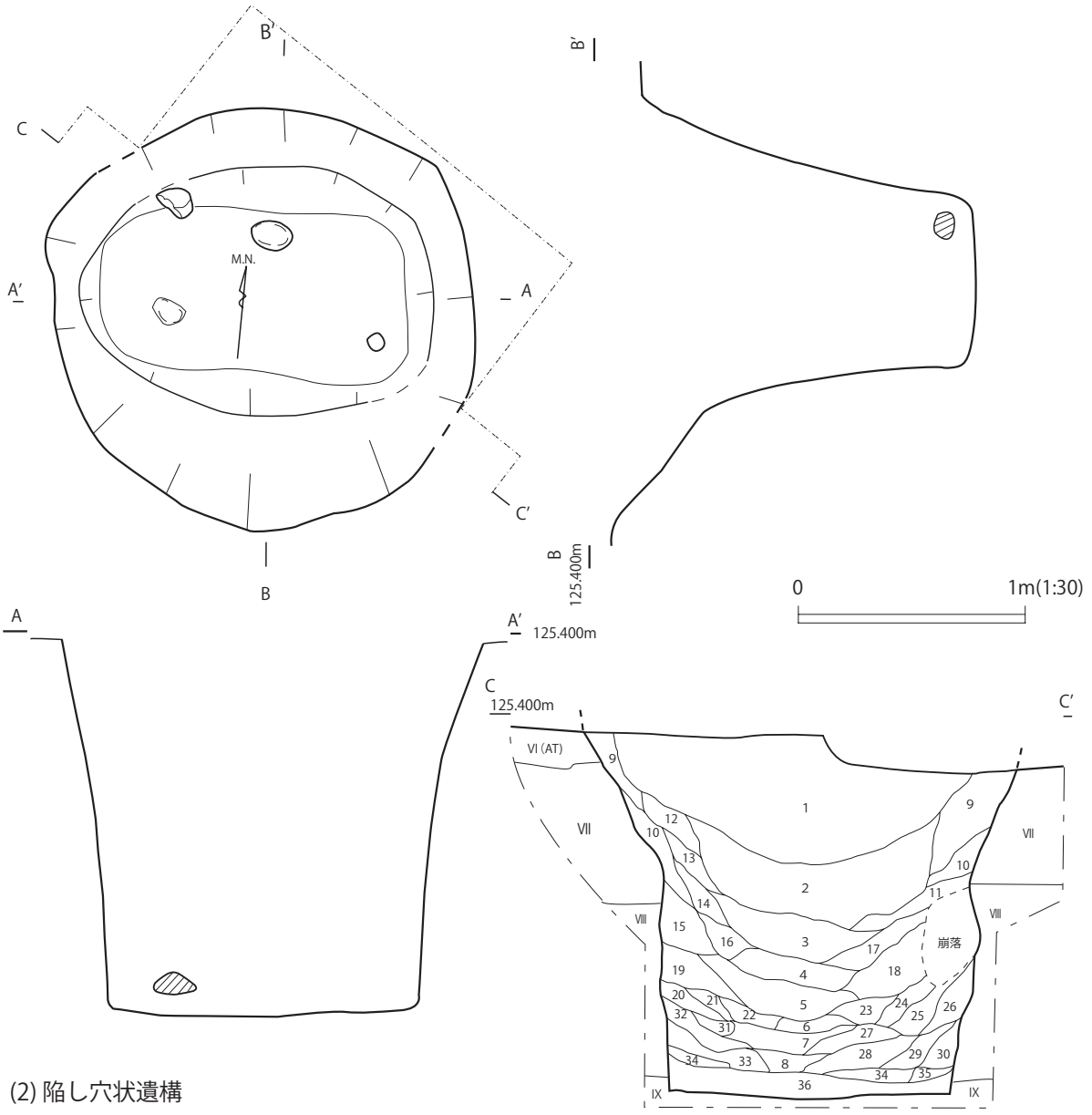


第 12 図　南区自然流路跡分布図 (1/600)



第 14 図　北区自然流路跡分布図 (1/600)

第 13 図　北区土層断面実測図 (1/80)



(2) 陥し穴状遺構

S102 （第 7・15 図）

長径 2.1m、短径 2.08m、残深 1.67m で円形を呈する。検出面はⅥ層 (AT) 上面である。

遺構検出面上面からの埋土は、黒～黒褐色土を主体とし、Ⅵ層 (AT) を多く含む埋土で、弱粘質で固くしまっている。中層 (3~29 層) は、黒褐色土を主体にⅥ層 (AT) ブロックをやや多めに含む埋土で、粘性がやや強いがしまりはやや弱い。床面付近は粘性が強い明褐色～黒褐色土で、Ⅷ層 (赤褐色ローム) を含みしまりはまちまちである。遺構の掘り込みはⅨ層 (赤褐色砂質土) に達していた。また、尾鈴山酸性岩類礫 (非被熱) を含め礫が 3 個出土している。

土層注記
1：黒色土 10YR(2/1)、直径 1㎜以下の白色粒子をやや多く含む、しまりきわめて強い、粘性弱い。
2：1 をマトリクスに、直径 30㎜以下のⅥ層ブロックをマーブル状にやや多く含む、しまりきわめて強い、粘性弱い。
3：黒褐色土 10YR(2/1.5)、直径 30 ～ 50㎜のⅥ層ブロックをマーブル状に多く含む、しまりきわめて強い、粘性弱い。
4：黒褐色土 10YR(2/1.5)、直径 30 ～ 50㎜のⅥ層ブロックをやや多く含む、しまりきわめて強い、粘性弱い。
5：黒褐色土 7.5YR(2.5/2)、直径 20 ～ 30㎜のⅥ層ブロックをマーブル状に多く含む、しまり弱い、粘性やや強い。
6：黒褐色土 7.5YR(2.5/2)、直径 10㎜のⅥ層ブロックをごくわずかに含む、しまりやや弱い、粘性やや強い。
7：黒褐色土 7.5YR(2.5/2)、直径 10㎜のⅥ層ブロックを多く含む、しまり弱い、粘性やや強い。
8：黒褐色土 7.5YR(2.5/2)、直径 10㎜のⅥ層ブロックをごくわずかに含む、しまりやや弱い、粘性やや強い。
9：黒褐色土 7.5YR(2/1.5)、Ⅵ層粒子を含む、しまり弱い、粘性やや強い。
10：黒褐色土 7.5YR(2/2)、Ⅵ層粒子を含む、しまり弱い、粘性弱い。
11：黒色土 7.5YR(1.7/1)、しまり弱い、粘性弱い。
12：黒褐色土 7.5YR(2/2)、直径 10 ～ 30㎜のⅥ層ブロックをマーブル状にわずかに含む、しまりきわめて強い、粘性弱い。
13：黒褐色土 7.5YR(2/2)、直径 10 ～ 30㎜のⅥ層ブロックをマーブル状にわずかに含む、しまり強い、粘性弱い。
14：黒褐色土 7.5YR(2/2)、直径 20 ～ 50㎜のⅥ層ブロックをマーブル状に多く含む、しまりきわめて強い、粘性弱い。
15：暗褐色土 7.5YR(2.5/2.5)、直径 10 ～ 50㎜のⅧ層ブロックをマーブル状に多く含む、しまりやや弱い、粘性強い。
16：黒褐色土 7.5YR(2/2)、直径 10 ～ 20㎜のⅥ層ブロックをマーブル状にやや多く含む、しまりきわめて強い。
17：黒褐色土 7.5YR(2/2)、直径 5 ～ 10㎜のⅥ層ブロックをやや多く含む、しまり弱い、粘性弱い。
18：黒褐色土 7.5YR(2/2)、直径 10 ～ 20㎜のⅧ層ブロックをごくわずかに含む、しまり強い、粘性弱い。
19：黒褐色土 10YR(2.5/2)、直径 5 ～ 15㎜のⅧ層ブロックを多く含む、しまり弱い、粘性弱い。
20：黒褐色土 10YR(2/2)、しまりきわめて弱い、粘性強い。
21：黒褐色土 10YR(2/2)、Ⅷ層粒子を含む、しまり強い、粘性強い。
22：黒色土 10YR(2/1.5)、しまり強い、粘性強い。
23：黒色土 10YR(2/1.5)、直径 5 ～ 10㎜のⅧ層ブロックをわずかに含む、しまり弱い、粘性強い。
24：にぶい黒褐色土 10YR(4/2.5)、Ⅷ層を主体とする、しまり強い、粘性強い。
25：黒褐色土 10YR(2/2)、しまりやや弱い、粘性強い。
26：黒褐色土 10YR(2.5/2)、直径 10 ～ 20㎜のⅧ層ブロックをわずかに含む、しまりやや弱い、粘性強い。
27：黒褐色土 10YR(2/2)、直径 1 ～ 10㎜のⅧ層ブロックをわずかに含む、しまりやや弱い、粘性強い。
28：黒褐色土 10YR(2/2.5)、しまり強い、粘性強い。
29：黒褐色土 10YR(2/3)、しまり強い、粘性強い。
30：明褐色 7.5YR(5/6)、黒色土 10YR(2/1) が混じる、しまり弱い、粘性きわめて強い。
31：黒褐色 10YR(2/2)、直径 1 ～ 30㎜のⅧ層ブロックをわずかに含む、しまり弱い、粘性やや強い。
32：明褐色土 7.5YR(5/8)、Ⅷ層を主体とする、しまりやや弱い、粘性きわめて強い。
33：黒色土 10YR(1.7/1) しまり弱い、粘性強い。
34：明褐色土 7.5YR(5/6)、Ⅷ層をマトリクスに、しまりやや弱い、粘性きわめて強い。
35：暗褐色 7.5YR(3/2)、しまり弱い、粘性きわめて強い。
36: Ⅷ層を主体として黒褐色土がラミナ状に混じる。

第15図　S102（陥し穴状遺構）実測図(1/30)

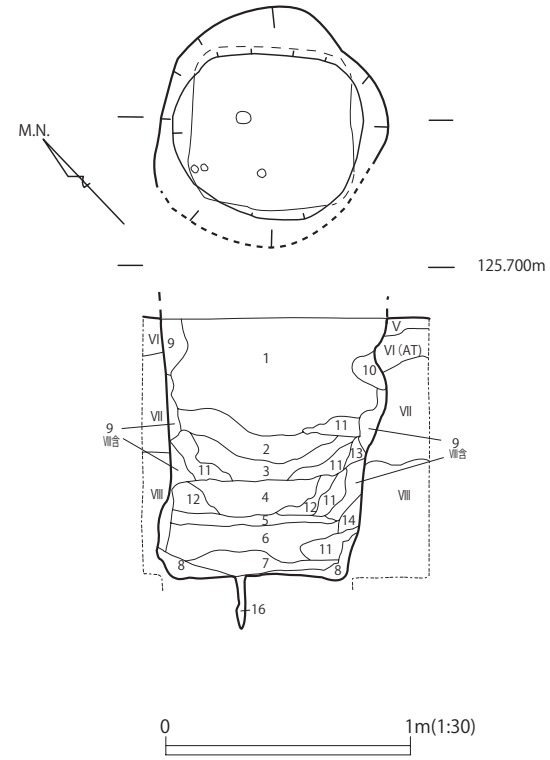
S103 （第 7・16 図）

長径 1.0m、短径 0.93m、残深 1.05m で不整円形を呈する。S102 と同様に検出面はⅥ層 (AT) 上面で、この土層で穴の輪郭が明瞭に確認できた。

遺構上面から 1/2 程度は、黒～黒褐色土を主体としⅥ層 (AT) 粒子をわずかに含む埋土で、しまりがきわめて強い。さらに床面に近づくと、黒～暗褐色土を主体にⅦ層 (暗褐色ローム) ブロックをごくわずかに含む埋土で、粘性がやや弱く、しまりもやや弱い。床面付近はⅧ層 (赤褐色ローム) を主体にⅣ層 (黒褐色土) が混在する埋土で、粘性は強いが、しまりはやや弱い。

遺構の掘り方は、Ⅷ層 (赤褐色ローム) に達していた。

底部から AT 層までの深さは約 0.8m である。床面には直径 8cm 程度の小穴が 3 箇所あり、杭の痕跡と考えられる。床面からの深さは 0.22 m であった。



土層注記
1：黒色土 10YR(1.7/2)、直径 1㎜以下の白色粒子をまばらに含む、しまりきわめて強い、粘性弱い。
2：黒色土 10YR(1.7/2)、直径 1㎜以下の白色粒子をやや多く、直径 1㎜以下のⅥ層由来の粒子をごくわずかに含む、しまりきわめて強い、粘性弱い。
3：黒褐色土 10YR(2/2)、直径 5㎜以下のⅥ層由来の粒子をやや多く、直径 20 ～ 30㎜のブロックをごくわずかに含む、しまりきわめて強い、粘性弱い。
4：黒褐色土 10YR(2.5/2)、直径 5㎜以下のⅥ層由来の粒子、直径 10㎜のブロックをやや多く、直径 30㎜のⅧ層由来のブロックを部分的にわずかに含む、しまり弱い、粘性やや強い。
5：黒色土 10YR(2/3)、直径 5㎜以下のⅥ層由来の粒子を多く、直径 20㎜のブロックを部分的にわずかに、直径 10㎜以下の層ブロックをごくわずかに含む、しまり弱い、粘性やや強い。
6：黒褐色土 10YR(2/2.5)、直径 1㎜以下のⅥ層由来粒子をごくわずかに、直径 20㎜のブロックを部分的にごくわずかに、直径 20㎜のⅧ層ブロックと直径 5㎜以下の粒子をやや多く含む、しまり弱い、粘性やや強い。
7：黒褐色土 10YR(2/3)、直径 5㎜以下のⅦ層由来の粒子を多く、直径 30㎜のブロックをマーブル状にやや多く含む、しまりやや弱い、粘性やや強い。
8：褐色土 7.5YR(4/6)、Ⅷ層を母体に黒褐色土が混在する、しまりやや弱い、粘性やや強い。
9：黒褐色土 10YR(2/2)、Ⅴ層由来、しまり強い、粘性やや強い。
10：暗褐色 10YR(2.5/3)、9 に似るが、直径 1㎜以下のⅥ層粒子を全体的に多く含む、しまりやや弱い、粘性弱い。
11：暗褐色土 2.5Y(2.5/1)、直径 5㎜以下のⅥ層粒子と直径 10 ～ 40㎜のⅥ層ブロックをきわめて多く含む、しまりやや弱い、粘性やや強い。
12：黒褐色土 10(YR2/2)、直径 5㎜以下のⅥ層粒子をやや多く含む、しまりやや弱い、粘性やや強い。
13：黒褐色土 2.5Y(3/2.5)、Ⅶ層ブロックをマーブル状にやや多く含む、しまりやや弱い、粘性やや強い。
14：黒褐色土 10YR(2.5/3)、Ⅶ層ブロックをマーブル状にやや多く含む、しまりやや弱い、粘性やや強い。
15：8 層と似るが黒褐色土に比率が高い。
16：暗褐色土 7.5YR(3/5)、しまりやや弱い、粘性やや強い。

第16図　S103(陥し穴状遺構)実測図(1/30)

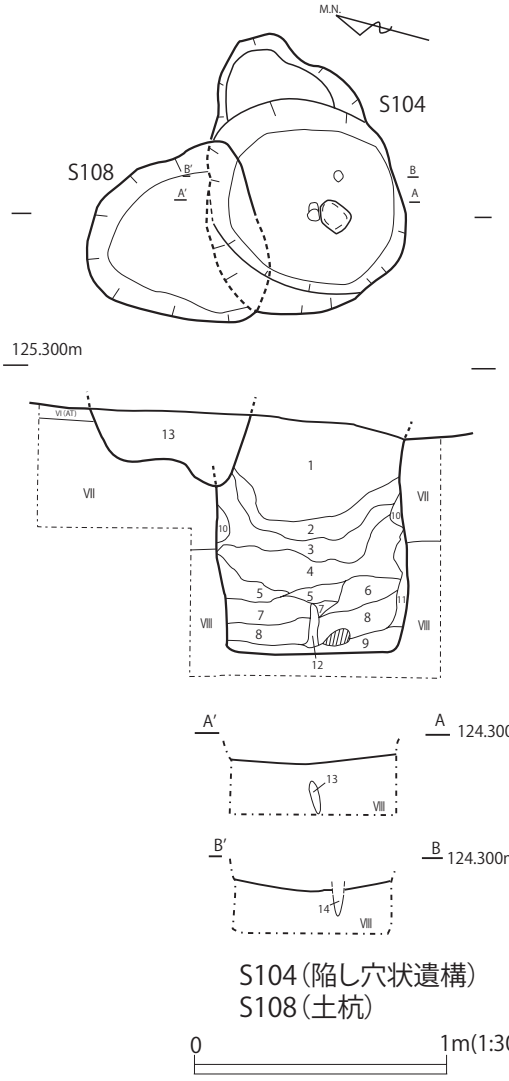
S104(陥し穴状遺構)
S108(土坑)(第 7・17 図)

Ⅵ層 (AT) 上面において S104 と S108 が切り合った状態で検出した。半截の後、土層断面を確認した結果 S108 はⅦ層を主体とし、粘性は弱くしまりのある暗褐色土を埋土とした土坑であることが分かった。また S104 は長径 1.1m、短径 0.8m、残深 0.93m で途中から円形を呈する陥し穴状遺構であることが確認できた。また、S108 と S104 の切り合い関係では、S108 が S104 を切っている。

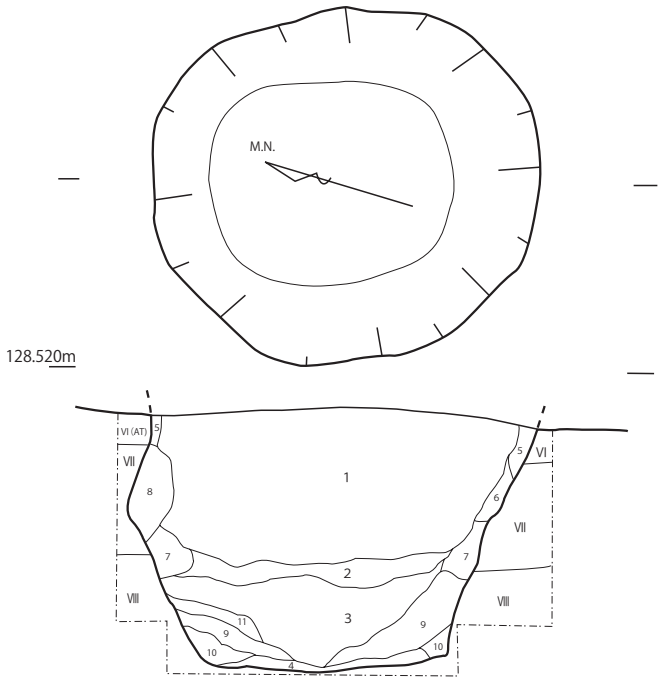
S104 は遺構上面から 1/2 程度は黒褐色土を主体としてⅥ層 (AT) 由来の粒子をわずかに含む埋土で、粘性はやや弱いが非常に固くしまっている。中層 (4~8 層) は黒～黒褐色土を主体としてⅥ層 (AT) 由来の粒子をわずかに含む埋土である。床面は、Ⅷ層 (赤褐色ローム) に達し、粘性の強い明褐色土に覆われていた。また、床面には直径 3cm の小穴が開いており、穴の中心に傾斜が見られた。床面からの深さは 20cm であった。また、床面付近から剥片が出土した (第 18 図 1)。これは、流紋岩を用いることから後期旧石器時代の所産である可能性を指摘できるが、遺構の帰属年代を示すものとは断定できない。

S112 （第 6・17 図)

長径 1.5m、短径 1.4m、残深 1.05m で不整円形を呈する。検出面はⅥ層 (AT) 上面で、ほぼ円形に近いプランが確認できた。遺構埋土の上層 (1 層) から中層 (2~3 層) にかけては黒褐色土を主体とし白色粒子をわずかに含み、しまりがきわめて強い。中層 (2~3 層) は、黒～暗褐色土にⅥ層 (AT) 粒子を多く、Ⅷ (茶褐色ローム) 粒子をごくわずかに含む埋土で、粘性は弱くしまりが弱いものが多くなる。床面付近は黒～暗褐色Ⅷ層 (茶褐色ローム) を主体にⅥ層 (AT) ブロックを一部に含む埋土で、粘性は弱くしまりは強い。遺構は、Ⅷ層 (茶褐色ローム) まで掘り込まれていた。

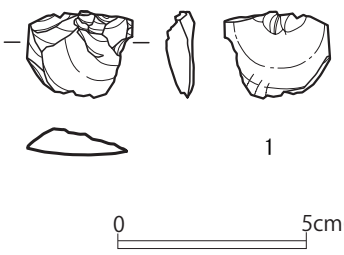


土層注記
1：黒褐色土 10YR(2/1.5)、直径 1㎜以下の白色粒子をまばらに含む、しまりきわめて強い、粘性弱い。
2：黒褐色土 10YR(2/1.5)、直径 1㎜以下の白色粒子をごくわずかに、直径 5㎜以下のⅥ層粒子をごくわずかに含む、しまりきわめて強い、粘性弱い。
3：黒褐色土 10YR(2/1)、直径 10㎜以下のⅥ層ブロックをまばらに含む、しまり強い、粘性弱い。
4：黒褐色土 10YR(2/2.5)、直径 30㎜以下のⅥ層ブロックを多く含むしまり弱い、粘性弱い。
5：黒色土 2.5Y(2/1)、Ⅵ層ブロックをマーブル状に多く含む、しまりやや弱い、粘性やや強い。
6：黒色土 2.5Y(2/1)、Ⅵ層ブロックをきわめて多く含む、しまりやや弱い、粘性やや強い。
7：黒褐色土 10YR(2/1.5)、直径 30㎜以下のⅥ層ブロックを部分的にわずかに含む、しまりやや弱い、粘性やや強い。
8：黒褐色土 10YR(2/2.5)、直径 20㎜以下のⅥ層ブロックを部分的にわずかに直径 5㎜以下のⅥ層ブロックもわずかに含む、しまり弱い、粘性きわめて強い。
9：明褐色土 7.5YR(5/6)、8 層をわずかに含む、しまりやや弱い、粘性強い。
10：暗褐色土 10YR(3/2.5)、しまりやや弱い、粘性やや強い。
11：明褐色 7.5YR(5/6)、しまりやや弱い、粘性強い。
12：暗褐色 10YR(3/3)、直径 30㎜のⅥ層を主体、しまり弱い、粘性やや強い。
13：暗褐色 10YR(2.5/2.5)、Ⅶ層を主体、しまり強い、粘性弱い※遺構ではなく、崩落を示すものと思われる。
14：Ⅷ層を主体とする。



土層注記
1：黒褐色土 10YR(1.85/1.5)、直径 1㎜以下の白色粒子をごくわずかに含む、しまりきわめて強い、粘性強い。
2：黒褐色土 10YR(2/2)、直径 1㎜以下のⅥ層粒子をまばらに含む、しまりきわめて強い、粘性強い。
3：黒褐色土 10YR(2/2.5)、1 ～ 5㎜のⅥ層粒子を多く含む、一部Ⅷ層粒子を含む、しまりきわめて強い、粘性強い。
4：褐色土 10YR(4/6)、Ⅷ層を主体とする、しまりやや弱い、粘性弱い。
5：黒褐色土 10YR(2/3)、しまりやや弱い、粘性弱い、Ⅵ層を主体とする。
6：黒褐色土 10YR(2/2)、しまり弱い、粘性弱い。
7：黒褐色土 10YR(2/3)、直径 1㎜以下のⅥ層粒子を多く含む、しまり弱い、粘性弱い。
8：黒褐色 10YR(2/3)、直径 1㎜以下のⅥ層粒子を多く含む、6 層が崩落し変形したと思われる、しまりやや弱い、粘性弱い。
9：黒褐色土 10YR(2/2.5)、直径 1 ～ 10㎜Ⅷ層ブロックをまばらに含む、しまり弱い、粘性やや強い。
10：褐色土 7.5YR(4/3)、Ⅷ層を主体に 9 層が混じる、しまりやや弱い、粘性強い。
11：暗褐色土 10YR(2.5/3)、直径 20 ～ 40㎜のⅥ層ブロックを一部含む、しまりやや強い、粘性弱い。

第17図　S104(陥し穴状遺構) S108(土坑)・S112(陥し穴状遺構)実測図(1/30)



第 18 図　S104 出土石器実測図 (1/2)

(3) 集石遺構

S260 （第 7・19 図）

南区 P4 グリッド NW に位置し、検出面はⅥ層 (AT) 上位のⅤ層下面である。長径 1.55m、短径 0.7m の範囲に 5 点で、礫石材はすべて尾鈴山酸性岩類礫である。これらには顕著な赤化は見られなかった。配石したと思われるが、礫の接合関係はない。

S261 （第 7・19 図）

南区 Q5 グリッド NW に位置し、Ⅲ層 (K-Ah) 上面で検出した。長径 0.9m、短径 0.3m の範囲に 2 点で、石材はいずれも尾鈴山酸性岩類礫である。これらにはごく弱い赤化が見られた。掘り込みはなかったが差し込まれるように検出された。礫の接合関係はない。

(4) 土坑

S105 （第 7・20 図）

南区 O3 グリッド NE に位置し、長径 0.84m、短径 0.5m で不定形を呈する。Ⅵ層 (AT) 上面で検出した。埋土は黒褐色土できわめて固く白色粒子をわずかに含んでいた。礫や遺物は出土しなかった。

S106 （第 7・20 図）

南区 04 グリッド SE に位置し、長径 0.54m、短径 0.45m で楕円形を呈する。Ⅵ層 (AT) で検出した。埋土は、上層が黒褐色土で白色粒子を含みきわめて固い。中層から下層にかけて次第に固さが弱くなる。礫や遺物は出土しなかった。

S107 （第 7・20 図）

南区の南部調査区外 O2 グリッド NE に位置し、長径 0.97m、短径 0.47m で楕円形を呈し、床面にピット状の掘り込みをもつ。Ⅵ層 (AT) 上面で検出し、埋土は黒褐色でⅥ層 (AT) またはⅤb 層 (Kr-Kb) 由来の白色粒子を多く含みきわめて固い。底面には、粘性の弱い黒色土がある。礫や遺物は出土しなかった。

S109 （第 7・20 図）

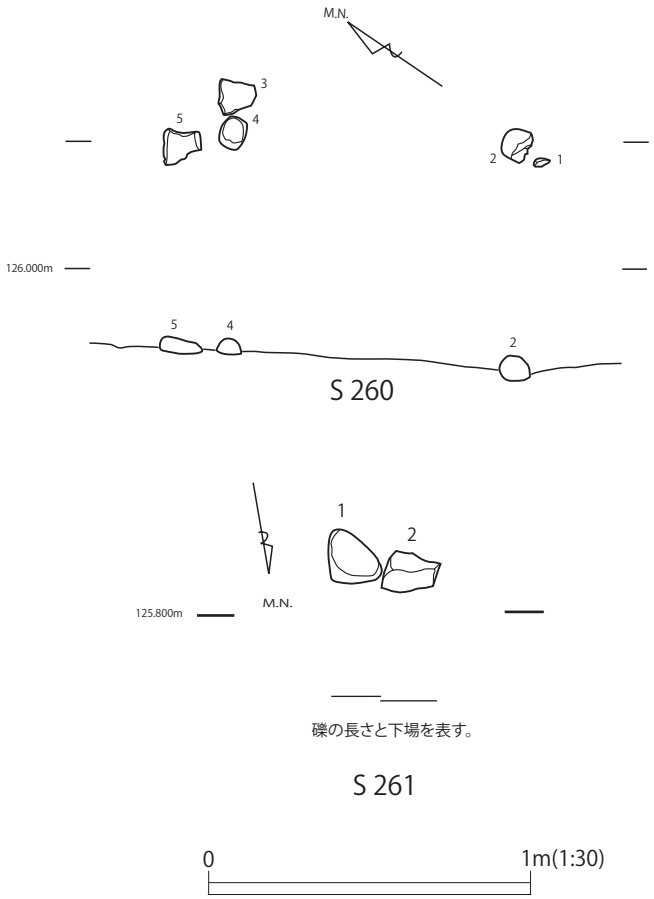
南区 R6 グリッド NE に位置し、長径 1.03m の不定形を呈する。Ⅵ層 (AT) 上面で検出した。埋土は黒褐色で白色粒子を含みきわめて固い。底面は白色粒子の密度が低く、黒褐色よりわずかに黒い色調が見られる。礫や遺物は出土しなかった。

S110 （第 6・20 図）

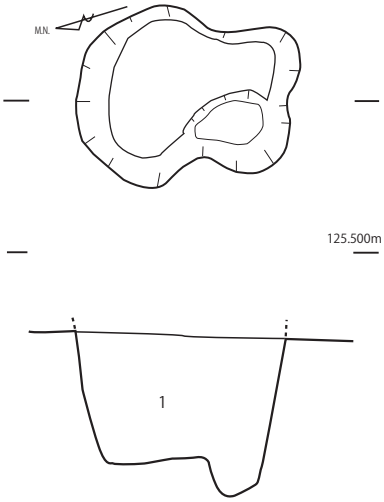
北区 V12 グリッド SW に位置し、長径が 0.8m、短径が 0.64m の楕円形を呈する。Ⅵ層 (AT) で検出した。埋土は上層が灰黄褐色土でⅥ層 (AT) 粒を含み硬質である。中層は一部硬質だが大部分は暗褐色土で軟質でオガクズ状に削れる。下層は暗褐色土で硬質である。礫や遺物は出土しなかった。

S111 （第 6・20 図）

北区 V12 グリッド SW に位置し、長径が 0.8m の不定形を呈する。Ⅵ層 (AT) 上面で検出した。埋土は上層が S110 と同じ灰黄褐色土で硬質である。中層は暗褐色できわめて固い。下層は、中層よりやや明るい色調の暗褐色土でやや固い。礫や遺物は確認できなかった。



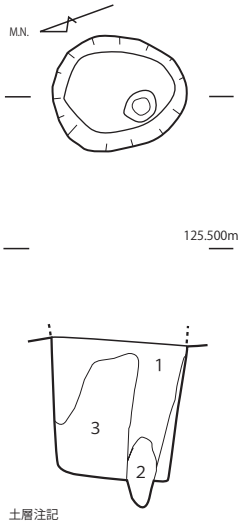
第19図　集石遺構実測図(1/30)



土層注記

1:黒褐色土10YR(2/2.5)白色粒子をわずかに含む、しまりきわめて強い。

S105



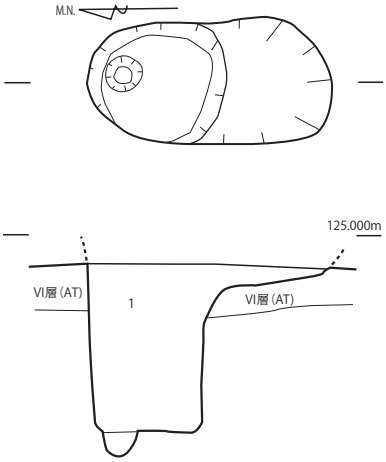
土層注記

1: 黒褐色土10YR(2/2.5)、白色粒子を含む、しまりきわめて強い。

2: 黒褐色土10YR(2/2)、しまり弱い。

3: 黒褐色土10YR(3/2)、しまりやや強い。

S106

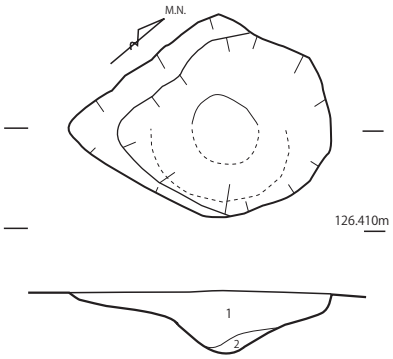


土層注記

1: 黒褐色土10YR(2.5/3)、ATまたはK-ah起源と思われる白色粒子を多く含む、しまりきわめて強い。

2: 黒色土10YR(2/1)、しまりきわめて弱い。

S107

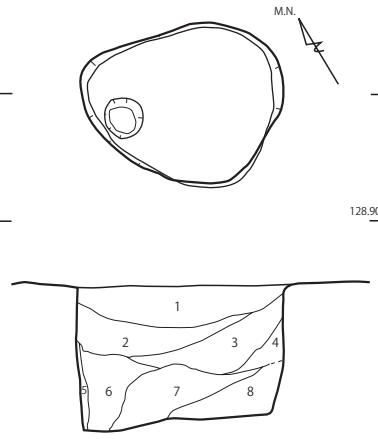


土層注記

1: 黒褐色土10YR(2.5/3)、白色粒子をわずかに含む、しまりきわめて強い。

2: 黒褐色土10YR(2.5/3)1よりわずかに暗い色調で白色粒子の密度が低い。

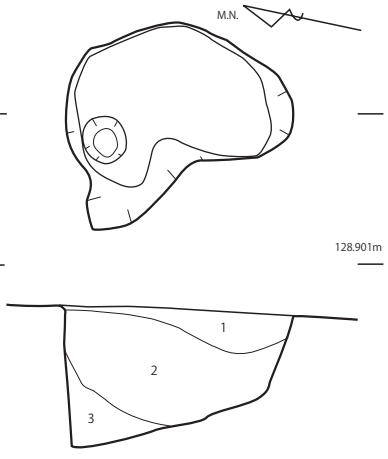
S109



土層注記

1: 灰黄褐色土10YR(4/2)、硬質、AT粒を含む、S111の１層と同質のもの。
2: 黒褐色土10YR(3/2)、非常に硬質、やや粘性あり。
3: 暗褐色土10YR(3/3)、非常に硬質、2層よりも固い。
4: 暗褐色土10YR(3/3)、直径3mmのATを含む、やや硬質。
5: 暗褐色土10YR(3/3)、おがくす状に削れる、軟質。
6: 黒褐色土10YR(3/1)、樹根と思われる、やや軟質。
7: 暗褐色土10YR(3/3)、硬質、粘性なし。
8: 暗褐色土10YR(3/4)、直径5mmの黒色土ブロックをわずかに含む、硬質、粘性なし。

S110



土層注記

1: にぶい黄褐色土10YR(4/3)、AT粒を含む、砂質。

2:暗褐色土10YR(3/3)、直径1cm程度のブロック状に削れる、非常に砂質。

3: 暗褐色土10YR(3/3)、やや明るい色調、２より軟質。

S111

第20図　土坑実測図(1/30)

0　1m(1:30)

3　遺物

(1) 南区出土石器 (第 21・22 図)

2・3 はチャート製の打製石鏃である。2 は上半部、3 は先端・下半部を欠損するが、いずれも凹基鏃であろう。4 はホルンフェルス製の不定形剥片である。背面に礫面を残す。5 はホルンフェルス製の幅広剥片である。打撃時の衝撃により、剥離軸に沿って折損している。6 は珪質頁岩製の剥片である。末端部のみ残存する。7 は珪質頁岩製の剥片である。背面末端に打面転位以前の作業面を残す。8 は頁岩製の打製石斧と考えられ、9 の剥片が接合する。背面には礫面を大きく残し、縁辺にはやや細かな二次加工痕が観察される。石質がやや粗質であり、石核の可能性は低いため、打製石斧と判断した。10 は珪質頁岩製の縦長剥片である。11 は良質の珪質頁岩を用いた剥片である。背面の剥離面構成から本来は石刃に類する縦長剥片であった可能性が高い。12 はホルンフェルス製の不定形剥片である。13・14 は尾鈴山酸性岩類製の不定形剥片である。

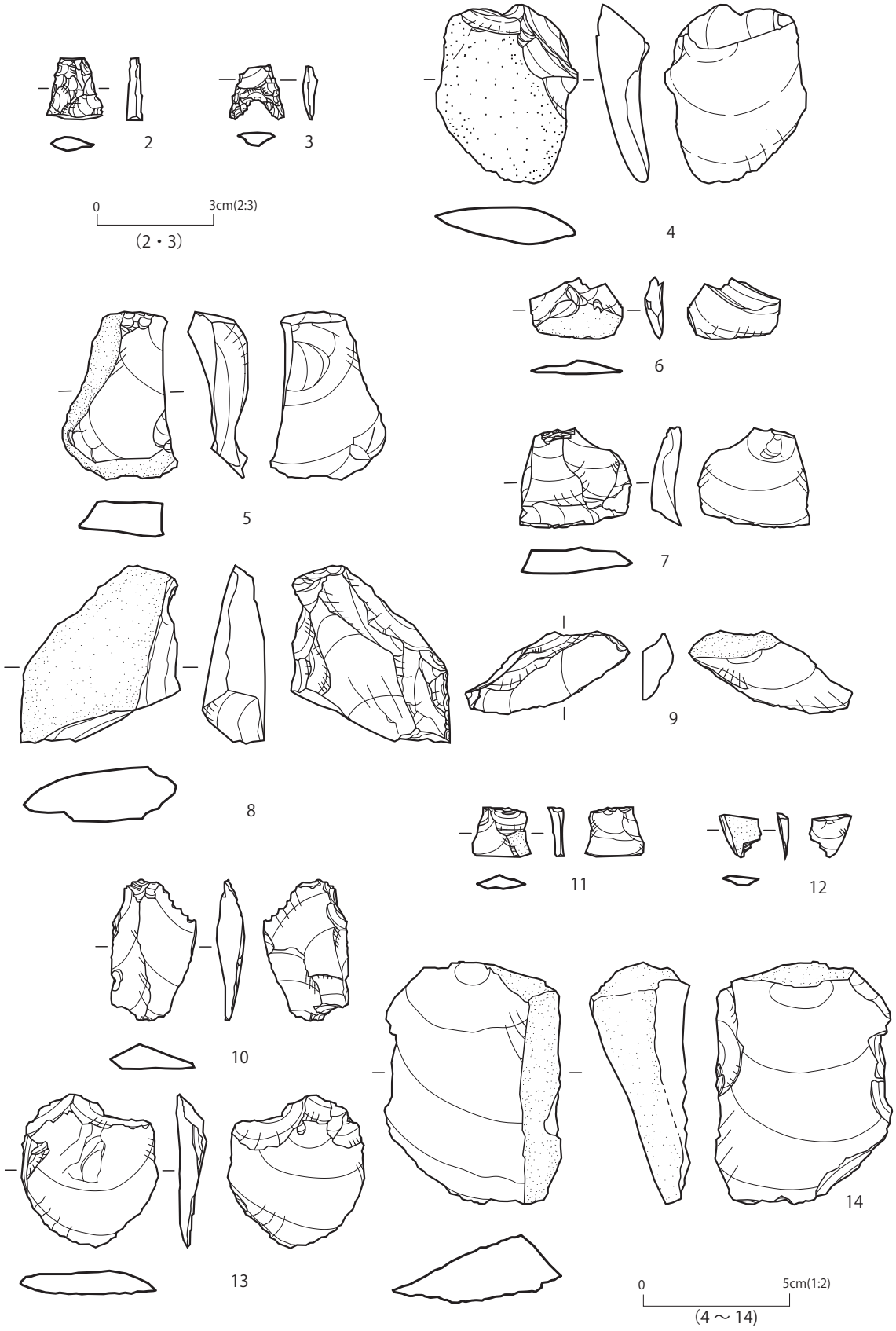
15 は尾鈴山酸性岩類製の縦長剥片である。16・17・18・19 は尾鈴山酸性岩類製の不定形剥片である。20 は尾鈴山酸性岩類製の搬入礫である。目立った加工・使用痕は認められないが、遺跡内に意図的に持ち込まれた可能性が高い。

(2) 北区出土石器 (第 23 図)

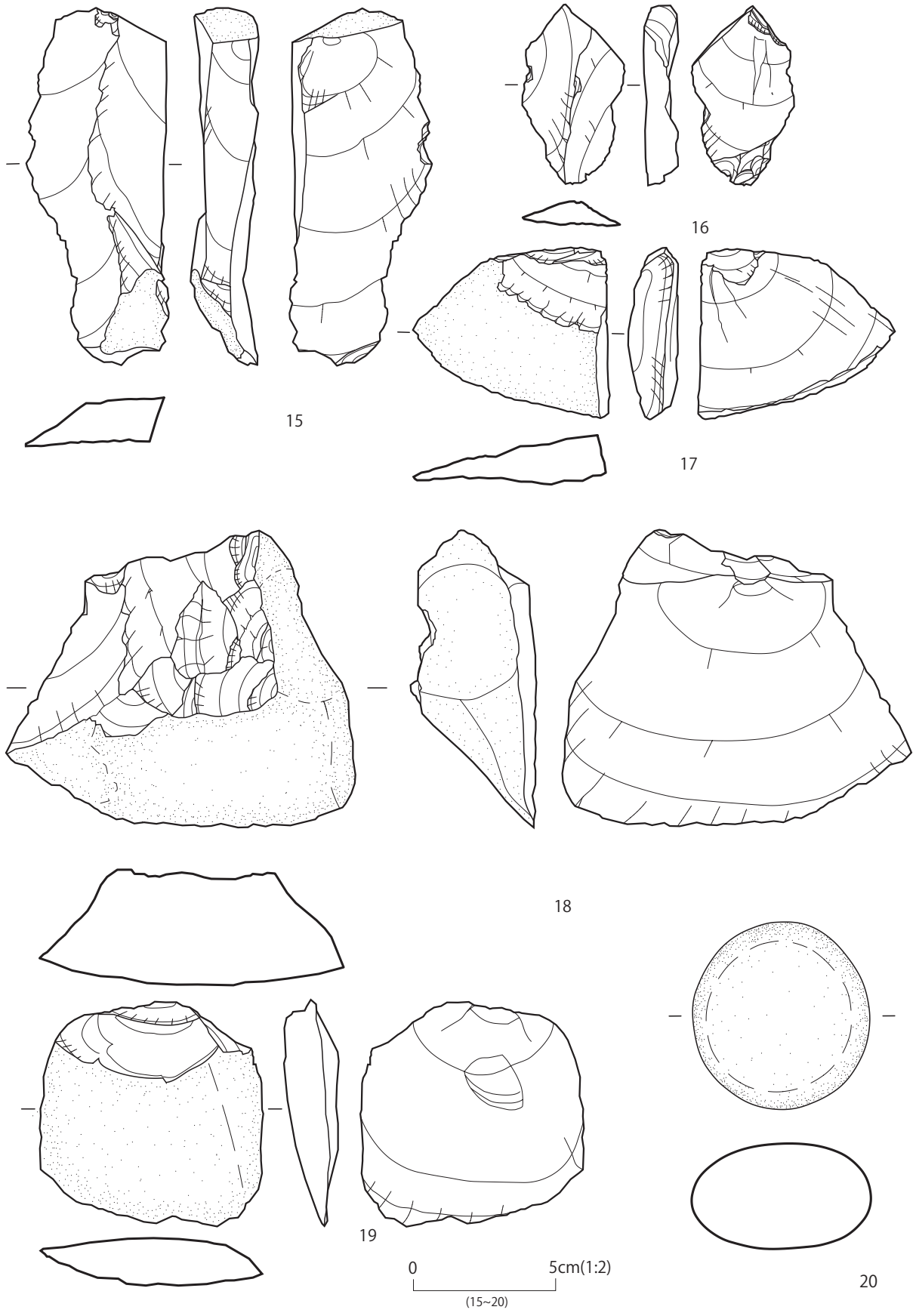
21 はチャート製の打製石鏃である。片方の脚部を欠損するが、いずれも凹基鏃であろう。22 も凹基鏃であるが、風化の激しいホルンフェルスを用い、剥離面の判読は困難である。23 はいわゆる狸谷型ナイフ形石器であり、良質の珪質頁岩を用いる。24 はいわゆる今峠型ないし北牛牧型ナイフ形石器の範疇に含まれるもので、流紋岩製の逆「ノ」の字状剥片を素材とし、やや平坦な剥離で基部を作出する。先端を欠損する。25 は良質の黒曜石製 (いわゆる霧島産) を用いた角錐状石器である。先端・基部を欠損する。背面に礫面を多く残した横長剥片を素材とする。26 は良質のチャート製の縦長剥片を素材とし器体下半部側縁部にやや不規則な二次加工を施す。背面左側縁は背面側へ、右側縁は腹面側に向けた錯向剥離が観察される。腹面への加工はやや平坦な剥離でバルブの厚みを減じるようになされている。先端部にはいわゆる衝撃剥離痕が観察されるが、後にその縁辺に不規則な剥離痕が重なる点が特筆される。27 はホルンフェルス製の縦長剥片である。28 はチャートないし珪質頁岩製の不定形剥片である。

(3) 事前調査時出土石器 (第 24 図)

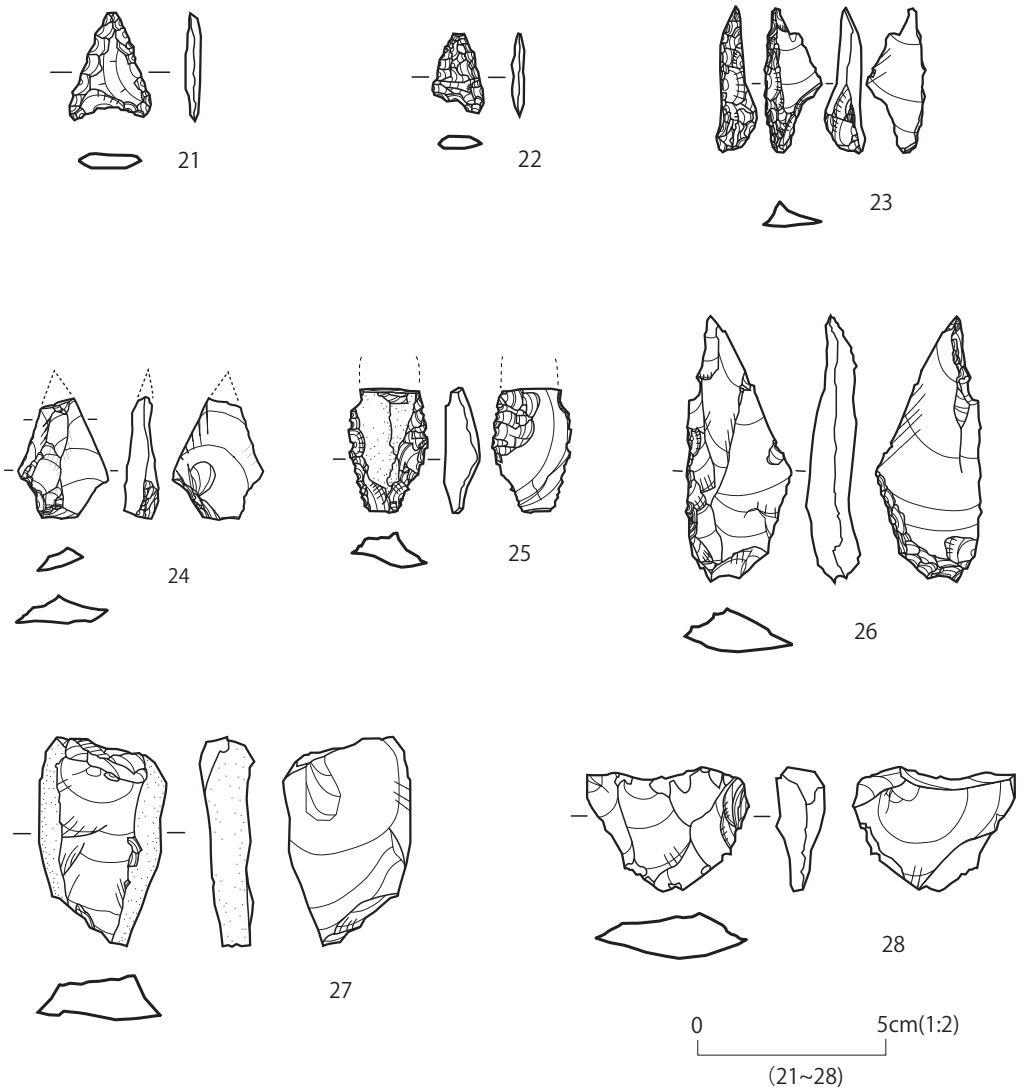
29 は良質の黒曜石を用いた細石刃である。頭部・尾部を折断して除去したものと推定される。30・31 はチャート製の打製石鏃である。30 は先端部のみ残存し全体形は不明である。31 は凹基鏃であるが脚部が菱形に尖る点が注目される。32 は良質の珪質頁岩製の縦長剥片である。やや短寸ながら同規格の剥片を生産しようとしたことが背面構成から読み取れる。33 はホルンフェルス製の石核である。34 はホルンフェルス製の削器である。背面が礫面で構成される横長剥片を素材とする。35 は尾鈴山酸性岩類製の縦長剥片である。36 はホルンフェルス製の石核である。風化が著しく剥離面の厳密な読み取りは困難である。37 は流紋岩あるいは凝灰岩を用いたナイフ形石器である。ほぼ一側縁であるが基部は辛うじて二側縁加工を施す。石刃を素材とする。38 はホルンフェルス製の二次加工剥片である。バルブ付近に不規則な微細剥離痕を残す。39 は姫島産黒曜石あるいは姫島産ガラス質安山岩を用いた三角形 (平基) 打製石鏃である。薄い剥離で丁寧に仕上げられている。40 はチャート製の二次加工剥片である。背面右側縁にやや不規則ではあるがスクレイパーエッヂ状の二次加工痕が認められる。



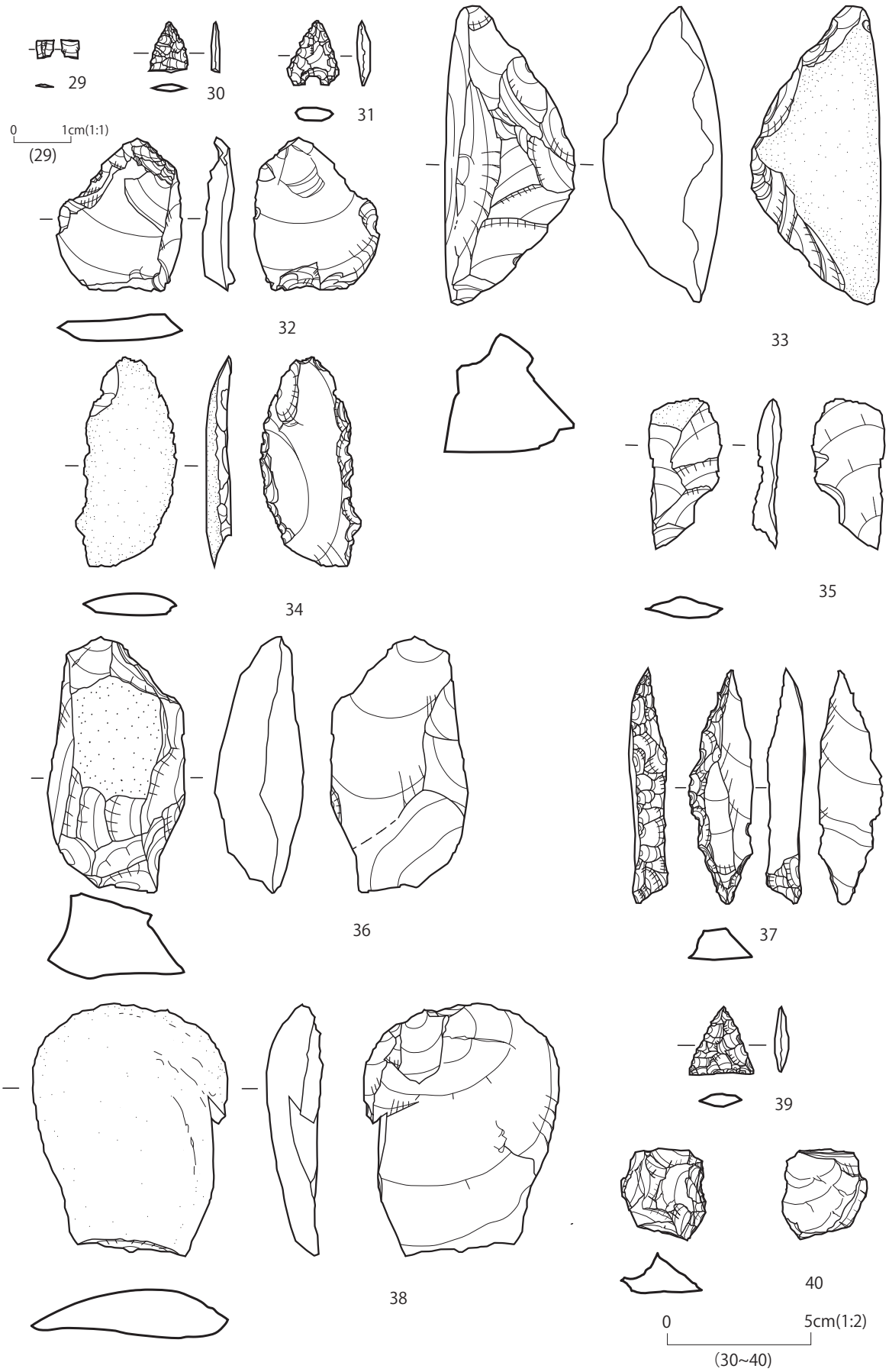
第 21 図　南区旧石器時代～縄文時代早期出土石器実測図 (縮尺は各スケールに表示)



第 22 図　南区縄文時代早期出土石器実測図 (1/2)



第 23 図　北区旧石器時代～縄文時代早期出土石器実測図 (1/2)



第 24 図　事前調査旧石器時代～縄文時代早期出土石器実測図

第２表　石器計測表

番号	器種	調査区	注記	層	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
1	剥片	南区	Ｓ１０４オトシ穴	2~4	流紋岩	2.20	2.80	0.70	2.30	
2	打製石鏃	南区	Q6SW	Ⅰ	チャート	1.60	1.40	0.40	0.90	トレンチャー攪乱より出土
3	打製石鏃	南区	Q6NE	Ⅱ	チャート	1.40	1.40	0.40	0.50	U 字
4	剥片	南区	58	Ⅴ	ホルンフェルス	6.10	4.80	1.80	40.90	
5	剥片	南区	552	Ⅳ	ホルンフェルス	5.75	3.90	2.10	31.80	
6	剥片	南区	292	Ⅵ	珪質頁岩	2.10	3.10	0.60	2.70	
7	剥片	南区	204	Ⅴｃ	珪質頁岩	3.40	3.80	1.00	12.90	
8	打製石斧	南区	195	Ⅴ	頁岩	6.10	5.40	2.10	64.40	８と９は接合する
9	剥片	南区	453	Ⅴ	頁岩	2.80	5.60	1.10	12.90	
10	剥片	南区	Q5NE/R5NW	Ⅰ	珪質頁岩	5.00	3.00	0.90	11.30	攪乱
11	剥片	南区	555	Ⅳ	珪質頁岩	1.70	2.00	0.60	1.40	
12	剥片	南区	551 Ⅳ	Ⅳ	ホルンフェルス	1.50	1.40	0.40	0.60	
13	剥片	南区	308	Ⅴａ～Ⅴｂ	尾鈴山酸性岩類	5.20	4.50	1.00	21.00	
14	剥片	南区	53	Ⅴ	尾鈴山酸性岩類	8.30	6.10	3.40	126.80	
15	剥片	南区	2	Ⅳ下～Ⅴ上	尾鈴山酸性岩類	12.50	5.00	2.30	131.00	
16	剥片	南区	12	Ⅳ	尾鈴山酸性岩類	6.30	3.60	1.20	23.00	
17	剥片	南区	14	Ⅳ	尾鈴山酸性岩類	6.00	6.90	1.75	59.00	
18	剥片	南区	15	Ⅳ	尾鈴山酸性岩類	10.40	12.20	4.40	495.90	
19	剥片	南区	74	Ⅳ	尾鈴山酸性岩類	7.90	7.90	1.90	109.90	
20	礫	南区	40	Ⅳ	尾鈴山酸性岩類	6.40	6.10	3.60	204.50	P40 ピットより検出
21	打製石鏃	北区	603	Ⅴ	チャート	2.10	1.60	0.30	0.80	
22	打製石鏃	北区	662	Ⅴ	ホルンフェルス	1.55	1.00	0.25	0.40	
23	ナイフ形石器	北区	664	Ⅴ下Ⅵ上	珪質頁岩	3.85	1.52	1.23	3.50	
24	ナイフ形石器	北区	661	Ⅴ	流紋岩	3.45	2.69	0.75	5.70	今峠型 or 北牛牧型ナイフ形石器
25	角錐状石器	北区	665	Ⅴ下Ⅵ上	黒曜石	3.30	2.07	0.95	5.40	南九州系？
26	ナイフ形石器	北区	キタ区	Ⅴ下Ⅵ上	チャート	7.00	2.80	1.40	19.00	
27	剥片	北区	キタ区Ｗ Ⅱ－ NW	Ⅴ下	ホルンフェルス	5.50	3.40	1.40	24.50	W2 グリッドー NW
28	剥片	北区	北区Ⅴ 10 － NW		チャート or 珪質頁岩	3.30	4.30	1.30	14.70	トレンチャー攪乱より出土
29	細石刃	事前 A 区	AE Tr	Ⅴ	黒曜石	0.61	0.60	0.10	0.05	東トレンチ、南九州系黒曜石
30	打製石鏃	事前 B 区	BW Tr	Ⅳ	チャート	1.30	1.00	0.20	0.20	西トレンチ
31	打製石鏃	事前 B 区	BW Tr	Ⅳ	チャート	1.70	1.40	0.35	0.70	西トレンチ
32	剥片	事前 A 区	AATr2	Ⅴ	珪質頁岩	5.30	4.40	1.10	25.50	Ａトレンチ
33	石核	事前 B 区	ニン BW Tr	Ⅳ上	ホルンフェルス	10.30	4.50	4.10	166.20	西トレンチ
34	剥片	事前 B 拡張	B 拡張	Ⅳ	ホルンフェルス	7.30	3.50	0.85	23.90	
35	剥片	事前 B 区	B 中 Tr Ⅳ	Ⅳ	尾鈴山酸性岩類	5.20	2.55	0.70	8.40	中トレンチ
36	石核	事前 B 拡張	B 拡張		ホルンフェルス	8.90	4.75	3.00	138.80	
37	ナイフ形石器	事前 B 区	BETr Ⅴ	Ⅴ	凝灰岩 or 流紋岩	8.06	2.20	1.40	15.20	東３トレンチ
38	剥片	事前 C 拡張	拡張 C		ホルンフェルス	8.75	6.80	1.90	115.80	
39	打製石鏃	事前 D 区	DETr Ⅳ　MB0	Ⅳ	黒曜石 or 安山岩	1.80	1.70	0.35	0.80	東トレンチ、姫島産黒曜石 or ガラス質安山岩
40	石核	事前北区	キタ区ニン 2Tr 西 M	Ⅳ	チャート	3.50	2.80	1.90	12.70	２トレンチ

第 4 節　弥生時代～古墳時代の遺構と遺物

1　弥生時代～古墳時代の概要

弥生時代～古墳時代の包含層は五次調査基本層序におけるⅡ層下部Ⅲ層 (K-Ah) 上部が相当する。南区では事前調査の結果、Ⅲ層 (K-Ah) 上面で竪穴建物跡が確認され、弥生時代の集落が予測された。調査は、まず重機を用いて表土を剥ぎ、その後事前調査トレンチを再発掘し、竪穴建物跡の位置を確認した。さらに新たにトレンチを開けながらⅢ層 (k-Ah) 上面まで精査した。南区では、時代相当の遺構として竪穴建物跡を 4 軒検出した。

以下これらの遺構と出土遺物について記述する。

2　遺構と遺物

(1) 竪穴建物跡

S1・S51

ア　遺構 (第 5・25 図)

S1 は南区の中央よりやや西側に位置し、ほぼ隅丸方形を呈する。長軸 5.4m、短軸 4.88m と大型で長軸は N65° E を指す。検出面から床面までの深さは最深部が 0.40m を測る。床面では建物跡に伴う柱穴は確認できなかった。また、S1 を S51 が切っており、S51 が新しい遺構である。

S51 は S1 を拡張することでその一部が検出された。全体像が不明瞭なため軸の長さは不明である。

イ　遺物 (第 26 ～ 33 図、第 3 ～ 4 表)

S1 はトレンチャーの影響を強く受けており、遺物のほとんどは遺構床面よりも上位で甕・壺・鉢・高坏・装飾高坏・軽石・磨石・台石が出土した。S51 の遺物としては石錘が出土している。

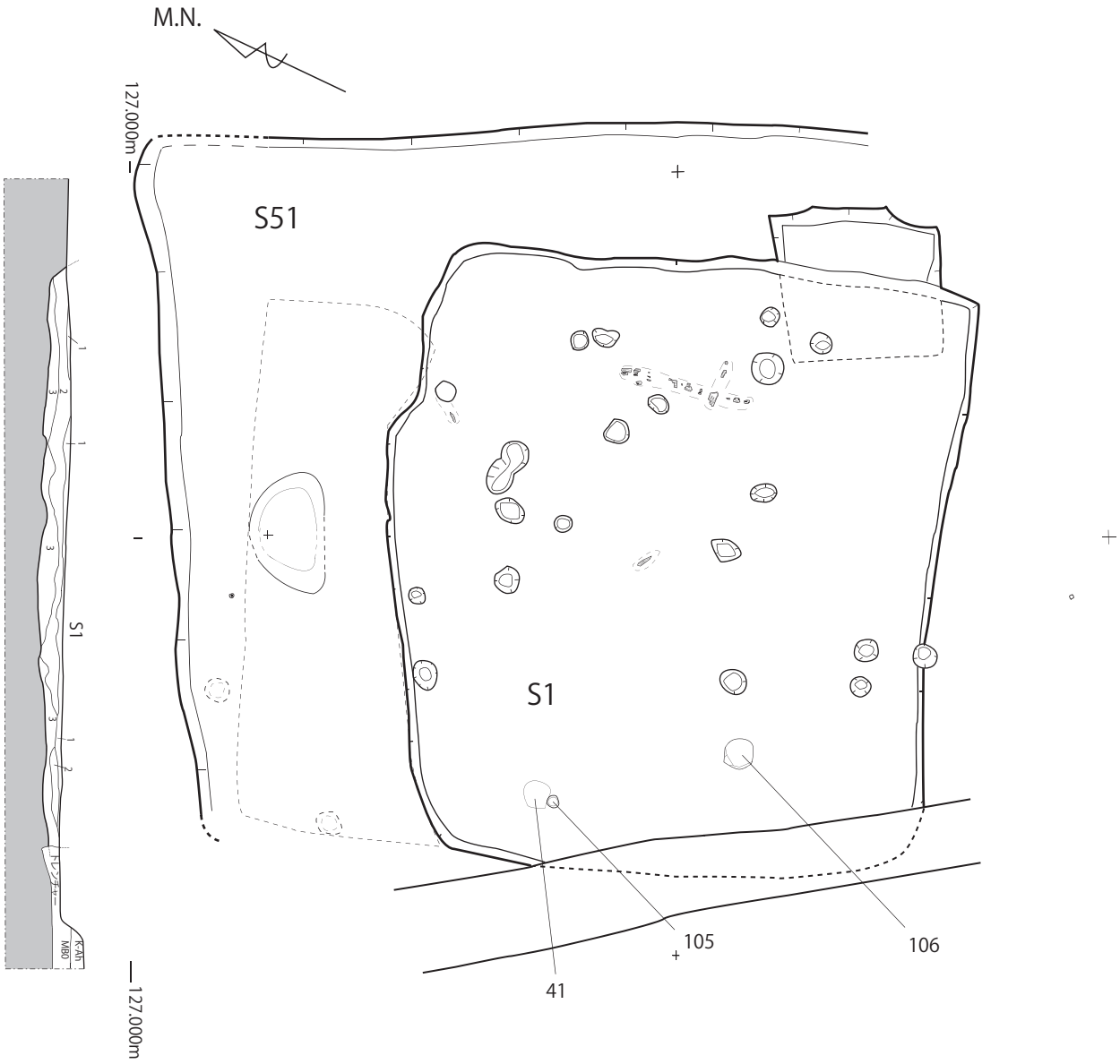
甕 (第 26 図 41 ～ 60、第 3 表)

41~60 は甕である。41 ～ 43・54 はいずれも「く」の字状に外反する頸部をもつ。41 は完形で出土している。42 は外面全体にススが付着している。底部は黒斑が認められ、平底である。43 ～ 47 は甕の口縁部～胴部である。43 は外面にススが付着している。46 の口唇部に指頭痕が 47 の口唇部に横ナデが見られる。48 ～ 53 は胴部～底部で、51 は脚台を有する。48 は内面底部には黒斑が、外面にはススの付着が見られる。49 は内外面に工具ナデ・指ナデが施されている。50 は底部に指押さえが見られ、若干外に張り出している。51 は底部が上底で、大きく外に張り出している。52 は外面にススが付着し底部には指押さえ痕がある。53 は外面に黒斑を認める。底部が上底であり、若干の張り出しが見られる。54 ～ 56 は口縁部・口縁部～胴部である。54 は外部面にススが付着している。55 の口唇部にはナデや指押さえの跡があり、外面全体にススが付着している。56 は外面全体にススが付着している。内面頸部に指押さえの跡がある。57 ～ 60 は底部である。57 は平底であり内面に強い指ナデを認める。58 は平底であり外面に黒斑を認める。59 の外面胴部にはススが付着している。底部は上底であり指ナデが施され、張り出しも見られる。60 は外面と底面にススが付着し、平底である。

壺 (第 27・28・29 図 61 ～ 85、第 3 ～ 4 表)

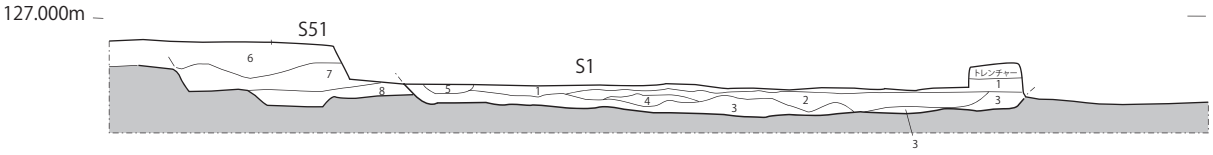
壺は完形での出土は無かったが、口縁部の形状や模様など様々特徴が見られた。

61 は同一個体であり平底をもつ。62 は工具によりナデが施された複合口縁をもち、頸部に刻み目突帯が施されている。胴部外面では風化が進んでいる。63 は同一個体である。口縁部外面から胴部にかけてススの付着があり一部に黒



土層注記

1 黒色土10YR(1.7/1)を母体に黒褐色土10YR(3/1)がラミナ状、5~10mmのK-Ah粒を部分的に多く含む、しまり弱い。
2 黒色土10YR(1.7/1)、3~5mmのK-Ahをごくわずかに含む、しまり弱い。
3 黒褐色土10YR(2/1.5)、1mmのK-Ahをごくわずかに、10mmのIII層ブロックをごくわずかに含む、しまり弱い。
4 黒色土10YR(2/1)を母体に、黄褐色土10YR(5/8)を部分的に多く含む、後者は焼土、しまり弱い。
5 黒褐色土10YR(2/3)を母体に、橙色土7.5YR(5/8)の焼土を多く含む。
6 黒色土10YR(1.7/1)、1~10mmのK-Ah粒を部分的にやや多く含む、しまり弱い。
7 黒色土10YR(2/1)、10mmのK-Ahをごくわずかに含む、しまりやや弱い。
8 黒色土10YR(2/1)、5~20mmのK-Ahをまばらに含む、しまり弱い。



第25図　S1・S51(竪穴建物跡)実測図(1/60)　0　2m(1:60)

斑を認める。底部は上底であり、やや張り出しが見られる。64 は口縁部～胴部までほぼ完形で出土している。複合口縁であり、口縁部外面には工具による斜方向のナデを認める。全体的に調整が粗く粘土つなぎのたまりやへこみが随所に見られる。65 は同一個体である。口縁部には横ナデが施される。底部は平底である。66 は底部が脚台状になっている。67 は同一個体である。胴部外面と底部に黒変がある。頸部内面に深めの指頭痕がある。外面にススが付着している。底部は平底である。68 の底部は平底だが、底面中央部は凹状でナデが施されている。また外面全体にススの付着が見られる。69 は同一個体である。口唇部には横ナデがあり、その上から櫛描波状文が施されている。外面頸部付近には 2 段櫛描波状文が施されている。底部は上底である。70 は口縁部～胴部である。外面に工具によるナデが見られるが、風化が激しく単位が不明である。71 は口縁部である。口唇部に横ナデが、外面に縦方向のミガキが施されている。72 は口縁部内径 5cm のやや小型の壺である。外面全体に縦方向のミガキが施されている。底面の中心は指つまみの痕跡がみられる。73 は頸部内面に指頭痕が見られる。74 は口唇部に横ナデが施されている。なお図化されていないが、頸部から肩部にかけて線刻の割り付けが見られる。75 は口唇部に横方向の工具ナデが見られる。外面胴部に風化が見られる。76 ～ 78 は口縁である。76 は口唇部にナデが見られる。77 の外面には横ナデが施されている。傾きは不明である。78 は複合口縁をもつ。風化が激しく調整は不明である。79 ～ 81 は頸部～胴部である。79 は同一個体である。外面頸部にはハケ目の上から櫛描波状文が施されている。80 は胴部下部にススの付着が見られる。内部には指押さえ・指ナデ・ハケ目が見られる。81 の内部胴部には指ナデ・指頭痕がある。82 は胴部である。胴部に推定最大径 19.2cm をもつ。83 はやや長めの頸を持ち、口縁は若干外反している。口唇部に横ナデが施されている。84 ～ 85 は底部であり平底である。

鉢 (第 29 図 86 ～ 91、第 4 表)

86 は完形で出土している。口唇部に指押さえやナデが施されている。底面は上底で粗い指ナデが見られる。88 は底部が上底であり、若干外に張り出しが見られる。89 ～ 91 は口縁部～胴部である。89 の口唇部には横ナデが施されている。90 は外面にススが付着している。内面には指押さえや指ナデが見られる。91 は口縁上部に横ナデが見られる。

小型土器 (第 29 図 92、第 4 表)

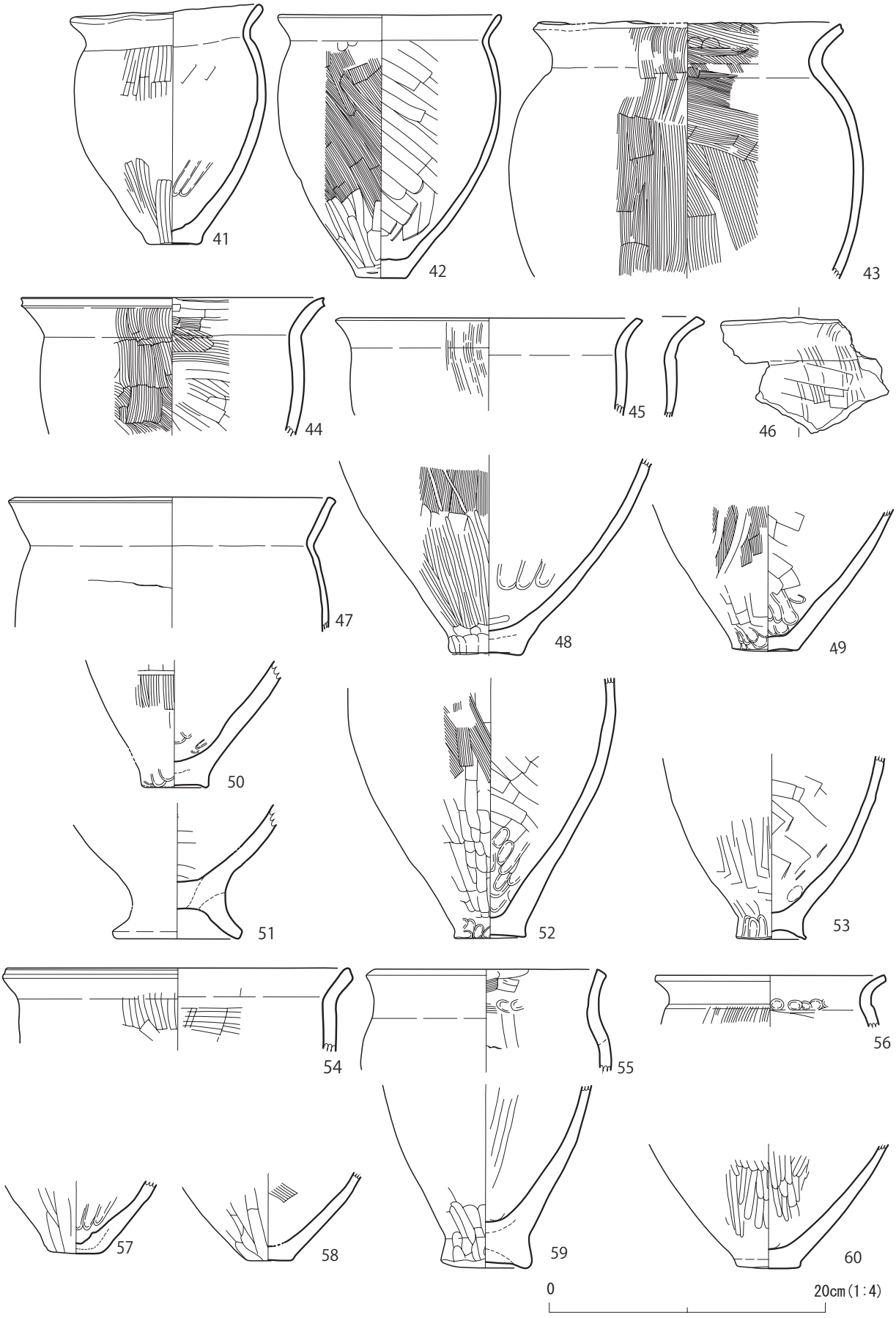
92 はほぼ完形で出土した。推定口径 3.7cm、器高 5.05cm である。口縁部外面と胴部には部分的に櫛描波状文が施されている。

器種不明土器 (第 29 図 93、第 4 表)

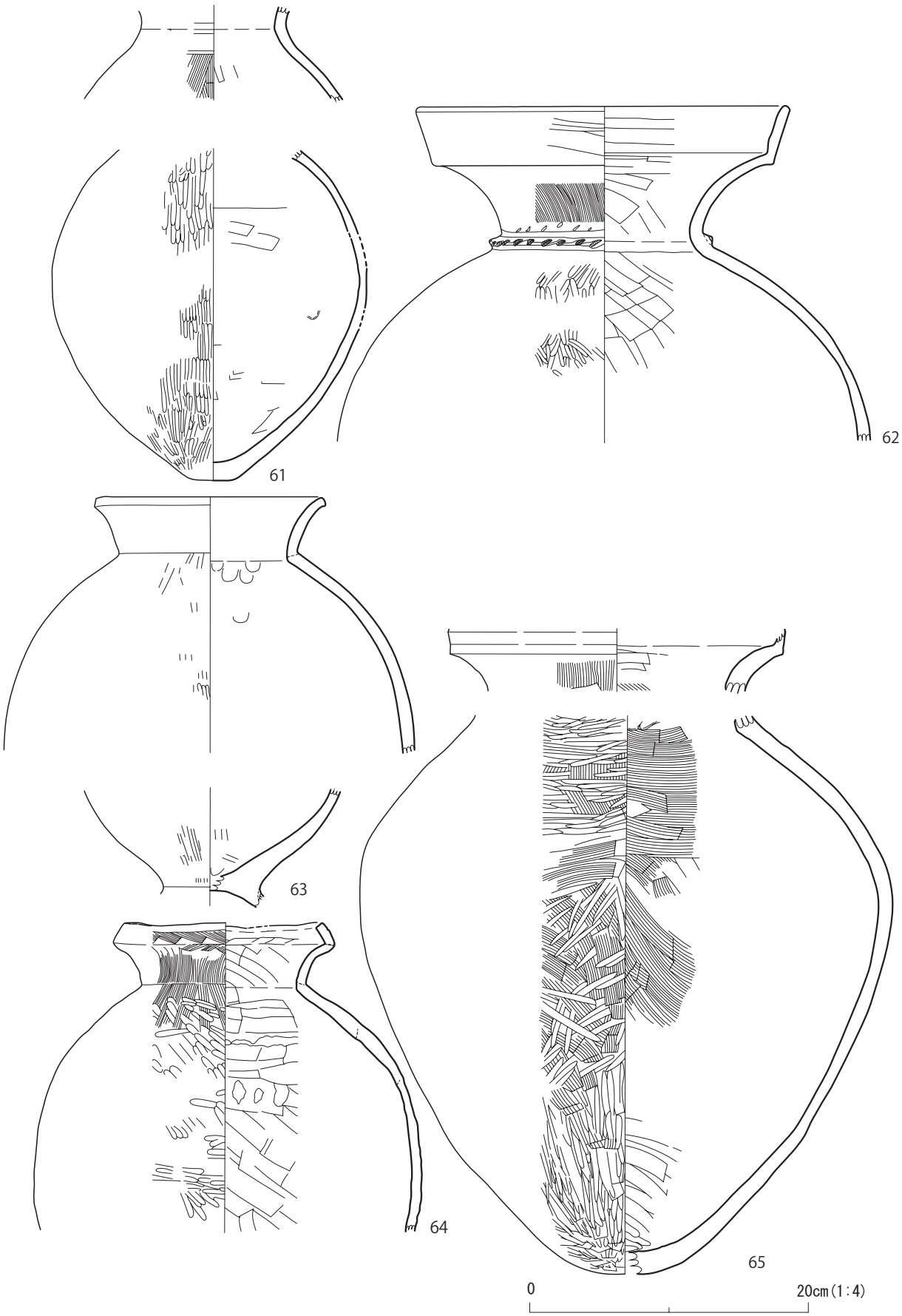
93 は外面が明赤褐色、内面が赤褐色である。外面には工具による 3 列の連続刺突文が 2 段に施されている。底部には縦位の連続刻み目を認める。

高坏 (第 29・30 図 94 ～ 103、第 4 表)

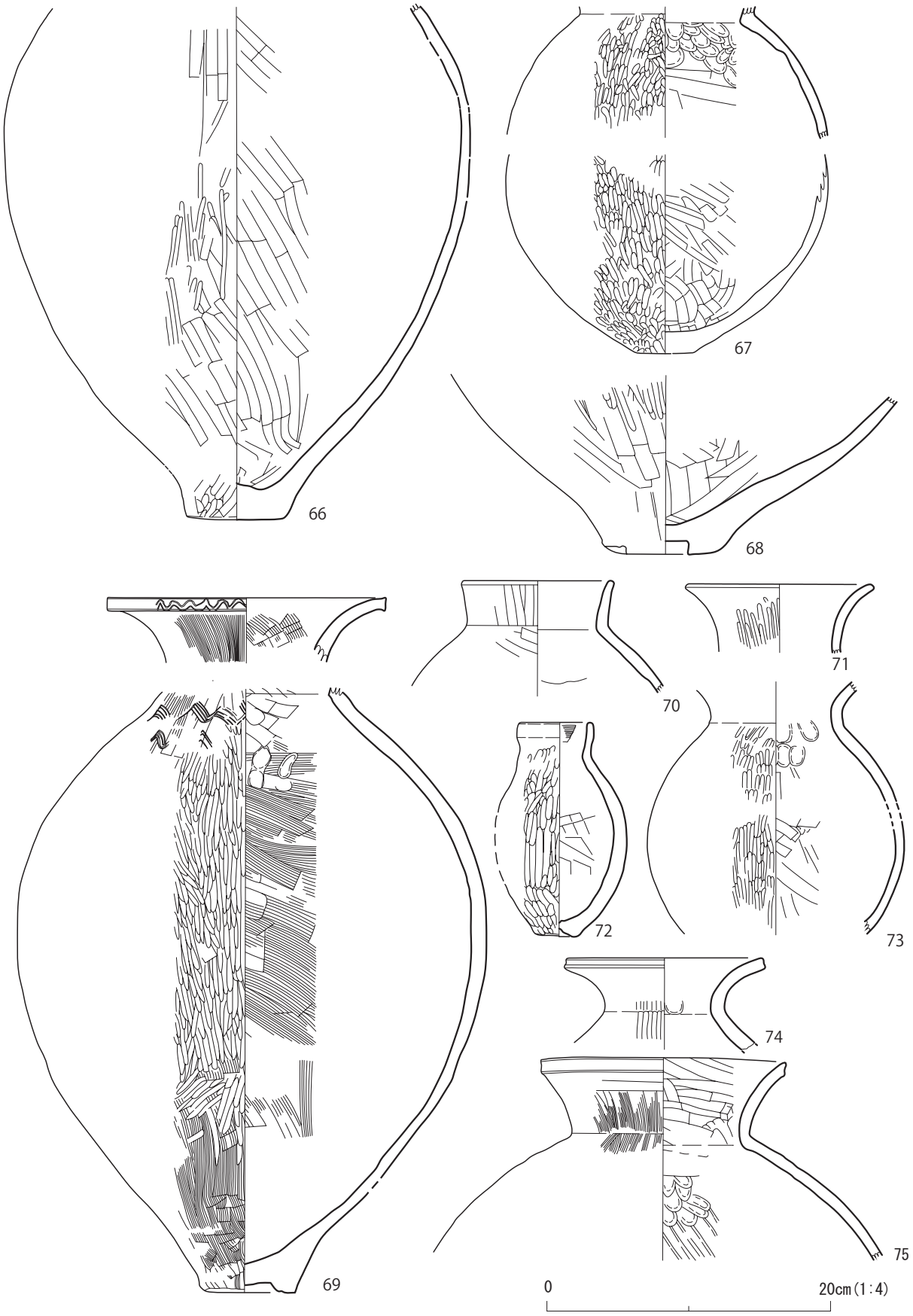
94 ～ 98 は坏部であり、95・96・97 はいずれも口縁部が屈曲後、やや外反しながら立ち上がる。口唇部には横ナデが施される。弥生時代後期の高坏である。99 ～ 100 は脚部である。99 は同一個体であり下部には円形四方透し、上部にも透かしを認める。100 は脚柱部分を残す。101 ～ 102 は脚部～裾部である。101 は円形三方透しをもつ。102 は円形四方透しの高坏である。103 は高坏の裾部である。裾は底部から外反して立ち上がり、「く」の字に曲がりながら脚部へと続く。曲がった部分には波状の突帯がある。また裾部には穿孔が数箇所開き、二叉状工



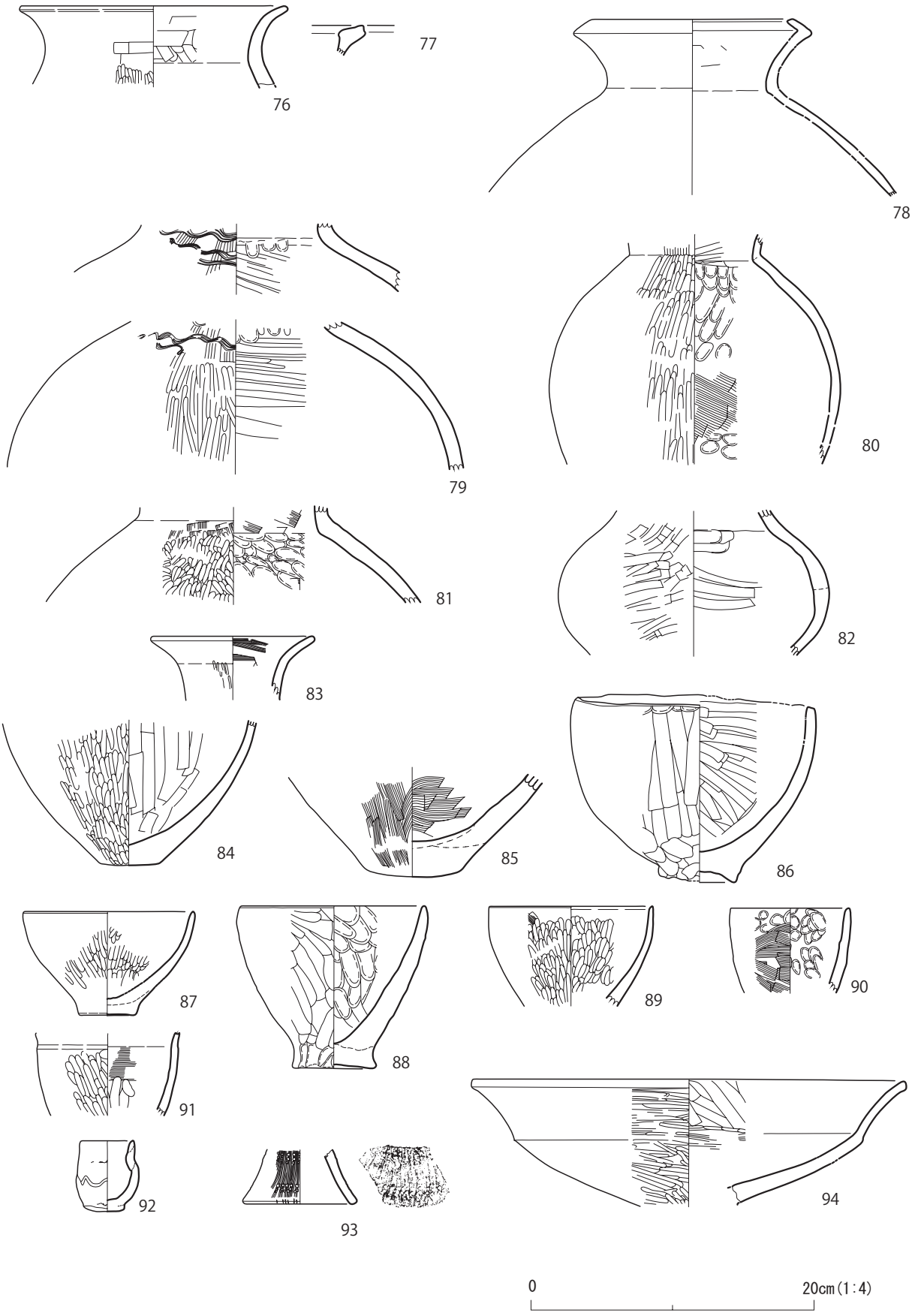
第 26 図　S 1 出土土器実測図①(1/4)



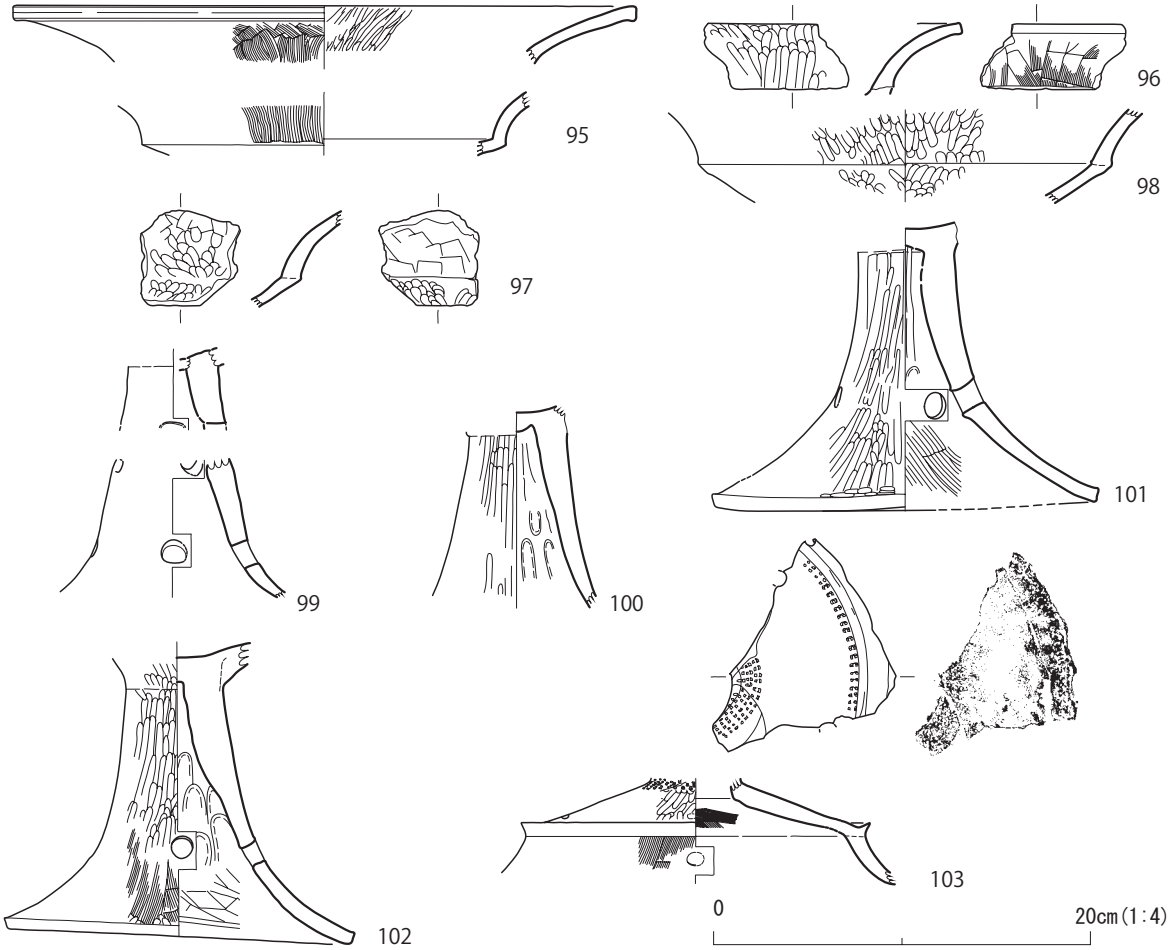
第 27 図　S 1 出土土器実測図②(1/4)



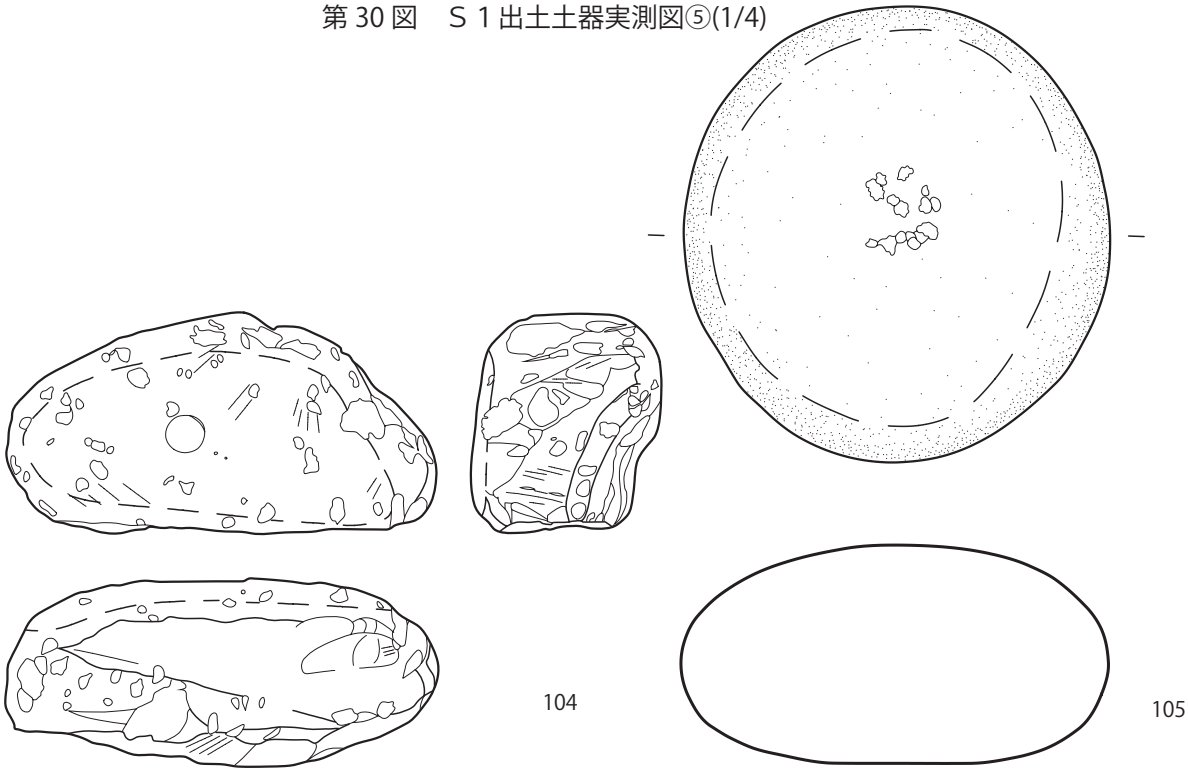
第 28 図　S 1 出土土器実測図③(1/4)



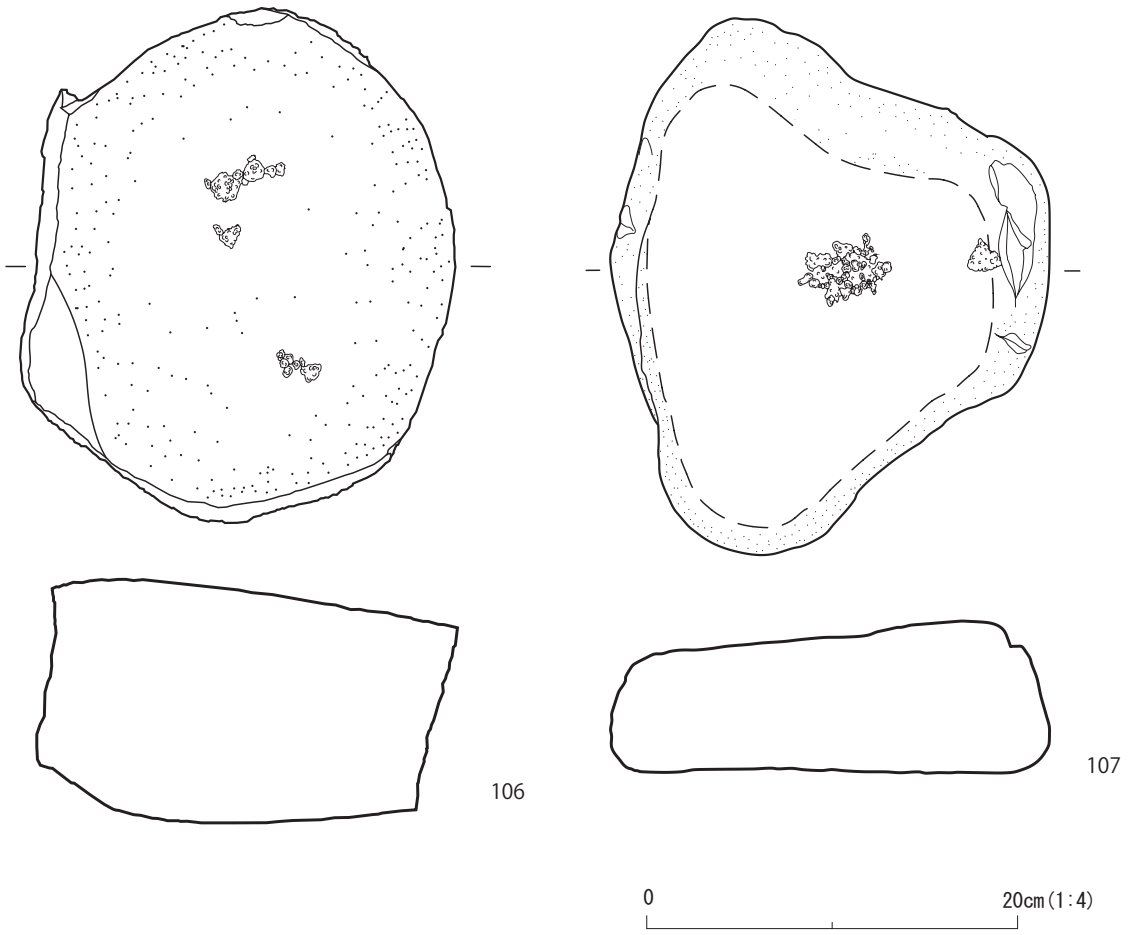
第 29 図　S 1 出土土器実測図④(1/4)



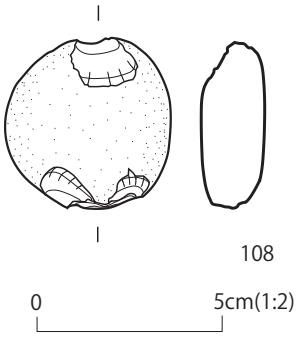
第 30 図　S 1 出土土器実測図⑤(1/4)



第 31 図　S 1 出土石器実測図①(1/2)



第 32 図　S 1 出土石器実測図②(1/4)



第 33 図　S51 出土石器実測図 (1/2)

具によると見られる連続刺突文が施される。その形状から祭祀用に装飾された高坏と思われる。

石器 (第 31 ～ 33 図、第 5 表)

104 は軽石である。一面水平に形成し、裏面に 1 箇所貫通していない穿孔が見られる。105 は尾鈴山酸性岩類製の磨石である。106 は尾鈴山酸性岩類製の台石である。表裏面に部分的に被敲打痕が観察され、いずれの面にも明確な摩滅痕が認められる。107 は尾鈴山酸性岩類製の台石である。表裏面に被敲打痕の可能性がある凹凸が観察されるが、剥落の可能性も指摘できる。108 は尾鈴山酸性岩類製の打欠石錘である。抉部の縁辺にはややツブレが観察される。

第３表　土器観察表

No	種別	器種部位	出土区	出土地点	法量 (cm)				焼成	手法・調整・文様他		色調				胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	胴部最大径		外面	内面	外面		内面			
41	甕	口縁～底部	南区	S1	13.1	3.9	17.1	13.6	良好	ナデ、工具ナデ、一部ナデ	ナデ、工具痕、指ナデ、縦斜方向のナデ	浅黄燈 明赤褐	10 YR 8/4 2.5 YR 5/6	にぶい黄燈	10 YR 7/4	4mm以下の黒色、3mm以下の灰白色粒を含む	
42	甕	口縁～底部	南区	S1	(15.5)	3.6	18.8	15.8	良好	ナデ、縦方向のナデ、斜方向のハケメ後一部ナデ、工具によるナデ	ナデ、斜方向のナデ、一部縦方向のナデ、指ナデ	燈	7.5 YR 7/6	にぶい燈	8 YR 6/4	3mm以下の灰白、0.5mm大の黒色光沢粒、2mm以下の半透明粒を含む	外面に濃くスス付着
43	甕	口縁～胴部	南区	S1	21.3			25.1	良好	ナデ、縦方向のハケメ	指ナデの上から斜・横方向のハケメ、ナデ	浅黄燈	10 YR 8/4	浅黄燈	10 YR 8/4	2mm以下の黒色、灰白色粒、3mm大の半透明粒を含む	外面にスス付着
44	甕	口縁～胴部	南区	S1	(21.0)				良好	縦方向の工具ナデ、板状工具による縦、斜方向のハケメ	横、斜方向のハケメ後工具による横、斜方向のナデ	にぶい燈	7.5 YR 6/4	燈	8 YR 6/6	3mm以下の灰白粒を含む、微細な黒褐色粒を含む	外面に黒色物付着
45	甕	口縁～胴部	南区	S1	(21.0)				良好	縦方向のハケメ	斜方向のナデ、ナデ後ミガキ	燈	7.5 YR 6/8	燈	8 YR 6/6	2mm以下の灰白粒を多く含む	
46	甕	口縁～胴部	南区	S1					良好	縦方向の工具によるハケメ後斜方向のナデ	横方向ナデ、斜方向の工具ナデ、指押さえ	明黄褐	10 YR 7/6	明黄褐	10 YR 7/6	2mm以下の褐灰色、にぶい燈粒を多く含む、1mm以下の灰白、黒褐色粒を含む	
47	甕	口縁～胴部	南区	S1	(21.8)				良好	横ナデ、縦方向の工具によるハケメ後斜方向のナデ	横、斜方向の工具ナデ	浅黄燈	10 YR 8/4	浅黄燈	10 TR 8/3	2mm以下の褐灰色,にぶい燈粒、灰白色粒を多く含む、3mmの燈粒を含む	
48	甕	胴部～底部	南区	S1		5.1			良好	ハケメ一部工具痕あり、工具ナデ、指ナデ、指押さえ	ナデ、指押さえ	明赤褐	5 YR 5/6	にぶい黄燈	10 YR 6/4	5mm以下の灰白、浅黄燈の粒を含む	胴部～底部に炭化物付着
49	甕	胴部～底部	南区	S1		4.8			良好	縦方向のハケメ後斜方向の工具ナデ、縦方向の工具ナデ、工具ナデ後指ナデ	斜方向の工具ナデ後丁寧な指ナデ	燈	7.5 YR 6/6	にぶい燈	8 YR 6/4	2mm以下の灰白色粒、灰褐色粒を多く含む、1mm以下の黒色粒を多く含む	
50	甕	胴部～底部	南区	S1		4.6			良好	ナデ、縦方向のハケメ後一部横方向の工具ナデ、指押さえ	ナデ、指押さえ	にぶい燈	5 YR 6/4	にぶい黄燈	10 YR 7/3	4mm以下の灰白の粒、にぶい赤褐の粒を含む、3mm以下の褐灰の粒を含む	
51	甕	胴部～底部	南区	S1		(8.6)			良好	ナデ、風化により調整不明	風化により調整不明、工具痕あり	浅黄燈	10 YR 8/3	灰黄	3 Y 7/2	3mm以下の褐灰、灰白、にぶい燈の粒を含む	
52	甕	胴部～底部	南区	S1		(5.2)		(19.5)	良好	縦、斜方向のハケメ、縦方向の工具ナデ、指押さえ	斜方向の工具によるハケメ、指押さえ	にぶい黄燈	10 YR 7/3	にぶい黄燈	10 YR 7/3	8mmのにぶい赤褐の小石、4mm以下の灰白の粒、2mm以下のにぶい燈の粒、黒色光沢粒を含む	内部にスス付着
53	甕	胴部～底部	南区	S1		5.0			良好	指ナデ、縦方向の工具ナデ、指押さえ	斜方向の工具ナデ、指ナデ	燈	7.5 YR 6/6	にぶい黄燈	10 YR 7/4	3mm以下の灰白、褐色、1mm大の黒色粒を含む、7mm大の褐色粒を１個含む	
54	甕	口縁部	南区	S1	(22.3)				良好	横ナデ、横方向のナデ、ハケメ	ナデ、横方向のハケメ	にぶい黄燈	10 YR 7/3	にぶい黄燈	10 YR 7/3	5mm以下のにぶい褐色の粒、3mm以下の灰色、赤褐色の粒を含む、2mm以下の灰白の粒を含む	外面にスス付着
55	甕	口縁～胴部	南区	S1	(16.0)				良好	ナデ、横方向のナデ、縦方向のナデ	ナデ、横方向のハケメ、横方向のハケメ後指押さえ、縦方向の工具ナデ	にぶい燈	7.5 YR 6/4	にぶい黄燈	10 YR 7/4	2mm以下の灰色、灰白、黒褐色の粒を含む、微細な光沢粒を含む	外面全体にスス付着
56	甕	口縁～胴部	南区	S1	(16.4)				良好	ナデ、ハケメ後ナデ、縦方向のハケメ	横ナデ、工具ナデ、指押さえ	にぶい燈	7.5 YR 6/4	にぶい燈	8 YR 6/4	1mm以下の灰色、赤褐色の粒を含む、微細な透明の光沢粒を含む	外面全体にスス付着
57	甕	胴部～底部	南区	S1		4.1			良好	工具ナデ、ナデ一部工具痕	強い指ナデ	にぶい赤褐	5 YR 5/4	にぶい黄燈	10 YR 6/4	3mm以下の赤褐、灰白色の粒を含む、3mm大の半透明粒を１つ含む	スス付着
58	甕	胴部～底部	南区	S1		3.3			良好	縦方向の工具ナデ、一部横方向のナデ	斜方向のハケメ後横方向のナデ、指押さえ後ナデ	にぶい明黄褐	10 YR 7/6	黄灰	3 Y 6/1	4mm以下の灰白の粒、3mm以下のにぶい燈、2mm以下の明赤褐色の粒、微細な光沢粒を含む	
59	甕	胴部～底部	南区	S1		6.5			良好	ナデ、指ナデ、指押さえ、工具ナデ	工具ナデ、指押さえ後ナデ	にぶい黄燈	10 YR 6/3	にぶい黄燈	10 YR 7/3	2mm以下のにぶい赤褐、褐灰、灰白の粒を含む	外面にスス付着
60	甕	胴部～底部	南区	S1		4.5			良好	縦、斜方向の工具ナデ、ナデ	ナデ、横方向のナデ、指押さえ	にぶい黄	2.5 Y 6/4	にぶい黄	3 Y 6/4	5mm以下のにぶい褐、黄燈、2mm以下の灰白の粒を含む	外部にスス付着
61	壺	頸部～胴部 胴部～底部	南区	S1				(22.6)	良好	横方向のナデ、縦、斜方向のハケメ、縦方向のハケメ後横ナデ 縦方向のミガキ、ナデ	横方向のナデ、横ナデ後縦ナデ 縦、横、斜方向の工具によるナデ、ナデ	燈 赤褐	2.5 YR 6/6 5 YR 4/6	明褐灰 赤褐	3 YR 5/6 5 YR 4/8	3mm以下の明褐灰、1mm以下の浅黄燈、灰白の粒を含む 3mm以下の灰白、赤褐、褐灰の粒子を含む	
62	壺	口縁～胴部	南区	S1	(26.3)			(38.5)	良好	ナデ、横ナデ、工具ナデ、ハケメ、刻み目突帯、縦斜方向のミガキ、横ナデ	ナデ、横ナデ、工具ナデ	にぶい黄燈	10 YR 7/4	浅黄燈	10 YR 8/4	6mm以下の茶褐、2mm以下の黒色、3mm以下の半透明粒、微細な黒色光沢粒を含む	
63	壺	口縁～胴部 胴部～底部	南区	S1	(16.2)			(29.4)	良好	横ナデ、ミガキと思われるが風化のため調整不明 ナデ、ハケメ後ミガキと思われるが、風化のため調整不明、縦方向のハケメ	指押さえ、風化のため調整不明 指押さえ、丁寧な工具ナデ	浅黄燈	10 YR 8/3	にぶい黄燈	10 YR 8/3 10 YR 7/3	5mm以下の褐灰、にぶい赤褐、灰白の粒、微細な透明光沢粒を含む 6mm位の灰、灰白の小石、3mm以下の灰白,にぶい褐の粒、微細な半透明光沢粒を含む	外面に一部スス付着
64	壺	口縁～胴部	南区	S1	13.6			(26.7)	良好	縦、斜方向の工具ナデ、縦方向の工具ナデ後ミガキ、指ナデ	横方向、縦方向の工具ナデ、工具による横、斜方向のナデ	にぶい燈	7.5 YR 7/3	にぶい黄燈	10 YR 6/3	2mm以下の黒、灰白の砂粒を含む	全体所々が黒変、スス付着
65	壺	口縁部 頸部～底部	南区	S1			5.3		良好	横ナデ、縦方向の工具によるハケメ、縦方向のハケメ後斜方向の工具ナデ 横、斜方向の工具によるハケメ後横、斜方向のミガキ、縦方向の工具によるミガキ	横ナデ、横、斜方向のハケメ、後横方向のナデ、斜方向のハケメ 指ナデ、横ナデ、横、斜方向の工具によるハケメ	黒褐 燈	10 YR 3/2 5 YR 7/6	明黄褐 燈	10 YR 6/6 5 YR 6/6	6mm以下の灰白、2mm以下の灰白、燈、灰黄褐色の粒を多く含む 5mm以下の灰粒、3mm以下の褐灰、褐色、赤褐色粒を含む	
66	壺	胴部～底部	南区	S1		7.0		(32.8)	良好	縦方向の工具ナデ、工具ナデ後ミガキ、工具によるナデ、ナデ	工具によるナデ、ナデ	にぶい黄褐	10 YR 7/4	にぶい黄褐	10 YR 7/3	5mm以下の灰白の小石、3mm以下の灰白、黄灰の粒、微細な透明の光沢粒を含む	
67	壺	頸部～胴部 胴部～底部	南区	S1		(4.4)		(22.7)	良好	工具ナデ後ミガキ 全体にミガキ	指ナデ、工具による横方向 縦、斜方向の工具ナデ	にぶい黄燈	10 YR 7/4	赤黄褐 にぶい黄燈	10 YR 6/6 10 YR 7/3	2mm以下の、灰白、黒、褐色の粒を含む 3mm以下の褐色、灰白、黒の粒を含む	スス付着
68	壺	胴部～底部	南区	S1		(9.1)			良好	斜方向の工具ナデ、斜方向の工具ナデ後ミガキ、圧痕、ナデ	工具ナデ	にぶい黄燈	10 YR 7/4	にぶい黄燈	10 YR 7/3	9mm以下のにぶい燈の小石、4mm以下の灰白、2mm以下のにぶい燈、黒褐の粒、微細な透明光沢粒	外面にスス付着
69	壺	口縁～頸部付近 頸部～底部	南区	S1	(19.4)	(6.3)		(33)	良好	櫛描波状文、工具による横ナデ、縦方向のハケメ	横ナデ、斜方向のハケメ	燈	7.5 YR 6/6	燈	8 YR 6/6	1mm以下の褐色、明褐色の粒、微細な灰白、透明光沢粒を含む	
70	壺	口縁～胴部	南区	S1	(10.5)				良好	ナデ、縦、斜方向の工具ナデ	斜、横方向のナデ	浅黄燈	10 YR 8/3	淡黄	3 YR 8/3	1mm以下の黒、褐色粒を含む、5mm大の灰白色の粒を１個含む	
71	壺	口縁部	南区	S1	(12.5)				良好	横ナデ、縦方向のミガキ	横ナデ、工具ナデ後ナデ	燈	7.5 YR 6/6	燈	8 YR 6/6	3mm以下の灰白、2mm以下の褐色粒、半透明粒を含む	
72	壺	口縁～底部	南区	S1	(5.0)	3.3	15.1	(9.3)	良好	横方向の工具ナデ、縦方向のミガキ、縦方向の工具ナデ後ミガキ	縦、横方向の工具ナデ	浅黄燈	10 YR 8/4	浅黄燈	10 YR 8/4	4mm以下の黒色粒、2mm以下の灰褐色の粒を含む	
73	壺	頸部～胴部	南区	S1				(17.8)	良好	横ナデ、縦方向のミガキ	横ナデ、縦、斜方向の工具ナデ	明黄褐燈	7.5 YR 7/6	燈	8 YR 6/6	2mm以下の灰白、褐色粒を含む	
74	壺	口縁～胴部	南区	S1	(13.7)				良好	横ナデ、ハケメ後横ナデ、ハケメ	ハケメ後ナデ、指押さえ後ナデ	にぶい燈	7.5 YR 6/4	にぶい黄燈	10 YR 7/4	5mm以下のにぶい黄燈、3mm以下の灰白、褐灰、にぶい赤褐の粒を含む	
75	壺	口縁～胴部	南区	S1	(17.6)				良好	縦、横方向の工具ナデ、縦方向の工具ナデ後横方向のナデ、風化のため調整不明瞭	斜、横方向の工具ナデ、指ナデ、指押さえ	にぶい黄燈	10 YR 7/4	浅黄	3 YR 3/7	3mm以下の黒色粒、灰白の粒を含む	

No	種別	器種部位	出土区	出土地点	法量 (cm)				焼成	手法・調整・文様他		色調				胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	胴部最大径		外面	内面	外面		内面			
76	壺	口縁部	南区	S1	(18.6)				良好	ナデ、横方向のナデ、横方向の工具ナデ、縦方向のミガキ	ナデ、工具ナデ、指押さえ後ナデ	浅黄燈	10 YR 8/3	浅黄	3 Y 8/3	3mm 以下の灰白、燈、褐灰の粒、微細な透明光沢粒を含む	
77	壺	口縁部	南区	S1					良好	横ナデ、ナデ	ナデ、指押さえ	にぶい燈	7.5 YR 6/4	にぶい燈	8 YR 6/4	2mm 以下の灰褐、灰白、赤褐の粒、1mm 以下の透明光沢粒を含む	
78	壺	口縁～胴部	南区	S1	(14.2)				良好	ナデ、風化のため調整不明瞭	ナデ、風化のため調整不明瞭	にぶい黄燈	10 YR 7/3	灰黄	3 Y 7/2	6mm 以下の灰白の粒、1mm 以下のにぶい燈の粒を含む	
79	壺	頸部～胴部	南区	S1				(32.2)	良好	ハケメの上から櫛描波状文、縦方向のミガキ	ナデ、指ナデ、工具ナデ、粘土のつなぎ、横方向の工具ナデ	浅黄燈、燈	7.5 YR 8/4	浅黄燈	8 YR 8/4	4mm 以下の灰、灰白、褐色粒を含む、6mm 大の褐色粒を 1 個含む	
80	壺	頸部～胴部	南区	S1				(20.6)	良好	縦方向の工具ナデ、縦方向のミガキ	ナデ、指押さえ、指ナデ、斜方向のハケメ後一部指押さえ、粘土のつなぎ	にぶい燈	7.5 YR 7/4	にぶい燈	10 YR 7/3	3mm 以下の灰白、灰色の粒、1mm 以下のにぶい黄燈の粒を含む	
81	壺	頸部～胴部	南区	S1					良好	横方向の工具ナデ、縦方向の工具ナデ後ミガキ	斜方向の工具ナデ、指ナデ、指押さえ	にぶい燈	7.5 YR 6/4	にぶい黄燈	10 YR 7/4	2mm 以下の黒、灰白、赤褐の砂粒を含む	
82	壺	頸部～底部付近	南区	S1				(19.2)	良好	斜方向の工具ナデ	指押さえによる横方向のナデ、工具による横ナデ	暗褐	7.5 YR 3/4	褐	8 YR 4/6	2mm 以下の暗褐色、灰白、黄褐、燈色の粒を多く含む	
83	壺	口縁～頸部	南区	S1	(11.4)				良好	横ナデ、横ナデ後縦方向のミガキ	横ナデ、横、斜方向の工具ナデ	燈	5 YR 6/6	燈	5 YR 6/6	3mm 以下の灰白、1mm 以下の黄灰、灰の粒を含む	
84	壺	胴部～底部	南区	S1		4.3			良好	全体に縦方向のミガキ	縦方向の工具ナデ	にぶい燈	7.5 YR 6/4	にぶい黄燈	10 YR 6/3	底部中心に 4mm 大の黒褐の粒 1 個、2mm 以下の灰白、褐色の砂粒を含む	所々一方向の砂粒の流れが見られる
85	壺	胴部～底部	南区	S1		(6.5)			良好	縦方向の工具ナデ、部分的にミガキ、粘土のつなぎ	斜方向のハケメ	にぶい燈	7.5 YR 6/4	灰褐	8 YR 6/2	3mm 以下の褐色、明褐色、灰白、明褐灰色の粒を多く含む	
86	鉢	口縁～底部	南区	S1	16.1	(5.3)	13.3		良好	ナデ、縦方向のハケメ、工具によるハケメ後縦方向の工具ナデ、指押さえ、指ナデ	横、縦、斜方向の工具ナデ	にぶい燈	7.5 YR 7/4	浅黄燈	8 YR 8/6	6mm のにぶい燈色の小石、5mm 以下の褐灰色の粒、2mm 以下の灰白色の粒を含む	
87	鉢	口縁部 胴部～底部	南区	S1	(11.9)	4.0	(7.4)		良好	ナデ、縦方向のミガキ 縦、指ナデ後ナデ、ナデ	縦方向のミガキ、ナデ	明赤褐	2.5 YR 5/6	明赤褐	3 YR 5/6	3mm 以下の黒褐色、灰白色の粒を含む 5mm 以下の燈、灰白の粒を含む	
88	鉢	口縁～底部	南区	S1	(12.8)	5.9	11.5		良好	ナデ、下から斜方向の工具ナデ、指押さえ	縦、斜方向の指ナデ	明黄褐 明褐	10 YR 7/6	燈	8 YR 7/6	3mm 以下の灰白、赤褐、褐灰、黄燈色の粒を含む	
89	鉢	口縁～底部付近	南区	S1	(11.6)				良好	横ナデ、横、斜方向の工具ナデ、斜方向の工具ナデ後縦方向のミガキ	横ナデ、横方向の工具ナデ、縦、斜方向のミガキ	にぶい燈	7.5 YR 7/4	にぶい燈	10 YR 7/3	2mm 以下の褐灰、燈、褐、灰白の粒を含む	
90	鉢	口縁～胴部	南区	S1	(8.0)				良好	工具ナデ後指押さえ、斜、横方向の工具ナデ	指押さえ、指ナデ	にぶい燈	7.5 YR 7/4	燈	8 YR 7/6	2mm 以下の明赤灰、灰白、明赤褐の粒を含む	外面にスス付着
91	鉢	口縁～胴部	南区	S1				(10.0)	良好	横ナデ、斜方向のミガキ	横方向のハケメ、ナデ、横奉公のハケメ後ナデ	燈	2.5 YR 6/6	にぶい燈	8 YR 7/4	5mm 以下のにぶい燈、1mm 以下の赤褐、褐灰の粒を含む	
92	ミニチュア土器	口縁～底部	南区	S1	(3.7)	2.9	5.1	4.4	良好	櫛描波状文、斜、横方向のナデ、粘土のつなぎ	横ナデ	浅黄燈	7.5 YR 8/6	浅黄燈	8 YR 8/6	1mm 以下の金色の粒を多く含む、2mm 以下の灰白色粒を含む	
93	?	脚部～裾部	南区	S1	(8.0)				良好	工具による 3 列の連続刺突文（二段）、工具による縦方向のナデ、縦の連続刻み目		明黄褐	5 YR 5/6	赤褐	5 YR 4/6	3mm 以下の灰白粒を含む、金色光る光沢粒を多く含む	
94	高坏	坏部	南区	S1	30.4				良好	ナデ、横、斜方向のミガキ	斜、横方向の工具ナデ、ミガキか？風化により調整不明	にぶい黄燈	7.5 YR 7/3	浅黄燈	10 YR 8/4	5mm 以下の灰白、黒褐、1mm 以下のにぶい赤褐の粒を含む	
95	高坏	体部、坏部	南区	S1	33.0				良好	縦、斜方向のハケメ 横ナデ、斜、縦方向のハケメ	丁寧な横ナデ 縦方向のミガキ風化気味	燈	7.5 YR 6/6	燈 にぶい燈	8 YR 7/6 6/4	3mm 以下の灰白色、1mm 以下の燈、褐色粒を多く含む 4 mm 以下の灰白の粒を多く含む、微細な褐灰色、明褐色粒を多く含む	
96	高坏	坏部	南区	S1					良好	工具による横ナデ、縦方向のハケメ、粘土のつなぎ	縦方向のミガキ	にぶい黄燈	10 YR 7/4	灰黄褐	10 YR 5/2	灰色の細かい砂粒を含む	
97	高坏	坏部	南区	S1					良好	工具による縦方向のナデ、縦方向のミガキ	工具ナデ後ミガキ	にぶい燈	7.5 YR 7/4	にぶい燈	8 YR 7/4	1mm 以下の黒と灰白の砂粒を含む	
98	高坏	坏部	南区	S1					良好	工具ナデ後縦方向のミガキ	縦方向の工具ナデ後、縦方向のミガキ	にぶい燈	7.5 YR 6/4	にぶい黄燈	10 YR 6/4	1mm 以下の黒と灰白の砂粒所々に微細な光沢粒を含む	
99	高坏	脚部、脚部～裾部	南区	S1					やや不良	風化により調整不明	風化のため調整不明	浅黄燈	10 YR 8/3	浅黄燈	10 YR 8/3	3mm 以下の褐色、黒、灰白、灰色粒、1mm 以下の褐色粒を含む	穿孔 4 箇所
100	高坏	脚部	南区	S1					良好	縦方向のミガキ	指ナデ、ナデ	にぶい黄燈	10 YR 7/3	にぶい燈	8 YR 6/4	3mm 以下の灰褐、灰白、にぶい赤褐、微細な透明の光沢粒を含む	
101	高坏	裾部	南区	S1					良好	工具ナデ後縦方向のミガキ、横ナデ、ミガキ	ナデ、指押さえ、ハケメ、横ナデ	にぶい燈	7.5 YR 7/3	にぶい燈	8 YR 7/4	2mm 以下の褐色、褐灰、微細な透明の光沢粒を含む	
102	高坏	脚部	南区	S1					良好	縦方向のミガキ、縦方向のハケメ（部分によってはその上にミガキ）、横ナデ	工具ナデ、指押さえ、横ナデ	にぶい黄燈	10 YR 7/4	にぶい黄燈	10 YR 6/4	2mm 以下の灰白、黒灰の砂粒を含む	
103	装飾高坏	裾部	南区	S1					良好	二叉状工具による 2 連続刺突文、ミガキ	ハケメ、横ナデ	浅黄燈	10 YR 8/4	にぶい黄燈	10 YR 7/4	3mm 以下の灰白、にぶい燈の粒微細な透明光沢粒を含む	穿孔あり

第４表　石器計測表

番号	器種	調査区	注記	層	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
104	軽石製品	南区	S 1 NE ベルト 1 層	S1 -1	軽石	5.80	11.40	5.00	49.90	
105	磨石	南区	S1R2		尾鈴山酸性岩類	12.10	11.30	5.80	1209.50	S1 床面直上
106	台石	南区	S1R3	S1-3	尾鈴山酸性岩類	27.70	23.50	13.50	11500.00	S1 床面直上
107	台石	南区	S1E TRC		尾鈴山酸性岩類	28.80	23.80	8.20	8000.00	S1 上部トレンチャーの東部分
108	石錘	南区	S51N		尾鈴山酸性岩類	4.60	4.50	1.70	53.90	

S95・S44

ア　遺構 (第 5・34 図)

S95 は南区北東側の調査区壁付近に位置し、Ⅲ層 (K-Ah) 上面にて検出した。プランの南東側が町道の下に位置し検出できなかったため全体像は不明である。検出した部分では、北東～南西軸 6.10m(張り出し部分を含む)、南東～北西軸 4.20m で、検出面から床面まで 0.41m であった。床面では、柱穴と見られるピット 1 基検出した。また、南東壁中央付近に焼土と炭化物を確認した。

S44 は S95 の南西側に位置し、Ⅲ層 (K-Ah) 上面にて検出した。長軸 3.10m(張り出しを含む)、短軸 2.60m で南西部分に張り出しを持ち、若干ゆがんだ方形を呈する。長軸は N55° E を指す。検出面から床面までは 0.44m であった。床面での柱穴は見られなかった。

S95 と S44 は切り合いの関係にあり、S44 が S95 を切っている。また、双方を検出する前に調査区東側トレンチを設定しⅤ層下部まで掘り下げていたため、両方の遺構とこのトレンチが重なる部分での平面プランは特定できなかった。さらに S44 の南西側に張り出しが見られる。この部分も一部トレンチャー攪乱を受けており張り出しの角の部分が特定できなかった。

イ　遺物

S95 の床面直上では完形の鉢 (117)、台石 (125)、剥片 (123) が出土している。遺構に伴う遺物では、甕・壺・鉢・高坏等の土器片、石製品がある。

S44 の床面直上では完形の小型鉢が出土している。遺構埋土中の遺物としては、甕・壺・鉢の破片や鉄製品がある。

S95

甕 (第 34 図 109 ～ 116、第 6 表)

109~113 は口縁部～胴部である。いずれも口唇部に横ナデが見られ、ゆるやかに「く」の字状に外反している。111・113 の外面には全体的にススが付着している。114 ～ 116 は底部である。116 は上底である。

鉢 (第 35 図 117 ～ 121、第 6 表)

117 は完形で出土している。119 は小型鉢である。

高坏 (第 35 図 122、第 6 表)

122 は高坏の裾部で穿孔を施す。

石器 (第 36 図 123 ～ 126、第 7 表)

123 は尾鈴山酸性岩類を用いた不定形剥片である。124 は尾鈴山酸性岩類製の磨石である。明確な摩滅は観察されないが、可能性を指摘したい。125 は尾鈴山酸性岩類製の台石である。表裏面に被敲打痕が部分的に観察される。いずれの面も研磨されている可能性があるが、自然面との差は明瞭でない。126 は磨製石器である。全面を研磨で石庖丁様に仕上げるが、刃部は作出しない。機能・用途は不明であるが、石庖丁未成品の可能性も考えうる。

S44

甕 (第 38 図 127、第 6 表)

127 は甕の口縁部で、内外面全体に横ナデがある。

壺 (第 38 図 128、第 6 表)

128 は壺の口縁部である。口唇部に横ナデがある。

鉢 (第 38 図 129・130、第 6 表)

129~130 は小型鉢の口縁部～底部である。130 は完形で出土している。

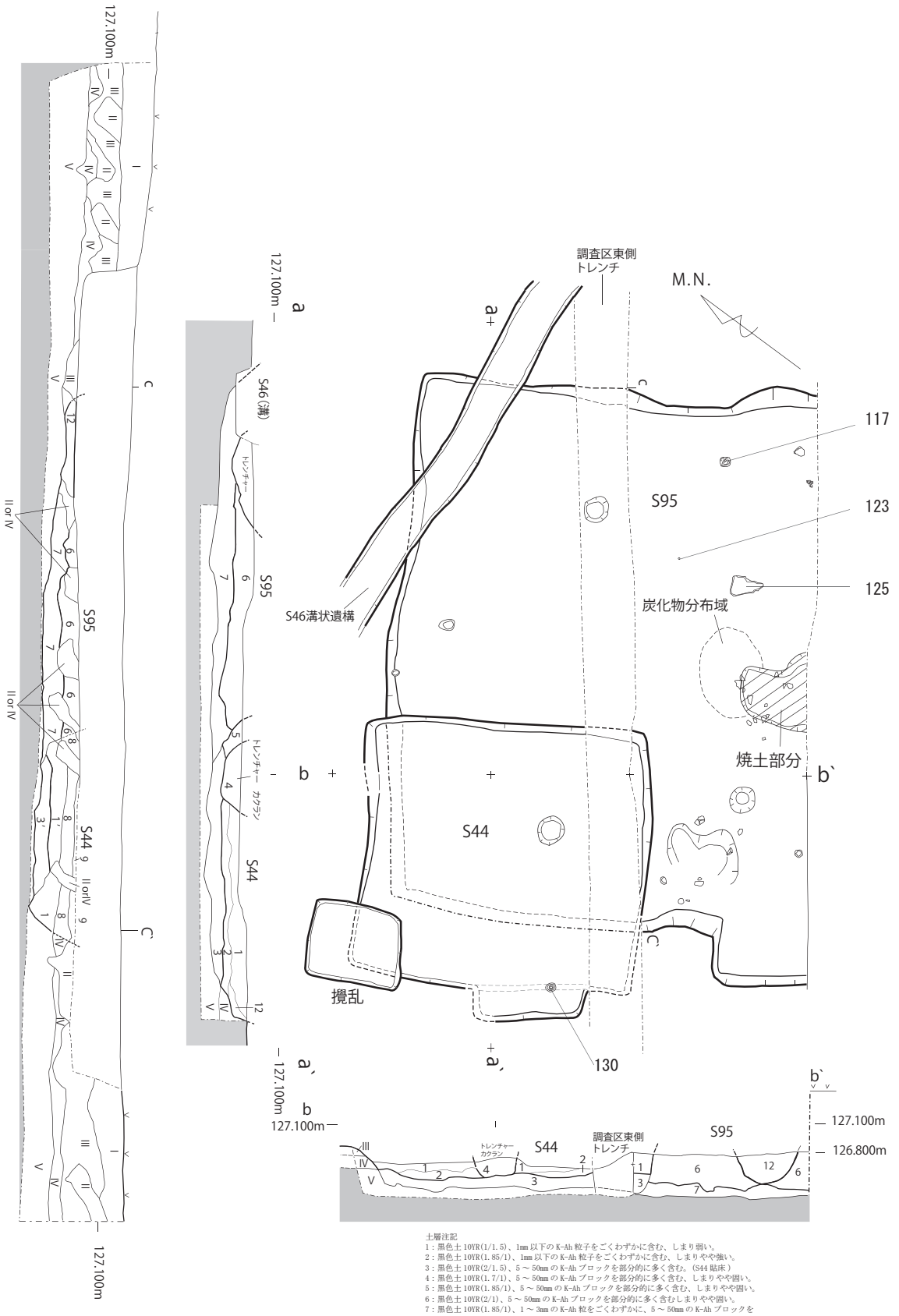
鉄製品 (第 39 図 131、第 8 表)

131 は鉄片である。

その他の出土遺物

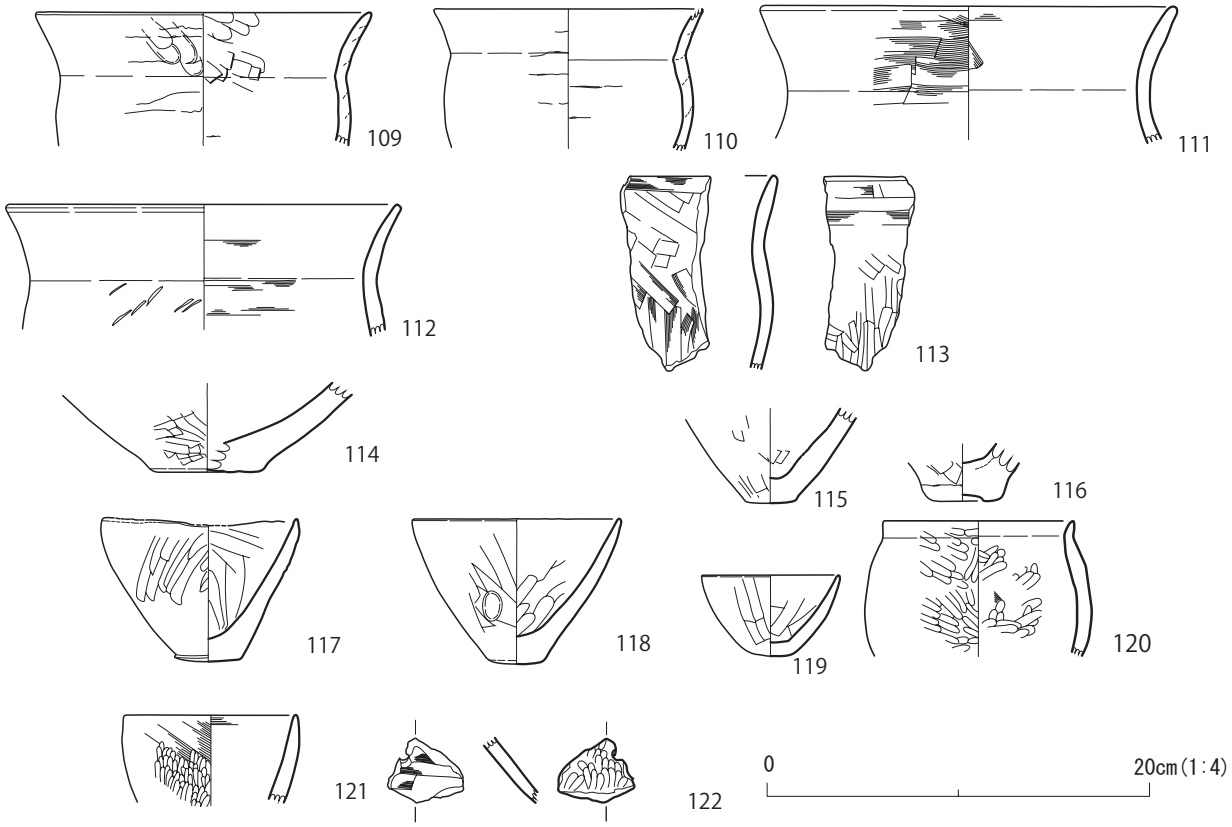
石器 (第 40 図 132、第 7 表)

132 は安山岩製の打製石鏃である。やや大振りの平坦剥離で仕上げる。技術・形態的特徴から弥生時代の所産である可能性がある。

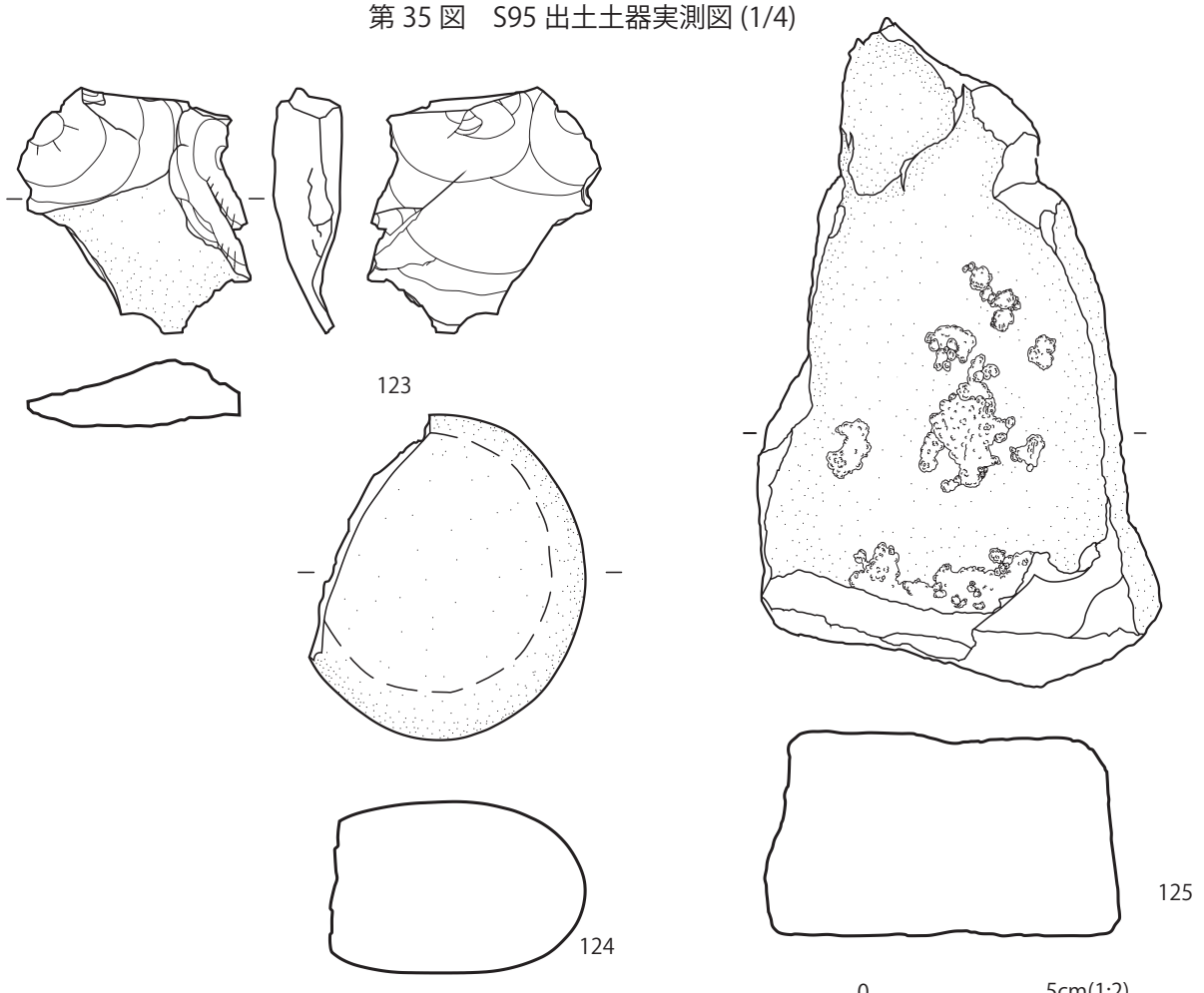


土層注記
1：黒色土 10YR(1/1.5)、1mm 以下の K-Ah 粒子をごくわずかに含む、しまり弱い。
2：黒色土 10YR(1.85/1)、1mm 以下の K-Ah 粒子をごくわずかに含む、しまりやや強い。
3：黒色土 10YR(2/1.5)、5 ～ 50mm の K-Ah ブロックを部分的に多く含む。(S44 貼床)
4：黒色土 10YR(1.7/1)、5 ～ 50mm の K-Ah ブロックを部分的に多く含む、しまりやや固い。
5：黒色土 10YR(1.85/1)、5 ～ 50mm の K-Ah ブロックを部分的に多く含む、しまりやや固い。
6：黒色土 10YR(2/1)、5 ～ 50mm の K-Ah ブロックを部分的に多く含むしまりやや固い。
7：黒色土 10YR(1.85/1)、1 ～ 3mm の K-Ah 粒をごくわずかに、5 ～ 50mm の K-Ah ブロックを部分的にやや多く含む、しまりやや固い。(S95 貼床)
8：黒色土 10YR(2/1) しまり弱い。
9：黒色土 10YR(1.7/1) しまり弱い。
10：黒色土 10YR(2/1)k-Ah ブロックをマーブル状にやや多く含む、しまり弱い。(S95 貼床)
11：黒色土 10YR(1.7/1) しまり弱い。
12：黒色土 10YR(1.7/1)1mm 以下の k-Ah 粒をごくわずかに含む、しまりやや弱い。
※1'：黒色土 10YR(2/1.5)1 ～ 20mm の K-Ah ブロックを部分的にわずかに含む、しまり弱い。
※3'：黒色土 10YR(2/1.5)1 ～ 2mm の K-Ah 粒をごくわずかに含む。(S44 貼床)

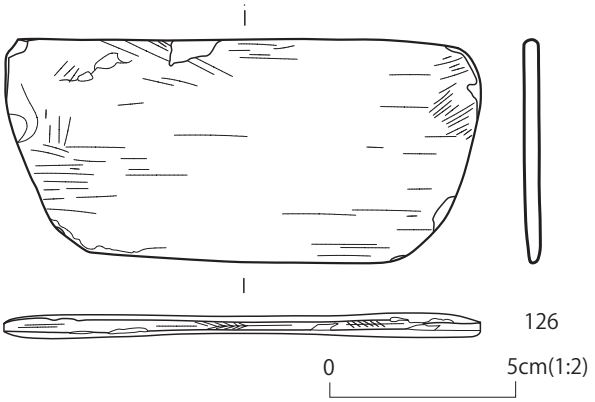
第34図　S95・S44(竪穴建物跡)実測図(1/60)　0　2m(1:60)



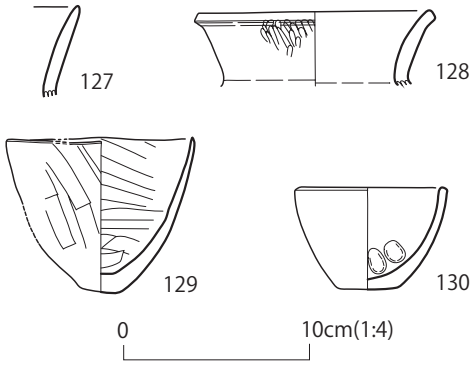
第 35 図　S95 出土土器実測図 (1/4)



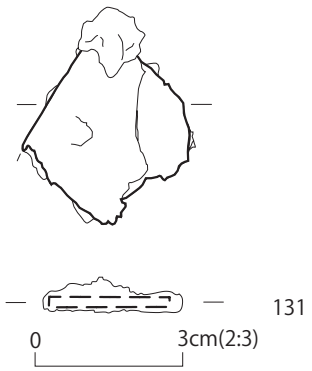
第 36 図　S95 出土石器実測図①(1/2)



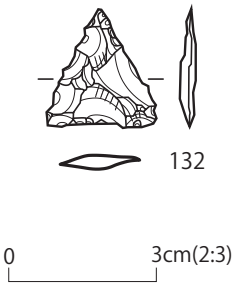
第 37 図　S95 出土石器実測図②(1/2)



第 38 図　S44 出土土器実測図 (1/4)



第 39 図　S44 出土鉄製品実測図 (2/3)



第 40 図　調査区内出土石器実測図 (2/3)

第５表　土器観察表

No	種別	器種部位	出土区	出土地点	法量 (cm)				焼成	手法・調整・文様他		色調				胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	胴部最大径		外面	内面	外面		内面			
109	甕	口縁～胴部	南区	S95	(17.6)				良好	横ナデ、粘土のつなぎ、工具による横ナデ後斜方向の指ナデ、横、斜方向のハケメ後ナデ	斜方向の指ナデ、斜方向の丁寧なナデ、工具の端部痕あり	黒	7.5 YR 2/1	褐	8 YR 4/4	2mm 以下の灰白色、燈色粒を多く含む	
110	甕	口縁～胴部	南区	S95	(14.2)				良好	横ナデ、粘土のつなぎ、工具による横ナデ後斜方向の指ナデ、横、斜方向のナデ	斜方向のナデ	にぶい赤褐	5 YR 5/4	にぶい燈	5 YR 6/4	微細な灰白色を多く含む	
111	甕	口縁～頸部	南区	S95	(21.8)				良好	横ナデ、横方向のハケメ	横方向の工具ナデ、風化していて不明だが工具によるナデ?	にぶい燈	7.5 YR 7/3	浅黄燈	10 YR 8/3	1mm 以下の灰白の砂粒、微細な光沢粒を含む	全体にスス付着
112	甕	口縁～頸部	南区	S95	(20.6)				良好	横ナデ、斜方向の丁寧なナデ	横ナデ、工具による丁寧なナデ	灰黄燈	10 YR 4/2	にぶい黄褐	10 YR 5/3	1mm 以下の灰白の砂粒を多く含む	
113	甕	口縁～胴部	南区	S95					良好	工具による横ナデ、縦方向の工具による丁寧なナデ	工具による横、斜、縦方向のナデ、	黒	10 YR 2/1	にぶい黄燈	10 YR 7/4	1mm 以下の灰白と黒の砂粒、光沢粒を含む	全体にスス付着
114	甕?	底部	南区	S95		(6.0)			良好	斜方向の工具ナデ	斜方向の工具ナデ、風化気味	褐	7.5 YR 5/6	黒	6 YR 2/1	3mm 以下の明褐灰、灰白色粒を多く含む、微細な金色、黒色光沢粒を多く含む	内面に炭化物付着
115	甕?	胴部～底部	南区	S95	2.6				良好	工具によるナデ、丁寧なナデ	工具による斜方向のナデ、指ナデ	黒褐	10 YR 2/3	暗褐	10 YR 3/4	2mm 以下の赤褐色、褐灰色を多く含む、微細な灰白色粒を含む	
116	甕?	底部	南区	S95		3.6			良好	粘土のつなぎ、工具による縦方向のナデ	斜方向のナデ	にぶい黄褐	10 YR 7/3	褐灰	10 YR 4/1	1mm 以下の灰白色粒を多く含む、微細な透明光沢粒を多く含む	
117	鉢	口縁～底部	南区	S95	10.1	3.6	7.2		良好	横ナデ、斜方向の工具ナデ、指押さえ後ナデ、ナデ	横ナデ、斜、縦方向のナデ	にぶい黄燈黒褐色	10 YR 7/4	にぶい黄燈	10 YR 7/4	1mm 以下の灰白色、黒色光沢粒を含む	
118	鉢	口縁～底部	南区	S95	(10.8)	(2.9)	(7.7)		良好	工具ナデ、指押さえ、ナデ	工具によるナデ	にぶい黄燈	10 YR 7/3	にぶい黄燈	10 YR 7/3	2mm 以下の明褐灰、灰色の粒を含む	
119	小型土器	口縁～底部	南区	S95	(7.4)	(2.0)	(4.3)		良好	ナデ、工具ナデ	ナデ、工具ナデ	にぶい黄燈燈	10 YR 6/4	燈	5 YR 6/6	3mm 以下の明褐灰、黒色光沢粒微細な透明の光沢粒、灰白の粒を含む	
120	鉢	口縁～胴部	南区	S95	(9.0)				良好	横、斜方向のミガキ	工具ナデ後ミガキ？風化のため調整不明	にぶい燈	7.5 YR 6/4	にぶい燈	8 YR 7/4	2mm 以下の灰色の粒、1mm 以下の灰白、黒の砂粒を含む	
121	鉢	口縁～胴部	南区	S95	(9.0)				良好	斜方向の工具ナデ後縦方向のミガキ	横方向の工具ナデ、丁寧なナデ	にぶい燈	7.5 YR 6/4	にぶい燈	8 YR 6/4	1mm 以下の灰白、黒の光沢粒を含む	
122	高坏	脚部 (裾部)	南区	S95					良好	縦方向のミガキ	横方向の工具ナデ	にぶい黄燈	10 YR 7/4	にぶい黄燈	10 YR 6/4	1mm 以下の灰白と黒の光沢粒を含む	円形の穿孔あり
127	壺	口縁部	南区	S44					良好	横ナデ	横ナデ	灰白	2.5 YR 8/2	淡黄	3 Y 8/3	2mm 以下の褐色、灰白色、微細で金色、黒色のガラス質の粒を含む	
128	壺	口縁部	南区	S44	(12.6)				良好	横ナデ、縦、斜方向のミガキ	丁寧な工具による横ナデ	にぶい黄燈	10 YR 7/4	にぶい黄燈	10 YR 7/4	1mm 以下の灰白色、褐色粒、ガラス質の粒を多く含む	
129	鉢	口縁～底部	南区	S44	10.0	1.8	8.3		良好	ナデ、斜方向の工具ナデ	ナデ、斜、横方向の工具ナデ	にぶい黄燈	10 YR 4/4	にぶい黄燈	10 YR 6/4	3mm 以下の褐色、灰白色粒を含む	
130	小形鉢	口縁～底部	南区	S44	(7.6)	3.3	5.5		良好	ナデ	ナデ、指押さえ	にぶい黄燈	10 YR 7/4	にぶい黄燈	10 YR 7/4	3mm 以下の灰白色、褐色粒を含む	

第６表　石器計測表

番号	器種	調査区	注記	層	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
123	剥片	南区	S95-34 8 層	S95-8 層	尾鈴山酸性岩類	6.40	6.10	1.80	56.70	
124	磨石	南区	S95-79 8 層	S95-8 層	尾鈴山酸性岩類	8.50	7.20	4.50	395.40	
125	台石	南区	S95-80 8 層上	S95-8 層上	尾鈴山酸性岩類	35.00	21.20	11.00	11000.00	S95 床面直上
126	石包丁未製品	南区	S44-1 1 層	S44-1 層	頁岩	6.00	12.80	0.70	82.50	
132	打製石鏃	南区	S5- Ⅱ層	Ⅱ	珪質頁岩	2.20	2,10	0.,30	1.00	基本層序Ⅱ層からの出土

第７表　鉄製品計測表

番号	種別	調査区	最大長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
131	鉄片	南区			0.2	6.30	S44 トレンチャー攪乱より出土 両面に木質錆あり。

第５節　中世～近世の遺構と遺物

１　中世～近世の概要

中世～近世の包含層は五次調査基本層序におけるⅡ層が相当する。しかしⅡ層内での遺構精査で土の色調の変化を捉えることが難しいため、Ⅲ層上面での精査にて遺構の確認を行った。(ここでは遺構を確認後、出土する遺物から遺構の性格や時期の特定を行った。)

Ⅱ・Ⅲ層の残存が見られた南区の遺構として、竪穴建物跡３軒、掘立柱建物跡３棟、土坑２基、溝状遺構１条、遺物を出土する土坑２基、遺物を出土するピット８基を検出した。

２　遺構と遺物

(1) 竪穴建物跡

南区では中央から南側にかけⅢ層の残存状況がよく、３軒の竪穴建物跡を確認した。

S2(竪穴建物跡)

ア　遺構(第５・41図)

S2は南区中央部S1に隣接する南西側で検出した。当初Ⅲ層上面の黒色部分を遺構と推定したが、トレンチを入れ精査したところ、第41図平面プランの北東部に、長軸2.00m短軸1.80mで長軸がN60°Eを指し、四隅にピットをもつ隅丸方形を呈する竪穴建物跡を検出した。

イ　遺物

S2からは土器片･陶磁器片･鉄製品が出土した。

土師器(第42図133、第９表)

133は土師坏片である。内外面に回転ナデが施され、底部にヘラ切り痕を認める。

陶磁器(第42図134～136、第９表)

134は中国産青磁である。残存部は釉薬がやや厚く緑灰色を呈するが、細かな貫入が観察できる。135は器種不明の陶磁器である。136は常滑焼の甕である。口縁部がＮ字状を呈する。中野編年の6a型式(13世紀)に相当する。

鉄製品(第43図・第11表)

137は刀子もしくは鉈と思われるが錆による腐食が激しく器種特定ができなかった。S2の２層より出土した。

S3(竪穴建物跡)

ア　遺構(第５・44図)

S3は南区の南西部端に位置し、Ⅲ層上面で検出した。張り出しを２箇所もつ不定長方形である。長軸(張り出しを含む)2.83m、短軸2.24mで、長軸はN56°Eを指す。床面に柱穴と考えられるピットを４基認める。

イ　遺物

S3から土師器・須恵器・瓦質土器・石器が出土した。土師器・須恵器・石器は床面で、瓦質土器は遺構内ピットからの出土であった。

土師器(第44図138～140、第９表)

138・139は土師器小皿で、底部はヘラ切りである。139は表面がタール状に変色しており灯明皿として使われた可能性がある。140は土師器坏で底面はヘラ切りである。外面に強い回転ナデ、内面にも回転ナデが確認できる。

須恵器(第44図141、第９表)

141は東播系須恵器の鉢である。口縁部に自然釉を認める。外部は回転ナデを呈する。

瓦質土器(第44図142、第９表)

142は瓦質土器の胴部と思われるが器種は不明である｡外面に格子目のタタキが施されている。

石器(第45図143、第10表)

143は尾鈴山酸性岩類製の凹石である。表裏面に浅い凹面が観察される。

S4(竪穴建物跡)・S5～S6(土坑)

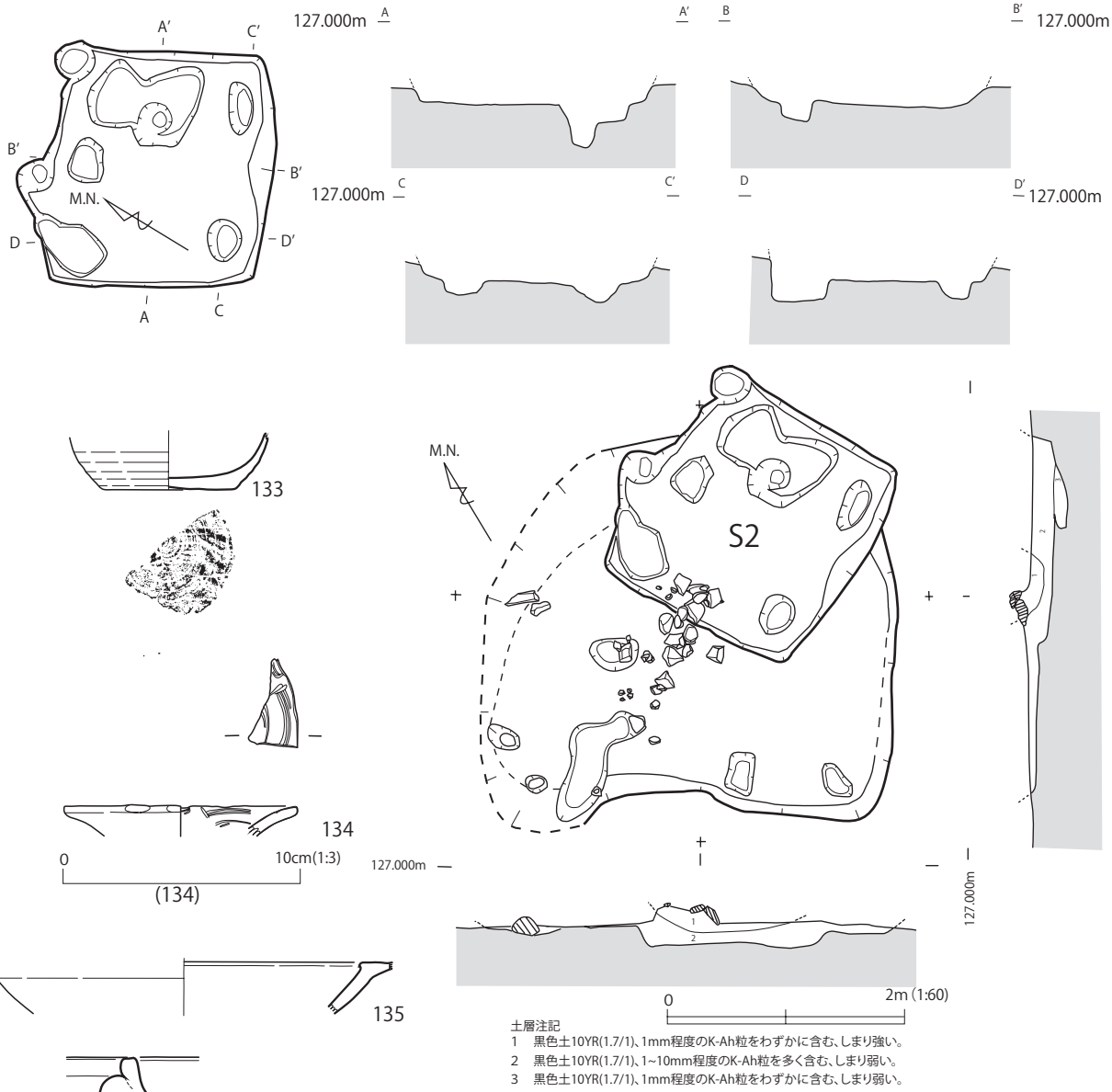
ア　遺構(第５・46図)

S4はS5～S6、S46や近代のS94と切り合いの関係で検出された。切り合い順は古いものからS4→S46→S5→S6→S94となる。

S4は長軸2.46m、短軸2.00mで隅丸方形を呈し長軸がN48°Eを指す。柱穴と思われるピットを１基確認した｡S5は長軸1.44m､短軸1.22mで隅丸方形を呈し、長軸がN98°Eを指す。S6は長軸3.40m、短軸0.80mの隅丸方形を呈し、長軸がN46°Eを指す。

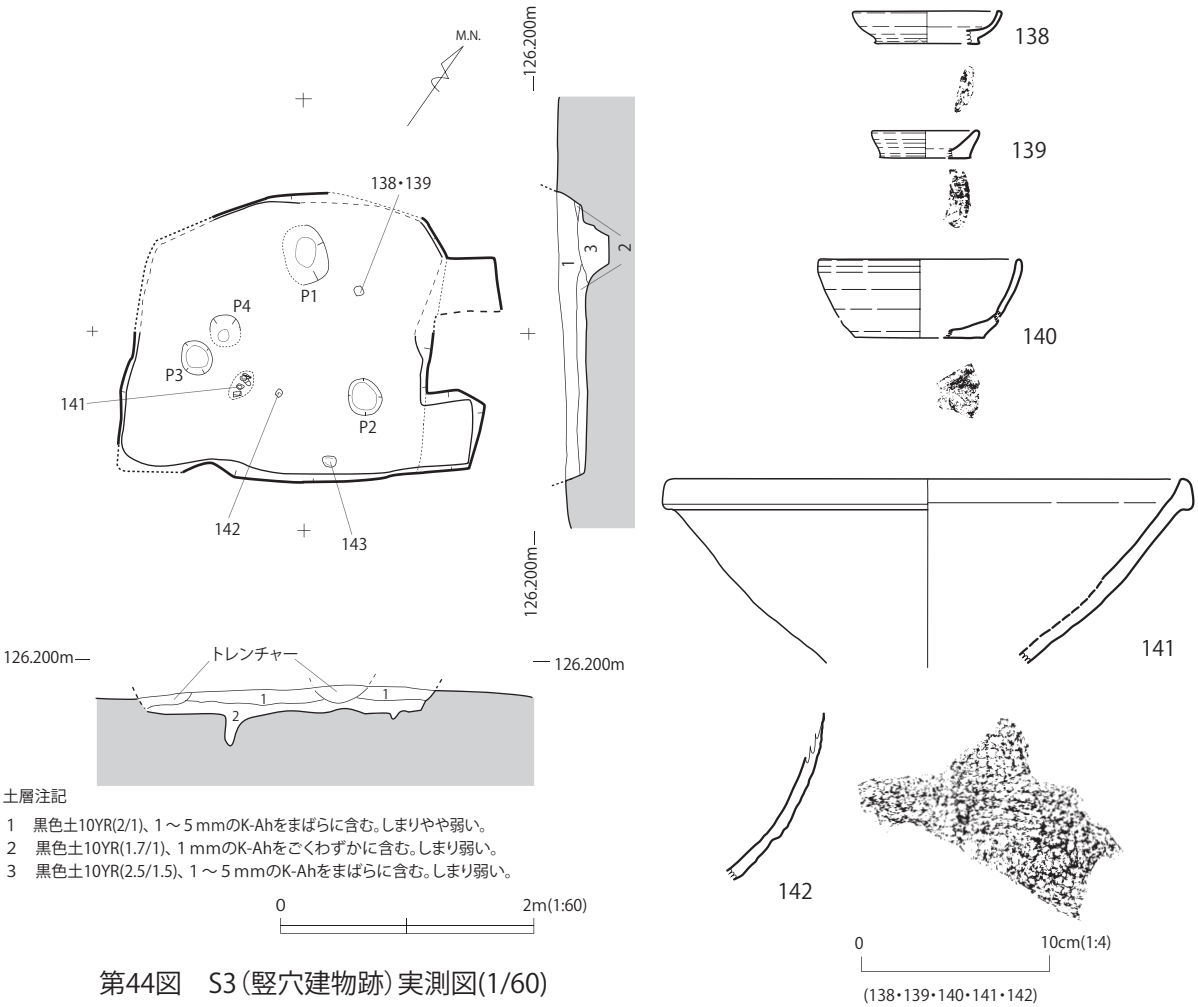
イ　遺物

S4から中世の土師器片と弥生土器片が出土した。



第41図　S2(竪穴建物跡)実測図(1/60)

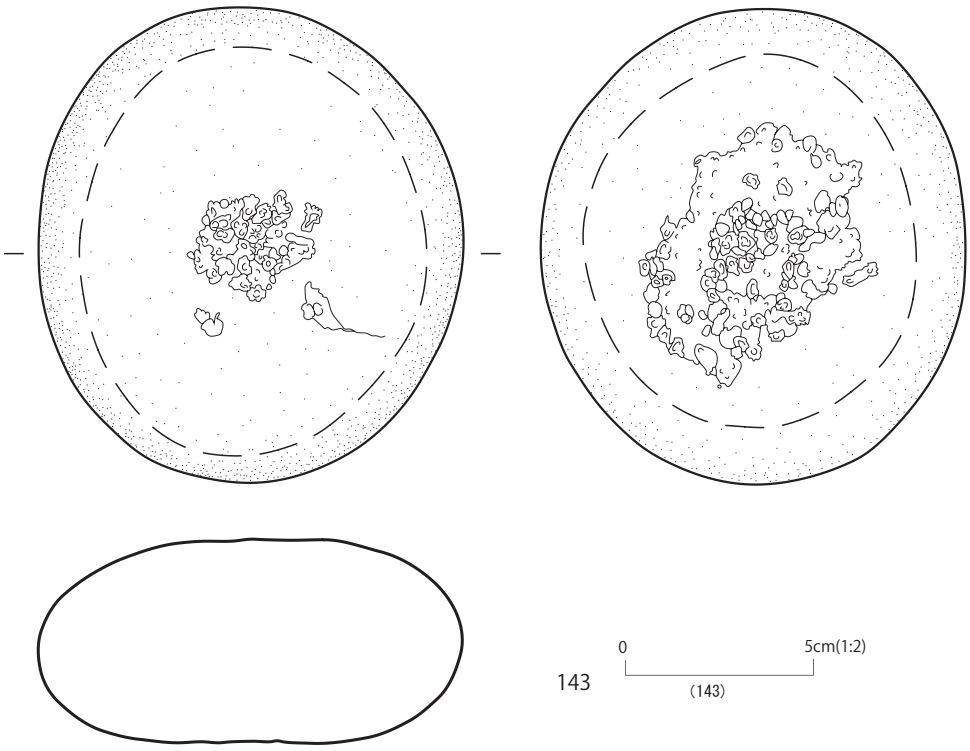
第 42 図　S2 出土土器・須恵器・瓦質土器実測図



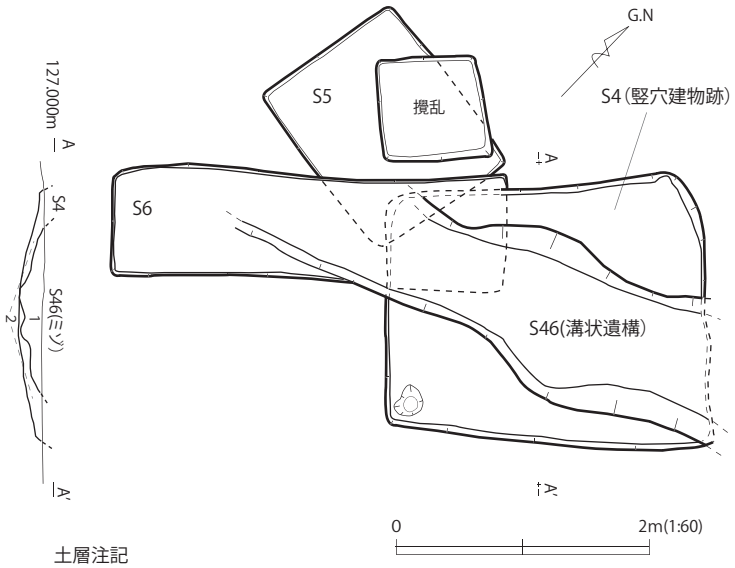
土層注記

1　黒色土10YR(2/1)、1～5mmのK-Ahをまばらに含む。しまりやや弱い。
2　黒色土10YR(1.7/1)、1mmのK-Ahをごくわずかに含む。しまり弱い。
3　黒色土10YR(2.5/1.5)、1～5mmのK-Ahをまばらに含む。しまり弱い。

第44図　S3（竪穴建物跡）実測図(1/60)



第 45 図　S3 出土土器・須恵器・瓦質土器・石器実測図 (縮尺はスケールに表示)



土層注記
1： 黒色土10YR(1.7/1)、1mm以下のK-Ah粒をごくわずかに含む、しまり弱い。
2： 黒色土10YR(1.7/1)、1～30mmのK-Ah粒を多く含む、しまり弱い。

第46図　S4(竪穴建物跡)、S5・S6(土坑)、S46 一部（溝状遺構）　実測図（1/60)

第 8 表　遺物観察表 (土師器・須恵器・陶磁器・瓦質土器)

No	種別	器種部位	出土区	出土地点	法量 (cm)				焼成	手法・調整・文様他		色調				胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	胴部最大径		外面	内面	外面		内面			
133	土師器（坏）	体部～底部	南区	S2		(7.4)			良好	回転ナデ、ヘラ切り、線状の痕あり (板状圧痕)	回転ナデ	浅黄燈	7.5 YR 8/6	燈	5 YR 7/6	きめ細かい	
134	青磁	口縁部	南区	S2	(9.9)				堅緻	施釉、貫入あり	施釉	オリーブ灰	2.5 GY 6/1	オリーブ灰	3 GY 6/1	精良　色調は灰白 (2.5Y7/1)	
135	不明（蓋）	口縁？	南区	S2	(20.2)				堅緻	回転ナデ	丁寧なナデ、回転ナデ	灰白	5 Y 7/2	灰黄	3 Y 7/2	精良　色調は灰黄 (2.5Y6/2) 黒褐 (2.5Y3/2)	
136	陶器（常滑）壺	口縁部	南区	S2					堅緻	ナデ、自然釉	ナデ、自然釉	暗赤褐	2.5 YR 4/3	灰赤	3 YR 4/2	1mm 以下の灰白の粒を多く含む　色調は褐灰 (10YR4/1)	
		体部	南区							ナデ	ナデ、粘土のたるみが見られる、	灰褐	5 YR 5/2	灰褐	8 YR 4/2	5mm 大の暗灰の粒、1mm 以下の灰白の粒を含む、色調は褐灰 (10YR5/1)	
		体部（底部付近）	南区							ナデ	指ナデ	灰褐	7.5 YR 5/2	灰褐	8 YR 4/2	2mm 以下の灰白の粒を含む、色調は褐灰 (7.5YR4/1)	
138	皿	口縁～底部	南区	S3	(7.8)	(5.5)	(2.0)		良好	ナデ、回転ナデ、ヘラ切り	ナデ、回転ナデ	にぶい燈	7.5 YR 7/4	浅黄燈	8 YR 8/4	1mm 以下の明赤褐の粒を含む	
139	皿	口縁～底部	南区	S3	(5.6)	(4.8)	(1.5)		良好	ナデ, 回転ナデ、ヘラ切り	ナデ、回転ナデ	灰黄褐	10 YR 4/2	灰黄燈	10 YR 6/2	1mm 以下の褐灰、にぶい燈の粒、微細な透明の光沢粒を含む	
140	土師器（皿）	口縁～底部	南区	S3	(10.6)	(6.9)			良好	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	にぶい燈	7.5 YR 7/4	浅黄燈	8 YR 8/4	1mm 以下の赤褐色の粒を少量含む	
141	東播系捏鉢須恵器	口縁～体部	南区	S3	(27.0)				良好	自然釉、回転ナデ	ナデ	黄灰	2.5 Y 5/1	黄灰	3 Y 5/1	5mm 以下の灰色の粒を少量含む	
142	瓦質土器（壺）	胴部	南区	S3					良好	格子目タタキ	丁寧なナデ	にぶい黄燈	10 YR 6/3	灰黄褐	10 YR 5/2	3mm 以下の褐、黒 褐色の粒、1mm 以下の灰白の粒を含む	内面に黒変あり

第 9 表　石器計測表

番号	器種	調査区	表記	層	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
143	凹石	南区	S3R2		尾鈴山酸性岩類	12.60	11.20	5.40	1175.90	S3 床面直上

第 10 表　鉄製品計測表

番号	種別	調査区	最大長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
137	刀子？	南区	4.8	2.0	0.2	8.0	S2-2 層より出土 、基部に木質錆あり。

(2) 掘立柱建物跡

南区南側に 3 棟検出した。

柱穴からは土師器が多く出土しており、建物の帰属時期は中世と考えられる。なおトレンチャーによる攪乱の影響を受け、柱穴の検出面が異なる場合もあった。

S262

ア　遺構 (第 5・47 図)

南区で検出した建物跡で、南部に位置している。梁間 1 間 (1.25m)、桁行 1 間 (2.60m) の南北棟である。主軸は N 38° W で身舎面積は 3.51 ㎡を測る。柱穴掘方は長径平均 27.5cm、短径平均 20.8cm でほぼ円形を呈している。S248 と S250 の柱穴は攪乱下の面で検出している。

イ　遺物 (第 47・49 図 144、第 12 表)

144 は柱穴 S248 から出土した土師器坏である。体部内外面に回転ナデを認め、底部はヘラ切り痕を残す。

S263

ア　遺構 (第 5・47 図)

南区で検出した建物跡で、南東部に位置している。

梁間 1 間 (1.00m)、桁行 2 間 (4.75m) の東西棟である。主軸は N60° E である。南東部に S263 に関連するとみられる柱穴 S259 を検出した。この柱穴は桁の延長には対応すると思われるが、梁に対応する柱穴は検出できなかった。S253 ～ S258 を柱穴として考えると、身舎面積は 4.13㎡を測る。梁間柱間は 1.00m、桁行柱間は 1.85 ～ 2.85 mである。柱穴掘方は長径平均 25.17cm、短径平均 20.83cm でほぼ円形を呈している。S263 からは遺物の出土は見られない。

S264

ア　遺構 (第 5・47 図)

南区で検出した建物跡で、南西部に位置している。

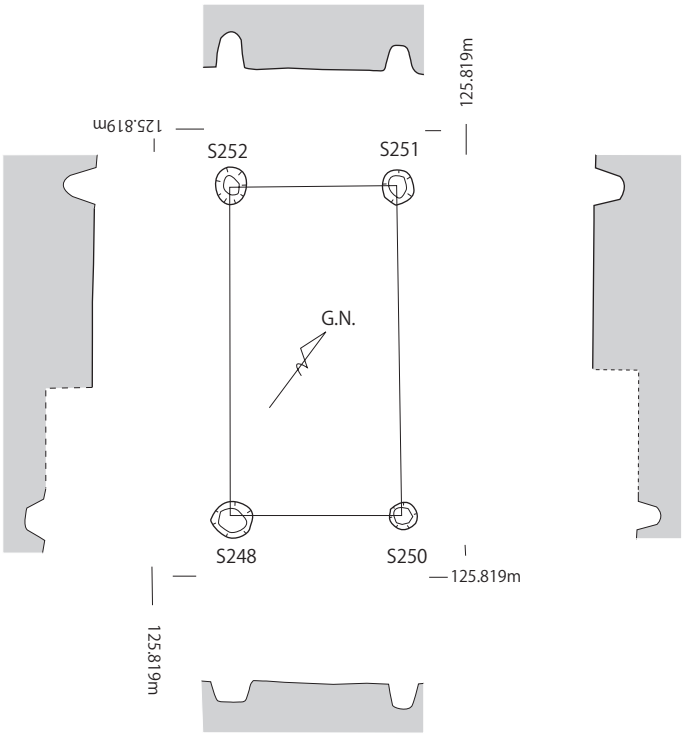
梁間 1 間 (1.65m)、桁行 2 間 (2.50m) の東西棟である。主軸は N54° E で、身舎面積は 4.13㎡を測る。梁間柱間は 1.65m、桁行柱間は 1~1.45m である。柱穴掘方は長径平均 29.17cm、短径平均 22.17cm で円形と楕円不定形を呈している。

イ　遺物 (第 47・48 図 145 ～ 153、第 12 表)

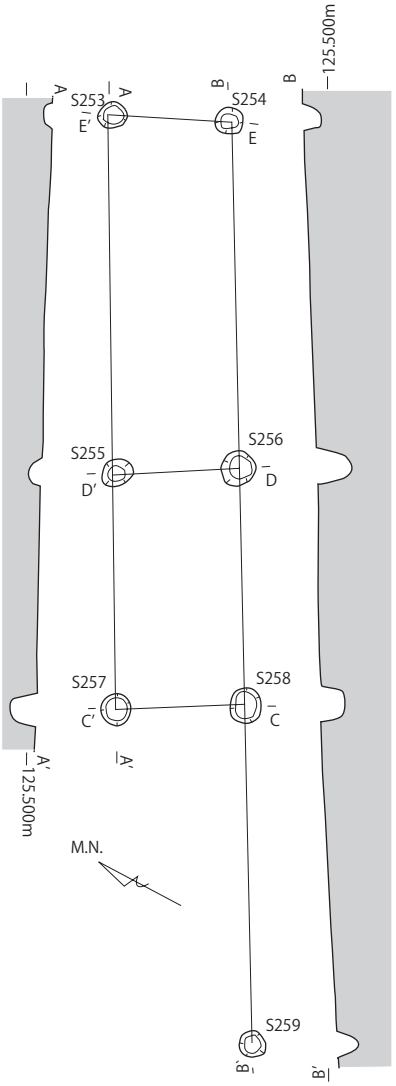
145 ～ 153 はいずれも S264(掘立柱建物跡) の柱穴もしくは遺構内外の隣接ピットから出土した。同一柱穴から複数の遺物が出土する特徴がある。145・150・153 は S226 から出土した土師器である。これらは土師器坏で内外面に回転ナデを呈し、底部はヘラ切りが施されている。150 は土師器の口縁部が欠損していたが、底部の大きさにより土師器坏と判断した。153 は口縁部～体部の出土であり、口縁部が若干内反する特徴をもつ。146 ～ 148 は S231 から出土した。146 は口縁部～体部、149 は口縁部～底部、148 は底部である。いずれの内外面も回転ナデが施されている。149 は S230 から出土した。体部中ほどから底部にかけての内外面に回転ナデが施されている。、151 は S234(隣接ピット) から出土した土師器坏である。底部から体部内外面に回転ナデが施されている。

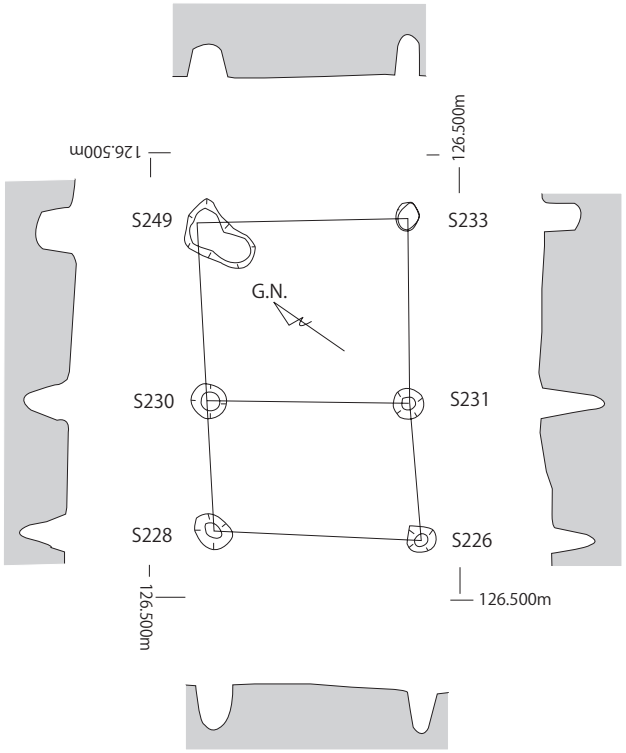
(3) 南区出土土器 (第 49 図 154 ～ 164、第 12 表)

154 ～ 162 は土師器坏で、163 ～ 164 は土師器皿である。これらの遺物には内外面に回転ナデが施されている。底部は、ヘラ切り痕がみられるものが多いが、157・163 の底部には糸切り痕が確認できた。

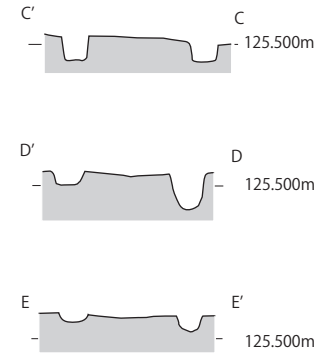


S262

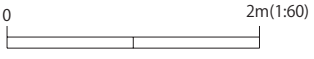




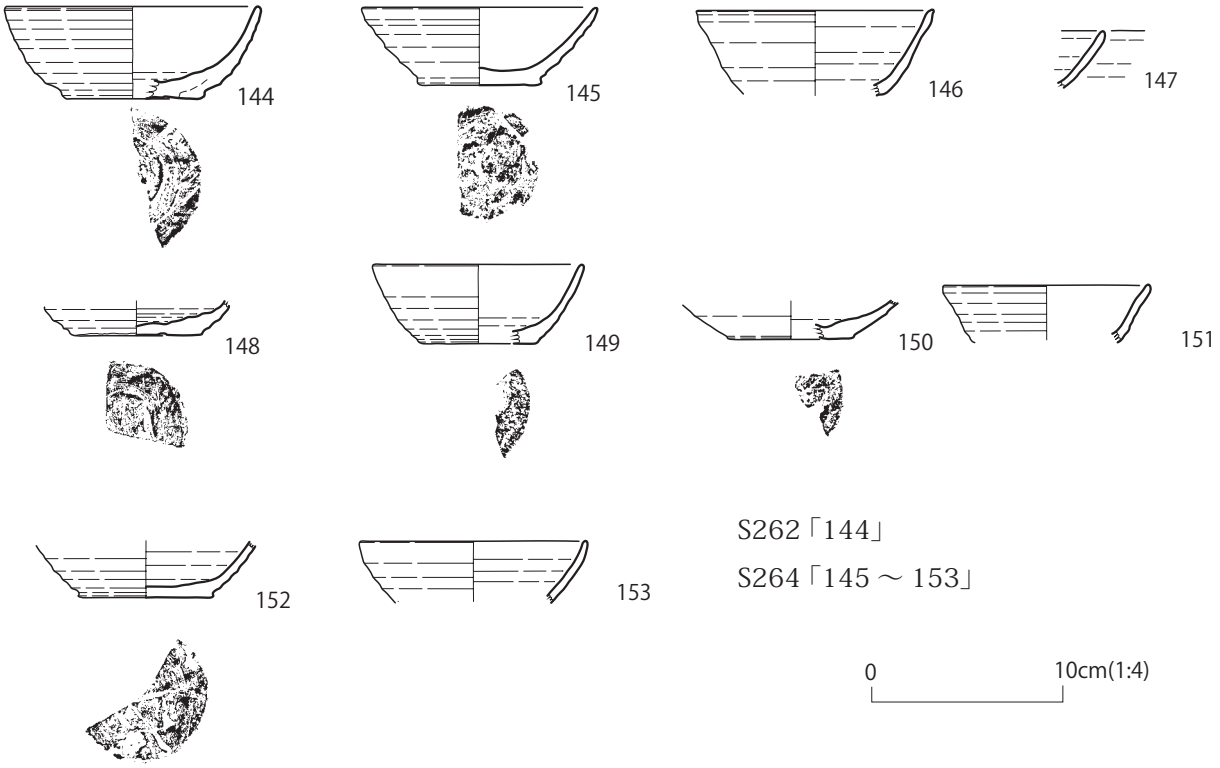
S264



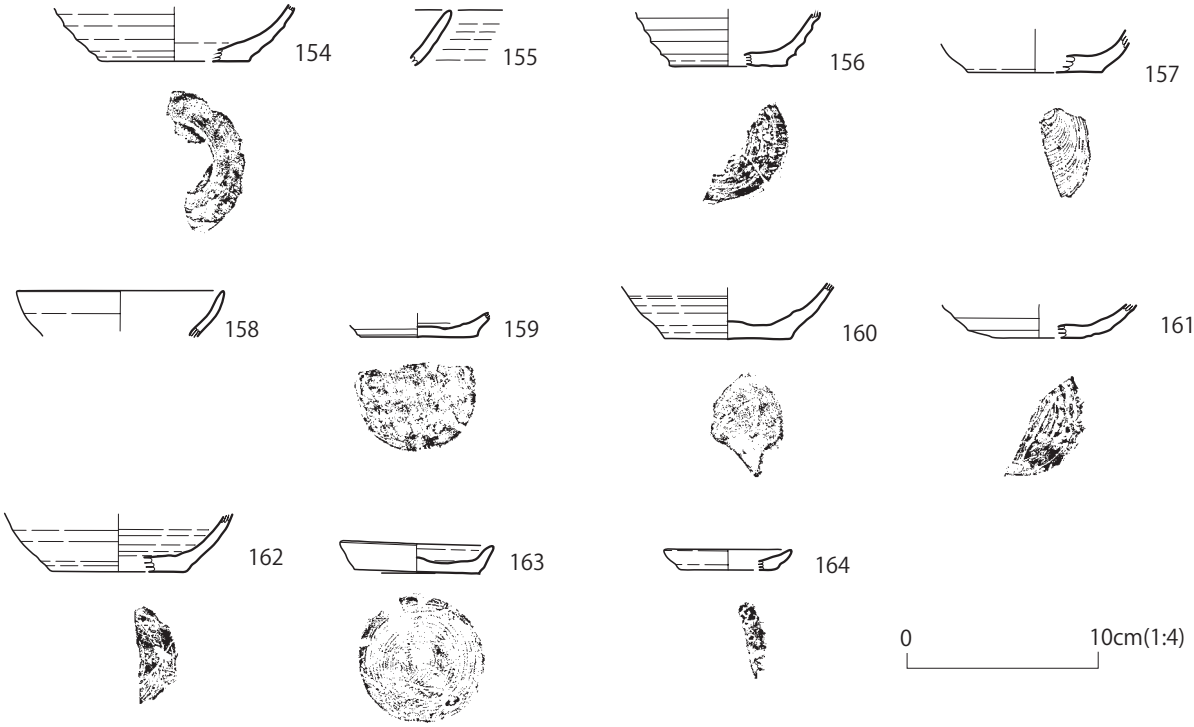
S263



第47図　掘立柱建物跡実測図　(1/60)



第 48 図　S262・S264 出土土器実測図 (1/4)



第 49 図　中世南区出土土器実測図 (1/4)

第 11 表　土師器観察表

No	種別	器種部位	出土区	出土地点	法量 (cm)				焼成	手法・調整・文様他		色調				胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	胴部最大径		外面	内面	外面		内面			
144	坏	口縁～底部	南区	S248	(12.4)	(7.0)	4.5		良好	ナデ、回転ナデ、ヘラ切り	ナデ、回転ナデ	浅黄燈	10 YR 8/4	浅黄燈	10 YR 8/4	灰色の微細な粒を少し含む、きめ細かい	
145	坏	口縁～底部	南区	S226	(12.2)	(6.5)	4.1		良好	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	浅黄燈	10 YR 8/4	浅黄燈	10 YR 8/3	きめ細かい	
146	坏	口縁～底部	南区	S231	(12.2)	(7.5)			良好	ナデ、回転ナデ、ヘラ切り	ナデ、回転ナデ	浅黄燈	10 YR 8/3	浅黄燈	10 YR 8/3	きめ細かい	
147	坏	口縁部	南区	S231					良好	ナデ、回転ナデ	ナデ、回転ナデ	浅黄燈	7.5 YR 8/4	浅黄燈	8 YR 8/4	きめ細かい　1mm 以下の褐色の粒を含む	
148	坏	体部～底部	南区	S231		(6.2)			良好	回転ナデ、指ナデ、ヘラ切り、工具痕？	回転ナデ	浅黄燈	10 YR 8/4	浅黄燈	10 YR 8/4	きめ細かい	
149	坏	口縁～底部	南区	S230	(10.9)	(6.2)	4.1		良好	ナデ、回転ナデ、ヘラ切り	ナデ、回転ナデ	灰白	10 YR 8/2	灰白	10 YR 8/2	きめ細かい、1mm 以下の褐色の粒を含む	
150	坏	胴部～底部	南区	S226		(6.6)			良好	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	にぶい黄燈	10 YR 7/3	にぶい黄燈	10 YR 7/3	きめ細かい、微細な光沢粒を多く含む	
151	坏	口縁～胴部	南区	S234					良好	ナデ、回転ナデ	ナデ、回転ナデ	にぶい黄燈	10 YR 7/3	にぶい黄燈	10 YR 6/3	きめ細かい、微細な光沢粒を多く含む	
152	坏	胴部～底部	南区	S232		(7.0)			良好	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	にぶい燈	7.5 YR 6/4	にぶい燈	8 YR 6/4	きめ細かい、2mm 以下の褐色の粒を少量含む	
153	坏	口縁～胴部	南区	S226	(11.9)				良好	ナデ、回転ナデ	ナデ、回転ナデ	燈	7.5 YR 7/6	燈	5 YR 7/6	きめ細かい、1mm 以下の褐色の砂粒を含む	
154	坏	胴部～底部	南区	－		(7.6)			良好	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	浅黄燈	10 YR 8/4	にぶい黄燈	10 YR 8/4	きめ細かい	
155	坏	口縁部	南区	－					良好	回転ナデ	回転ナデ	浅黄燈	10 YR 8/3	浅黄燈	10 YR 8/3	きめ細かい、2mm 以下の褐色の粒を含む	
156	坏	胴部～底部	南区	－		(6.2)			良好	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	にぶい黄燈	10 YR 7/4	にぶい黄燈	10 YR 7/4	きめ細かい、微細な黒灰の粒を含む	
157	坏	胴部～底部	南区	－					良好	回転ナデ、糸切り底	回転ナデ	にぶい黄燈	10 YR 7/4	にぶい黄燈	10 YR 7/3	きめ細かい、灰白、褐色の微細な粒が少し含まれる	
158	坏	口縁部	南区	－	(10.9)				良好	回転ナデ	回転ナデ	浅黄燈	10 YR 8/4	浅黄燈	10 YR 8/4	赤褐色の微細な粒を含む	
159	坏	底部	南区	－		6.3			良好	回転ナデ、ヘラ切り後ナデ	回転ナデ、回転ナデ後横方向のナデ	浅黄燈	10 YR 8/4	浅黄燈	10 YR 8/4	赤褐色の微細な粒を含む	
160	坏	体部～底部	南区	－		(6.6)			良好	回転ナデ、ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	にぶい黄燈	10 YR 7/4	燈	8 YR 7/6	1mm 以下の灰色の粒を少量含む、微細な透明光沢粒を含む	
161	坏	体部～底部	南区	－		(7.4)			良好	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ、指ナデ	にぶい黄燈	10 YR 6/3	灰黄褐	10 YR 4/2	明赤褐色の微細な粒を少量含む	
162	坏	胴部～底部	南区	－		(7.0)			良好	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	にぶい燈	7.5 YR 7/4	燈	8 YR 7/6	黒、褐色の微細な粒を含む	
163	皿	口縁～底部	南区	－	7.9	6.5	1.5		良好	ナデ、回転ナデ、糸切り底	ナデ、回転ナデ	燈	7.5 YR 7/6	燈	8 YR 7/6	微細な黒灰な粒、透明光沢粉粒を多く含む	
164	皿	口縁～底部	南区	－	(6.6)	(5.1)	1.1		良好	回転ナデ、ヘラ切り？	回転ナデ	燈	7.5 YR 7/6	燈	8 YR 7/6	きめ細かい	

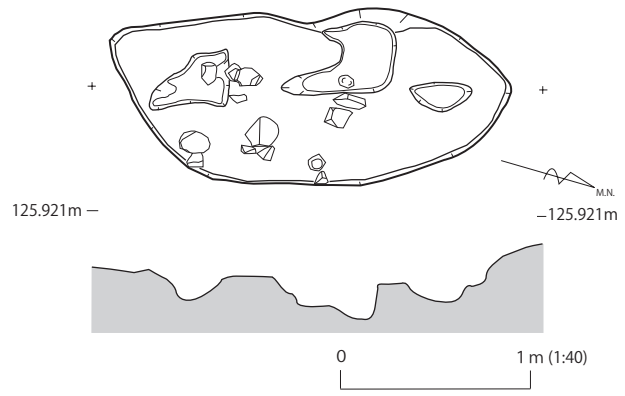
第 6 節　その他の遺構と遺物

本節では、時期不明の遺構や、表土一括やグリット一括、攪乱で出土した遺物について記述する。

1　遺構

S36(土坑)(第 5・50 図)

南区南東部のⅢ層上面で検出された。主軸方位は N18° W で、変形の楕円形を呈す。埋土は黒色土で、砂岩が 1 個と赤化している尾鈴山酸性岩類の礫 13 個が含まれていた。また、尾鈴山酸性岩類の礫は円礫が 1 個、残りが角礫で、すべてに赤化が見られた。他にもコンクリート片が含まれていた。底面は凹凸が見られる。遺構から遺物は出土していない。



第50図　S36（土抗）実測図(1/40)

S46(溝状遺構)(第 5・34・46・51 図)

南区東中央のⅢ層上面で検出された。全体像は不明であるが、竪穴建物跡 (S95) を切る。遺物はない。

S49(土坑)(第 5・52 図、第 13 表)

南区南部中央のⅢ層上面で検出された。トレンチャーの攪乱の影響を受けており、主軸方位は確定できない。埋土中から遺物 165・166 が出土した。165 は壺の底部であり、平底を呈し内外面に工具ナデが見られる。166 は統制陶器で、高台内に「岐」、「358」の刻印が確認できた。

2　遺物

表土一括や調査グリッド一括として取り上げた遺物 (34 点) を時代別に分類し、器種・大きさ別に掲載した。

(1) 古代 (第 53 図 166・第 14 表)

167 は北区表土より出土した甕の口縁部である。

(2) 中世 (第 53 図 168 ～ 188・第 14 表)

168 は南区 Q5 グリッドⅡ層より出土した瓦質土器で甕の胴部と思われる。外面に格子目のタタキ痕、内面に板状工具による横・斜め方向のナデが施される。169 は南区 P3 グリッドⅡ層より出土した須恵器で甕の胴部と思われる。色調は内外面とも灰褐色で硬質であり、外面に格子目のタタキ痕、内面に板状工具による横・斜め方向のナデが施される。170 は南区 P2 グリッドⅡ層より出土した甕の口縁～体部で、備前である。179 は土製品である。製品内部 2 カ所に直径 1 ～ 2mm 程度の孔を伴う。使途は不明である。181 は中国産青磁碗の底部である。 182・183 は中国産白磁皿である。184 ～ 187 は Q5 グリッドⅡ層より出土した中国産青磁碗である。186 には蓮状文が施されている。

188 は P3 グリッドⅡ層より出土した陶磁器の摺鉢の口縁～体部である。14 世紀の備前焼と推定される。

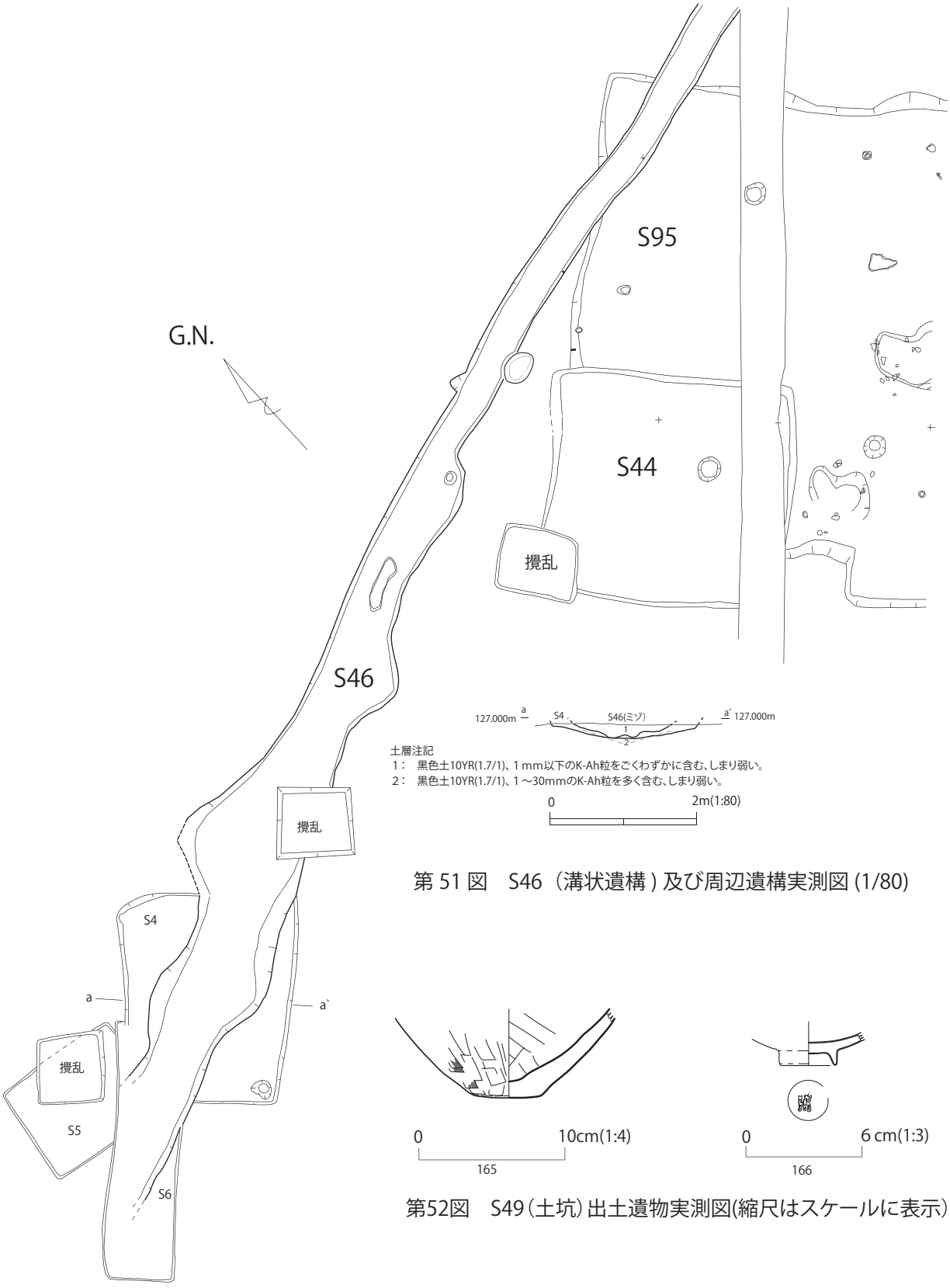
(3) 近世 (第 53 図 189 ～ 193・第 14 表)

189 ～ 191 はいわゆるくらわんか碗で、190 は口縁部内面や体部外面に二重格子状文が施される。191 は内面見込に蛇ノ目釉剥ぎを施す。また、中央にコンニャク印判の五弁花文が、外面には折れ松葉文が施される、１９世紀以降のものと推定される。192 は土瓶の口縁部～体部である。備前系と推定される。193 は北区の表土で出土した陶磁器水注の注口で、緑釉を呈しており交趾三彩？ではないかと推定される。

(4) 近世以降・時期不明

(第 54 図 194 ～ 200・第 15 ～ 17 表)

194 は S1 に隣接する南区中央トレンチのⅡ層攪乱から出土した鉄器である。形状や X 線撮影の状態から刀の一部ではないかと推定される。195 ～ 197 は北区表土から出土した。195 は 1 銭貨幣で、大正二十年発行である。196 はキセルの雁首、197 はキセルの吸い口部分であると推定されるが、銅の成分を含む金属製品で、鋳造されたものと思われる。198 は砥石または硯の破片と考えられ、黒褐色の頁岩を用いる。199 は火打ち石である。灰緑色のチャートを用いる。剥片を素材とし、両側縁にツブレが観察される。200 は火打ち石である。灰緑色のチャートを用いる。石核状で複数の稜線上にツブレが観察される。

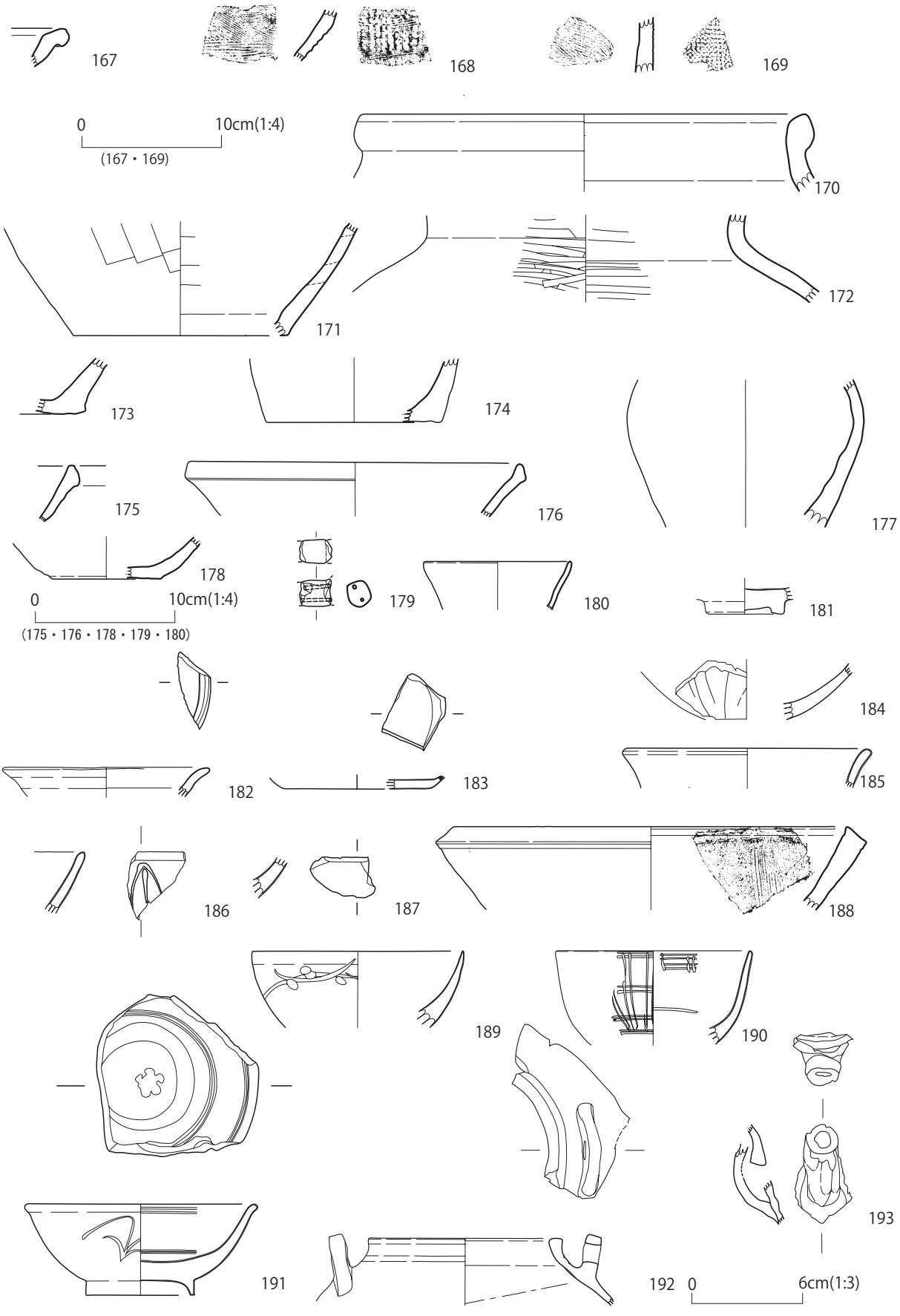


第 51 図　S46（溝状遺構) 及び周辺遺構実測図 (1/80)

第52図　S49（土坑) 出土遺物実測図(縮尺はスケールに表示）

第 12 表　遺物観察表 (土器･陶磁器)

No	種別	器種部位	出土区	出土地点	法量 (cm)				焼成	手法・調整・文様他		色調				胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	胴部最大径		外面	内面	外面		内面			
165	壺	底部	南区	S49		4.2			良好	縦方向の工具ナデ、ナデ	工具ナデ、指押さえ	にぶい褐	7.5　YR　5/4	燈	8　YR　7/6	3mm 以下の灰白、黒褐色の粒を含む	外面に少々スス付着
166	統制陶器	底部	南区	S49		(3.0)			堅緻	施釉	施釉	灰白	N　8/	灰白	N　8/	精良、色調は灰白 (N 8/)	「岐」「358」の刻印あり



第 53 図　中世～近世 調査区内出土遺物実測図 (縮尺はスケールに表示)

第 13 表　遺物観察表 (土器・土師器・須恵器・陶磁器・瓦質土器)

No	種別	器種部位	出土区	出土地点	法量 (cm)				焼成	手法・調整・文様他		色調				胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	胴部最大径		外面	内面	外面		内面			
167	不明	口縁部	北区	表土一括					良好	風化のため調整不明	風化のため調整不明	燈	7.5 YR 6/6	燈	8 YR 7/6	4mm 以下の灰黄褐、にぶい燈の粒を含む	傾き不明
168	瓦質土器	胴部	南区	Q5 Ⅱ					良好	格子目のタタキ後カキメ？	工具による横、斜方向のナデ	にぶい褐	7.5 YR 5/3	にぶい褐	8 YR 6/3	微細な透明光沢粒を含む	
169	須恵器甕	胴部	南区	P3 Ⅱ					良好	格子目タタキ	工具によるナデ横、斜方向のナデ	褐灰	10 YR 6/1	褐灰	10 YR 6/1	微細な透明光沢粒を含む	
170	陶器 (備前) 甕	口縁部	南区	P2 Ⅱ					堅緻	回転ナデ、自然釉	回転ナデ、自然釉？	にぶい赤褐	5 YR 4/3	にぶい赤褐	5 YR 5/3	1mm 以下の灰白、黒の粒を含む、色調は灰黄褐 (10YR6/2)	
171	壺	体部	南区	表土一括		(15.1)			良好	工具ナデ、ナデ、砂目	自然釉、粘土のつなぎ	灰黄褐	10 YR 5/2	褐灰	10 YR 5/1	5mm 以下の暗褐色、こう物、2mm 以下の灰白の粒を多く含む、色調は (2.5Y6/4)	
172	陶器 (甕)	頸部	南区	P2 Ⅱ					堅緻	工具による横方向のナデ	工具による横方向のナデ	灰黄褐	10 YR 5/2	灰黄褐	5 YR 6/6	3mm 以下の暗褐、灰白の粒を含む、色調は (5YR6/6)	
173	甕	底部	北区	表土一括					良好	ナデ、砂目？	自然釉	黄灰	2.5 Y 5/1	にぶい黄	3 Y 6/3	4mm 以下の灰色、灰白の粒を多く含む、2mm 以下の燈明光沢粒を含む。	
174	壺	底部	南区	Q5 Ⅱ		(12.6)			堅緻	ナデ、剥離部分あり	横方向のナデ、剥離部分あり	灰黄褐	10 YR 4/2	灰黄褐	10 YR 4/2	灰白で 5mm 程度の大きい粒、1mm 以下の粒を含む、色調は (7.5YR7/6)	
175	須恵器鉢	口縁部	南区	Q5 Ⅱ					良好	回転ナデ	カキメ？	褐灰	10 YR 6/1	褐灰	10 YR 6/1	微細な透明光沢粒を少量含む	
176	須恵器鉢	口縁部	南区	P3 Ⅱ	(23.9)				良好	ナデ	ナデ	灰黄褐	10 YR 5/2	灰黄褐	10 YR 5/2	微細な透明光沢粒を少量含む	
177	陶器 (壺)	胴部	南区	Q5 Ⅱ				(17.2)	堅緻	粗いナデ	粗いナデ、かなりの凹凸	にぶい黄褐	2.5 YR 4/3	明赤褐	3 YR 5/6	2mm 以下の灰白の粒を多く含む、色調は明赤褐 (2.5YR5/6)	
178	瓦質土器 (捏鉢？)	体部～底部	南区	S229		(7.8)			良好	丁寧なナデ、風化のため調整不明	風化のため調整不明	にぶい燈	7.5 YR 7/3	灰白	3 Y 8/2	2mm 以下の灰白、褐色の粒を含む	S229 ピット埋土中より出土
179	不明	不明	南区	P3 Ⅱ					良好			浅黄燈	7.5 YR 8/4			緻密な黒、透明光沢粒を含む	
180	坏	口縁～体部	南区	P3 Ⅱ	(10.5)				良好			浅黄燈	7.5 YR 8/4	浅黄燈	8 YR 8/4	1mm 以下の明赤褐、黒褐の粒を含む	
181	青磁 (碗)	底部	南区	表土一括		5.6			堅緻	施釉、削り出し高台、露胎	施釉、貫入あり	灰オリーブ	5 Y 5/3	灰オリーブ	5 Y 5/3	精良、色調は灰白 (5Y7/1)	
182	白磁皿	口縁部	南区	Q6 Ⅱ	(10.9)				堅緻	施釉	施釉	灰オリーブ	5 Y 6/2	灰オリーブ	5 Y 6/2	精良、色調は灰白 (2.5Y7/1)	
183	白磁皿	底部	南区	P4 Ⅱ		(8.0)			堅緻	施釉	施釉	灰白	7.5 Y 8/1	灰白	7.5 Y 8/1	精良、色調は灰白 (2.5Y8/1)	
184	青磁 (龍泉窯系) 鎬蓮弁文碗	体部	南区	Q5 Ⅱ					堅緻	鎬蓮弁文あり、施釉、貫入あり	施釉	オリーブ灰	2.5 GY 6/1	オリーブ灰	3 GY 6/1	精良、色調は灰白 (10YR7/1)	
185	青磁 (碗)	口縁部	南区	Q5 Ⅱ	(13.0)				堅緻	施釉、貫入あり	施釉、貫入あり	灰オリーブ	7.5 Y 5/2	灰オリーブ	8 Y 5/2	精良、色調は灰褐 (7.5YR5/2)	
186	青磁 (蓮弁文碗)	口縁部	南区	Q5 Ⅱ					堅緻	施釉、蓮弁文あり	施釉	オリーブ灰	2.5 GY 6/1	オリーブ灰	3 GY 6/1	精良、色調は灰 (2.5GY6/1)	
187	青磁 (剣先蓮弁文碗)	体部	北区	表土一括					堅緻	施釉、貫入あり、剣先蓮弁文あり	施釉、貫入あり	緑灰	10 GY 6/1	緑灰	10 GY 6/1	精良、色調は明褐灰 (7.5YR7/2)	北区事前調査時に表土中より出土
188	陶器 (備前) 擂鉢	口縁～体部	南区	P3 Ⅱ	(28.0)				堅緻	ナデ、回転ナデ、砂粒の動きや粘土のたまりが多く見られる	回転ナデ、一部縦方向のナデ	暗褐	10 YR 3/3	灰黄褐	10 YR 4/2	3mm 以下の灰白の粒を多く含む、色調は赤褐 (5YR4/6)	
189	碗	口縁	南区	Q5 Ⅱ	(11.5)				堅緻	施釉	施釉	灰白	Hve N 8/	灰白	Hve N 7/	精良、色調は灰白 (Hve N 7/)	
190	陶磁器 (碗)	口縁～体部	南区	P5 Ⅱ	(10.2)				堅緻	施釉	施釉	灰白	7.5 YR 8/1	灰白	8 Y 8/1	精良、色調は灰白 (Hve N 8/)	
191	碗	口縁～底部	南区	Q5 Ⅱ	(12.2)		4.8		堅緻	施釉	口縁部、胴部 (内面) に二重境界線	灰白	10 Y 8/1	灰白	10 Y 8/1	精良	
192	土瓶 (備前系)	口縁～体部	南区	Q5 Ⅱ	(9.4)				堅緻	施釉、釉はぎ	施釉、露胎	オリーブ灰	5 GY 5/1	オリーブ灰	5 GY 5/1	精良、色調は灰白 (2.5Y8/2)	
193	水注	注口	北区	表土一括					堅緻	施釉、露胎	露胎、施釉	緑灰	6/1	にぶい黄燈	10 YR 7/3	精良、色調はにぶい黄燈 (10YR7/3)	緑釉を呈する交趾三彩？

第 14 表　鉄製品計測表

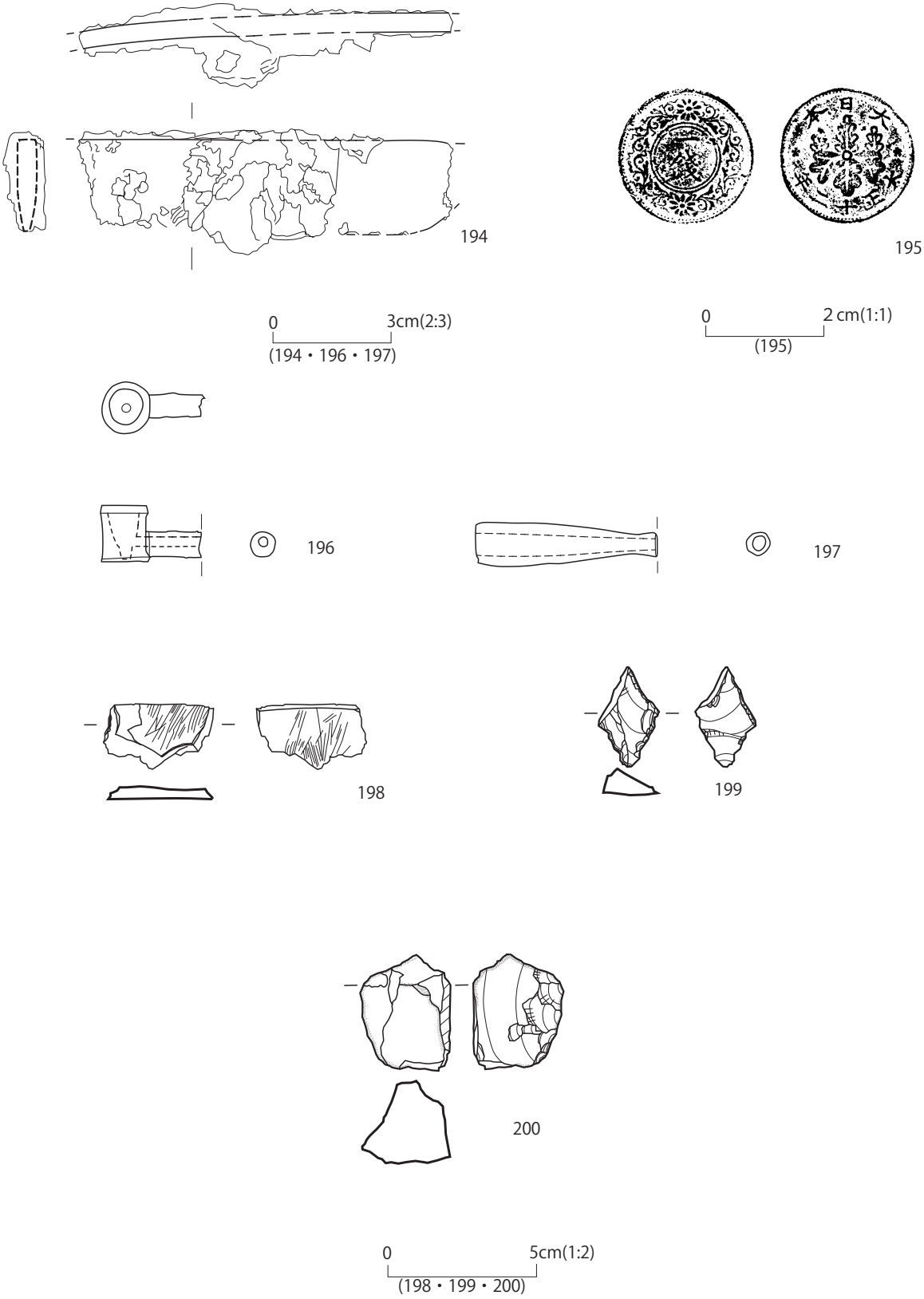
番号	種別	調査区	現存長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
194	刀？	南区	9.5	2.2	0.5	44.2	S1 隣接トレンチ　攪乱中より出土

第 15 表　近代出土遺物観察表

番号	出土位置	時期	種類	備考
195	北区表土攪乱	大正時代	銭貨	一銭硬貨　大正 12 年の刻印
196	北区表土攪乱	不明	煙管雁首	胴の鋳造品？ 197 と一体
197	北区表土攪乱	不明	煙管吸口	胴の鋳造品？ 196 と一体

第 16 表　石器計測表

番号	器種	調査区	表記	層	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
198	磨製石器	事前北区	T71	表土一括	頁岩	2.20	3.70	0.50	3.90	T7 トレンチより出土
199	火打ち石	南区	R5 ヒョイ	表土一括	チャート	3.35	2.00	0.90	4.22	R5 グリッド
200	火打ち石	事前北区	キタヒョイ	表土一括	チャート	3.85	3.00	27.5	33.43	



第 54 図　近世以降調査区内出土遺物実測図 (縮尺はスケールに表示)

第Ⅴ章 五次調査のまとめ

銀座第 1 遺跡 (五次調査) では旧石器時代から現代までの各時代の環境を伺う遺構や遺物が確認された。旧石器時代～縄文時代早期には旧地形としての自然流路跡や縄文時代早期以前の遺構としての陥し穴状遺構の存在が、また竪穴建物跡・土坑・掘立柱建物状遺構の検出など各時代を代表する遺構や遺物が検出されている。本章では今回の調査結果を時代ごとに整理し、まとめとしたい。

1　旧石器時代

旧石器時代の旧地形として自然流路跡 5 条が確認された。また遺物として、細石刃 1 点、ナイフ形石器 4 点、石核 2 点、角錐状石器 1 点、剥片 6 点が出土している。遺物は破片ではなく完成品であったため、この地域が定住の場ではなかった可能性がある。

2　縄文時代早期

縄文時代早期の旧地形として自然流路跡 1 条、遺構として陥し穴状遺構 4 基が確認された。遺物は、打製石鏃 3 点、石核 2 点、剥片 9 点が出土している。陥し穴状遺構は自然流路跡に沿うように掘られており、狩り場的要素をもつものと考えられる。

3　弥生～古墳時代

弥生時代後期～古墳時代前期の遺構として竪穴建物跡 4 軒が確認された。また遺構からは土器等が多数出土しており、定住の痕跡が伺えた。

時期の特定には松永編年表 2004 を用いた。竪穴建物跡 S1 は、甕 No41 ～ 47 の口縁部の長さが短いことや複合口縁壺 No64 が存在すること、高坏 No95 ～ 96 の坏部の形状から 3 期 (弥生終末期) に、竪穴建物跡 S95 は、甕 No109 ～ 112 の口縁部の長さや深鉢 No117 ～ 118 の底部から口縁部の長さから 4 期 (弥生終末期) に該当すると考えられる。この結果、2 軒の竪穴建物跡には時期差があることが分かった。

またこの時代の遺物として特筆すべきは、装飾高坏片が出土したことである。第 55 図 201 は、宮崎県埋蔵文化財センターに永らく保管されていた、装飾高坏である。出土状況や来歴など詳細は不明だが、昭和 55 ないし 56 年に川南町大字平田字南原に所在する南原 A 遺跡 (遺跡番号 2018)(註 1) の出土土器とみなされる。地元の町文化財保護審議会委員の手を介して宮崎県教育庁文化課 (当時) に寄託されたままであった。宮崎県下では数少ない装飾高坏の一つであるため、今回の発掘調査で装飾高坏の一部が出土したのを機に、図化と公表を行う。類例としては、銀座第 1 遺跡、川南町東平下遺跡 1 号円形周溝墓 (註 2) 、川南町赤坂遺跡 (第 55 図 139・146・147) などがある。

銀座第 1 遺跡の周辺には川南古墳群の墳墓 (前方後円墳) が存在しており、首長墓との関係も伺える。また、竪穴建物跡はいずれも旧石器時代～縄文時代早期に存在した自然流路の上に位置していた。水流による攪拌や堆積を繰り返した結果、斜面が緩斜面へ、狩り場的な場所が定住の場所へ変遷したことが考えられる。

4　中世～近世

中世の遺構として竪穴建物跡や掘立柱建物跡、遺構を伴うピット等が確認された。中世の遺構はトレンチャーによる攪乱の影響を強く受けており、深い位置での検出となった。遺物は竪穴建物跡や掘立柱建物跡の柱穴ピットやその周辺から、中世～近世と見られる土器や土師器 (坏・皿)、須恵器、陶磁器 (青磁・白磁)、瓦質土器等が出土した。これらは 15 世紀代が帰属時期として想定されるものであった。また、底部にヘラ切りが施された土師器坏が多く出土する中で、底部に糸切りが施されたものが 2 点出土した。出土した土師器 (坏・皿) の体部は似通っているため、底部の観察なしでは見分けがつかない状況であった。

5　近代～現代

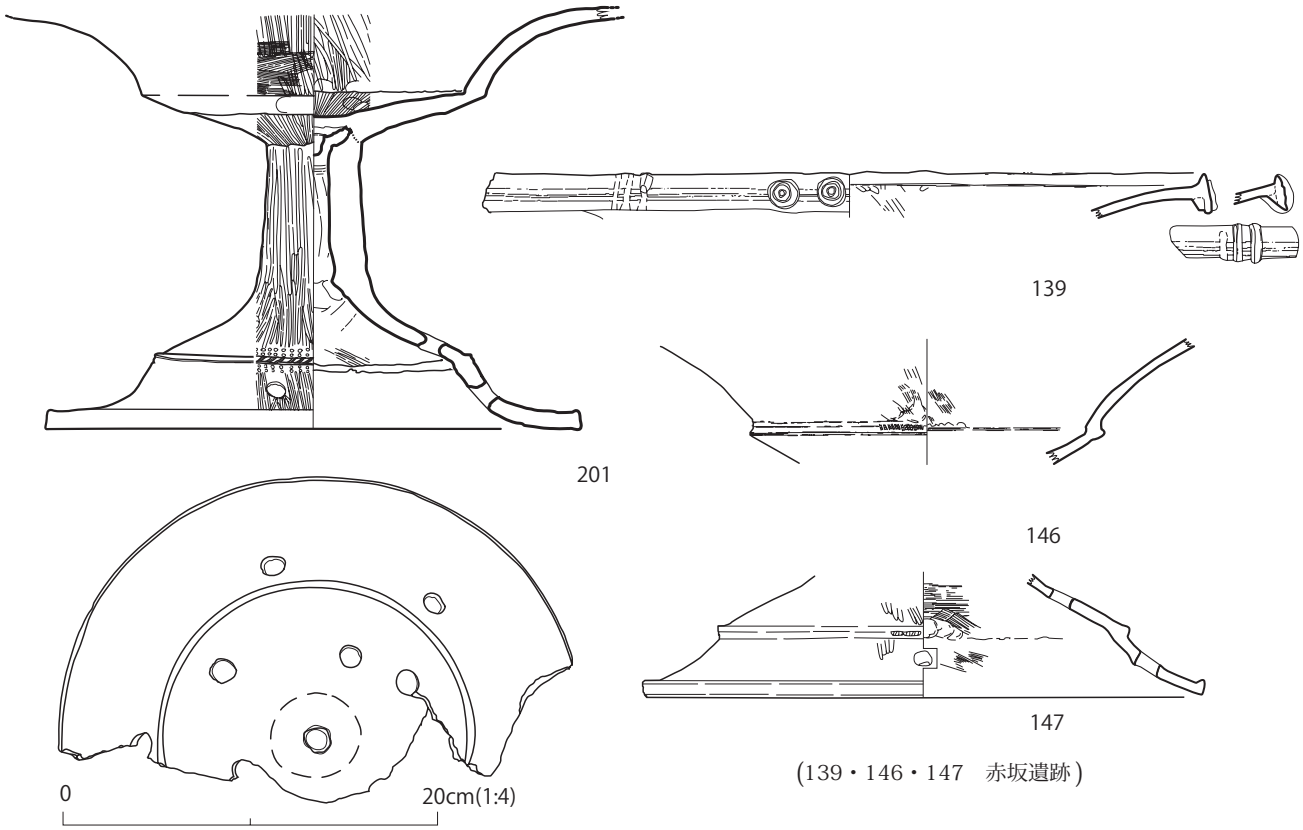
南区で出土した陶磁器は統制陶器であり、底部の高台内に「岐」と「358」のクロム印が認められ、戦時中岐阜県にて製造された美濃焼の小皿であると推測できた。これらのことから、戦前から戦後にかけてこの地域が起居の場となっていたことが伺える。帰属時期

が特定できないものとして煙管・火打ち石が出土した。煙管の材質は銅を含む金属製鋳物と思われる。南区表土から出土した。火打ち石は、チャートを石材とするものであり、生活の中で火を用いたことが推測できる。

【参考文献】

川南町 1983「川南町史」
川南町教育委員会 1982「川南町の埋蔵文化財遺跡詳細分布調査報告書」
宮崎県埋蔵文化財センター 2006「銀座第 1 遺跡 (一・二・三・四次調査)」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 120 集
宮崎県埋蔵文化財センター 2006「藏座村遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター 発掘調査報告書』第 53 集
松永幸寿 2004「日向における古式土師器の成立と展開ー宮崎平野部を中心としてー」『南西四国ー九州間の交流に関する考古学的研究』愛媛大学

註 1　川南町教育委員会 1983『川南町の埋蔵文化財　遺跡詳細分布調査報告書』
註 2　宮崎県教育委員会 1986「東平下 1 号円形周溝墓」『宮崎県文化財調査報告書』第 29 集



(139・146・147　赤坂遺跡)

第 55 図　装飾高坏 (宮崎県内出土) 実測図 (1/4)

第 17 表　装飾高坏 (宮崎県内出土) 観察表

No	種別	器種部位	出土区	出土地点	法量 (cm)				焼成	手法・調整・文様他		色調				胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	胴部最大径		外面	内面	外面		内面			
201	装飾高坏	坏部 (口縁部全体欠損) 脚部 (半分欠損) 脚柱部 (残存)	—	本文中 ※ 1		28.4	(22.5)		良好	縦方向のナデ、指ナデ 縦方向のミガキ	横ナデ、指ナデ	灰白	10 YR 8/2	にぶい黄燈	10 YR 7/3	密、1-2mm 程度の長石、角閃石、赤色粒子、白色粒子を含む雲母をごくわずかに含む	脚裾部 (上の) 孔の内側に焼成後の調整が見られる

Ⅵ章　総括

銀座第 1 遺跡は五次調査をもって全調査を終了した。本章ではこれまでの調査報告を総括し、各時代毎に本遺跡がもつ性格や特徴について考察する。

1　旧石器時代

本遺跡では、旧石器時代の遺構は確認されなかったが、五次調査で地面の傾斜とそれに伴う旧地形の自然流路跡を確認した。遺物は、一～五次調査でナイフ形石器・剥片・細石刃・細石刃核など数点が認められたが、石器の接合資料や大きな礫群は見られなかった。礫はあるものの赤化は弱く炭化物は確認されていない。周辺遺跡の状況も同様で、隣接の藏座村遺跡では傾斜を伴う地形でナイフ形石器や剥片・細石刃・細石刃核が確認されている。このような状況から、本遺跡周辺は旧石器時代において起居する場ではなく、当時の人々の行動半径内と考えられ、起居の場は別に存在することが想起される。

2　縄文時代早期

五次調査で、縄文時代早期の旧地形として自然流路跡を確認した。一～五次調査では遺構として、陥し穴状遺構・集石遺構が確認されている。遺物は土器片 2 点・石鏃の製品・剥片が認められる。集石遺構の礫には赤化が認められ、火を使用した痕跡が見られる。しかし、出土した土器片は僅かであり、集石遺構は本遺跡の南西部縁辺の最も低い位置での検出であった。遺跡は南西方向に緩やかに傾斜しており、傾斜の途中で検出した自然流路跡や陥し穴状遺構の存在からも起居する場とは考えにくい。むしろ狩り場的要素をもつ場と考えることが妥当と思われる。

3　弥生時代～古墳時代

一～四次調査では、溝状遺構や土坑中から弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物が出土した。五次調査では竪穴建物跡が検出され、遺構から甕・壺・鉢などの土器類が出土した。これは一～四次調査で溝状遺構から出土した土器類と類似し帰属時期も一致している。また、五次調査で装飾高坏片が出土した。装飾高坏はこれまでに本遺跡周辺の周溝墓や竪穴建物跡からの出土例が報告されているが、類例も少なく今後の資料の蓄積を待ちたい。

4　中世～近世

今回の五次調査終了に伴い、一～五次調査で検出された遺構分布図を中世と近世に分け作成した (第 56、57 図)。

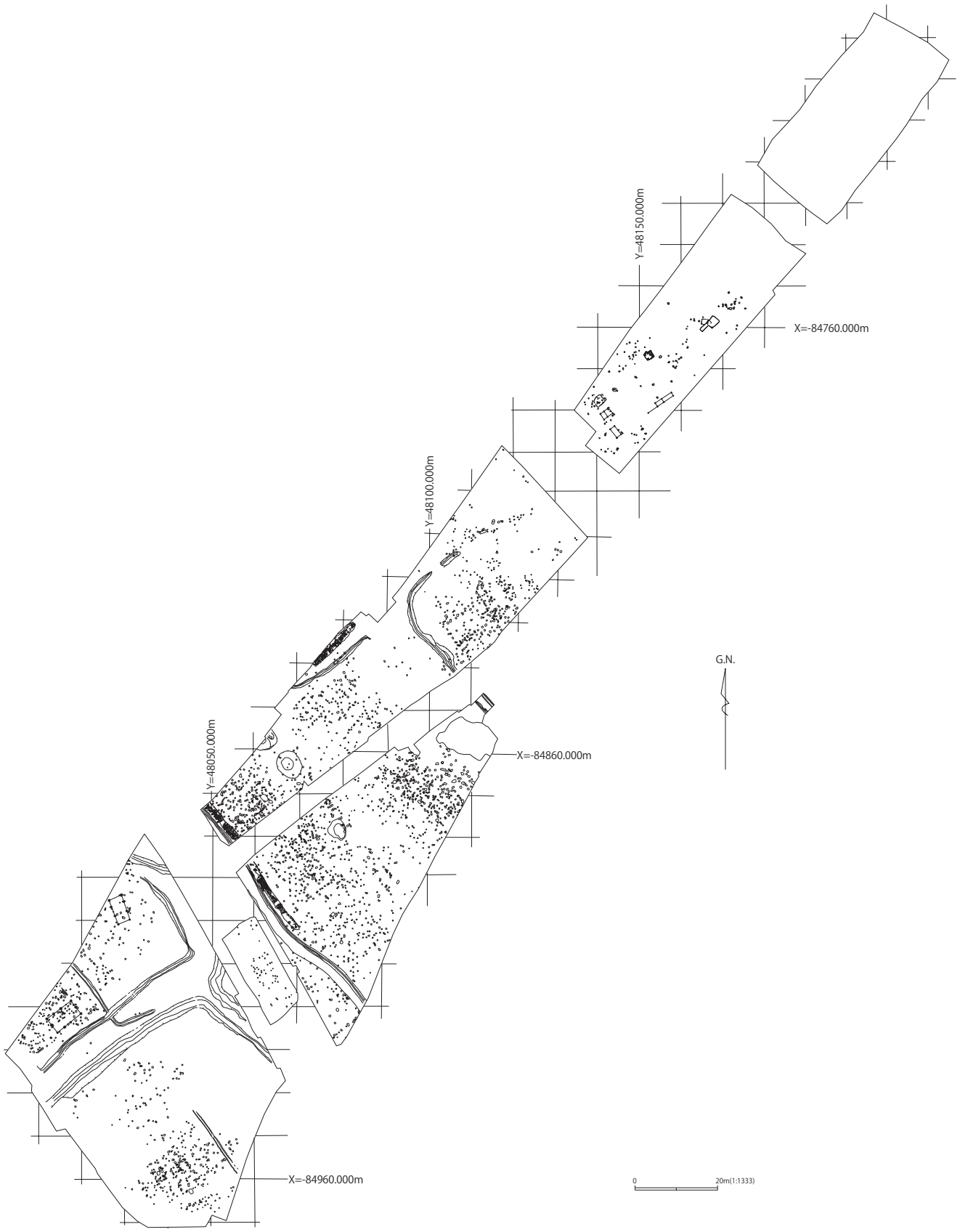
中世は、縦横に走る溝によって方形に区画された土地に集村が成立するという特徴が見られる。五次調査では竪穴建物跡・掘立柱建物跡が確認され、遺物として中世土師器も一定量出土した。掘立柱建物跡の主軸が一定でないことや、建物の大きさの違いから、集村部と周辺部の建物の時期が異なっていることも分かった。

近世では、道路状遺構などのように中世から続く遺構も見られるが、土坑墓の集中が確認され、溝に区切られた居住区と埋葬場所が明瞭に分離されている状況が見られた。また調査区内には多くのピットが検出されるもの、削平を受け全体像が不明瞭であったり、遺物を伴うが時期が特定できない掘立柱建物跡も確認された。

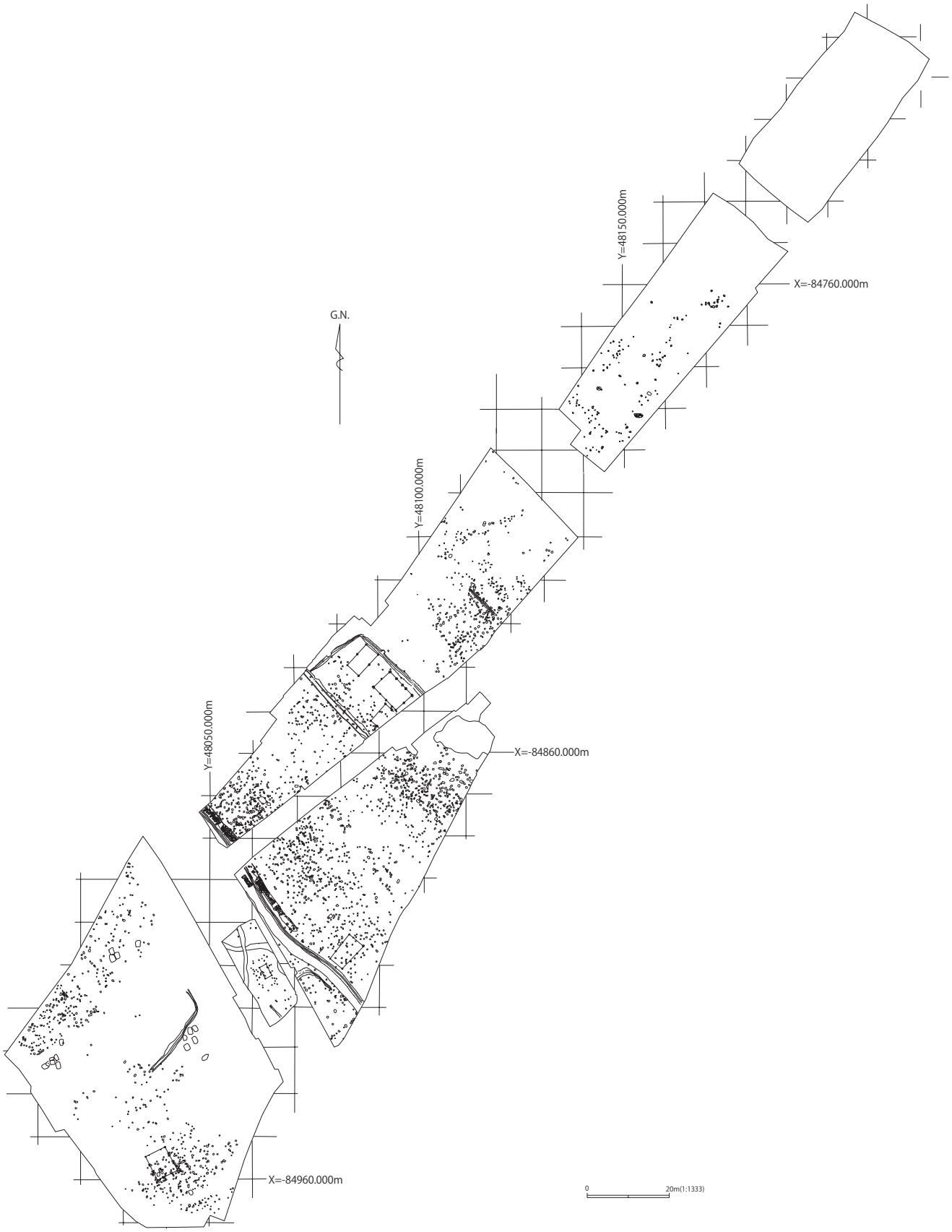
これらのことから、中世にはある程度の規模をもつ集村や丘陵の傾斜部分にその周辺部が存在し近世にも続いていたと思われる。しかし後の開墾や耕作等の影響から削平を受け、状況が不明瞭になったことが伺える。またこの時代は、他地域との交流によってもたらされたと思われる遺物も多く、活発な交流の跡も伺えた。

【引用・参考文献】

川南町 1983「川南町史」
川南町教育委員会 1982「川南町の埋蔵文化財遺跡詳細分布調査報告書」
宮崎県埋蔵文化財センター 2006「銀座第 1 遺跡 (一・二・三・四次調査)」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』 第 120 集
宮崎県埋蔵文化財センター 2006「藏座村遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター 発掘調査報告書』第 53 集
小野正敏 1982「15 ～ 16 世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No2 日本貿易陶磁研究会



第 56 図　銀座第 1 遺跡（一〜五次）遺構分布図（中世）



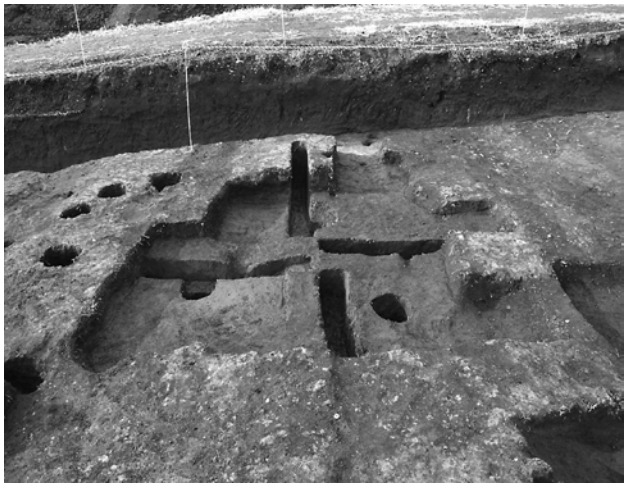
第 57 図　銀座第 1 遺跡（一〜五次）遺構分布図（近世）

S1（竪穴建物跡）遺物検出状況

S1（竪穴建物跡）完掘状況

S95・S44（竪穴建物跡）完掘状況

S2（竪穴建物跡）完掘状況



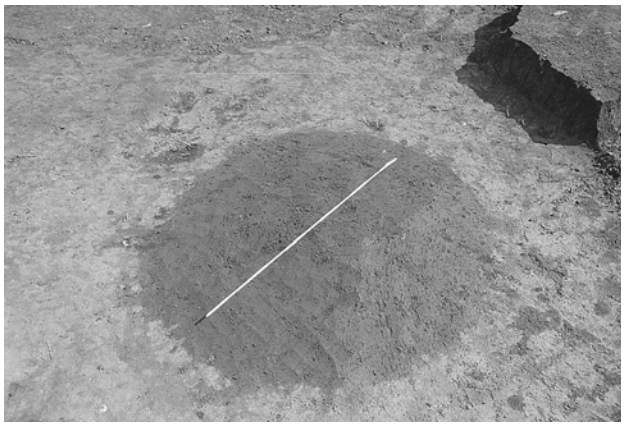
S3（竪穴建物跡）完掘状況

S4（竪穴建物跡）、S5・S6（土坑）、
S46（溝状遺構）完掘状況

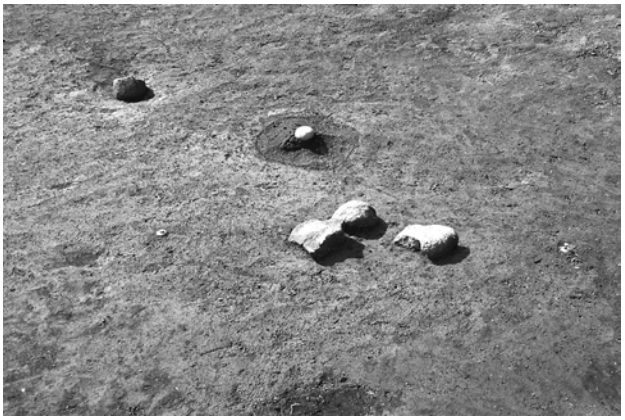
巻末図版２

S102（陥し穴状遺構）埋土堆積状況

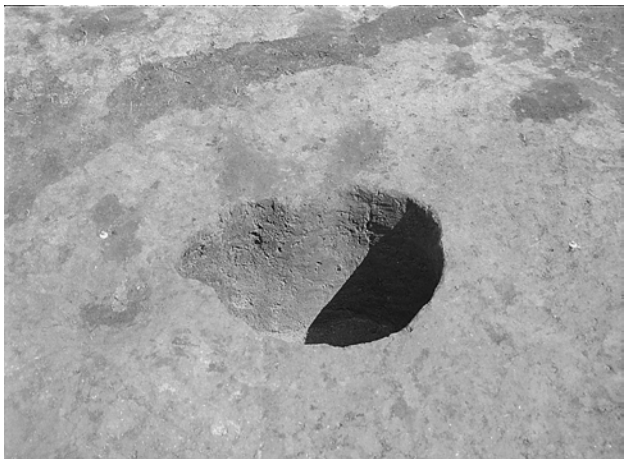
S103（陥し穴状遺構）完掘状況



S112（陥し穴状遺構）検出状況

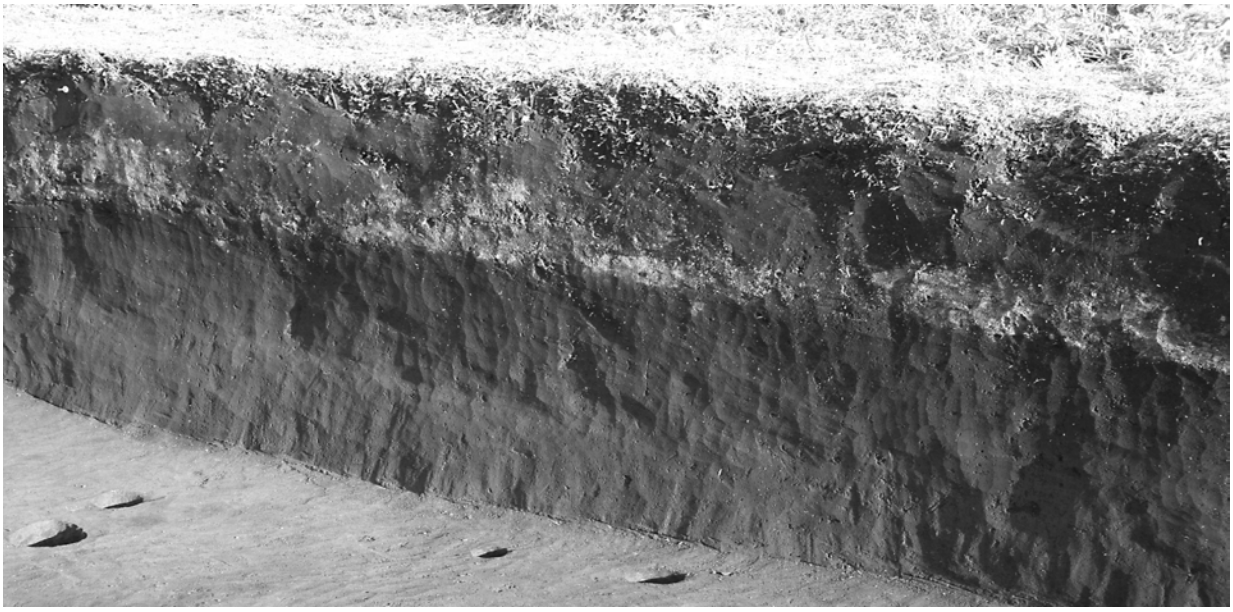


S260（集石遺構）検出状況



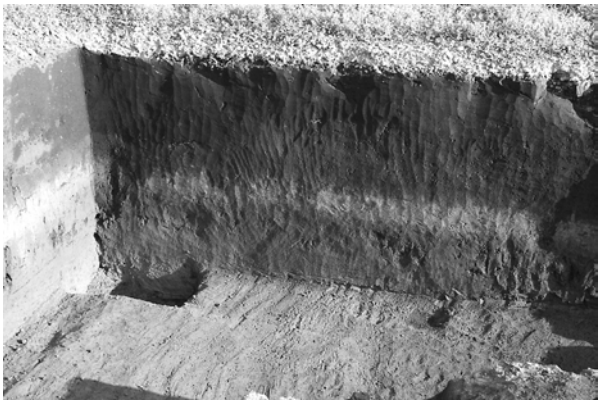
S110（土坑）完掘状況

S111（土杭）完掘状況



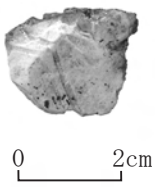
南区　土層断面（ｋ -Ah 堆積状況）　中央部西より

北区　土層断面（ＡＴ上攪乱状況）　南部北東より

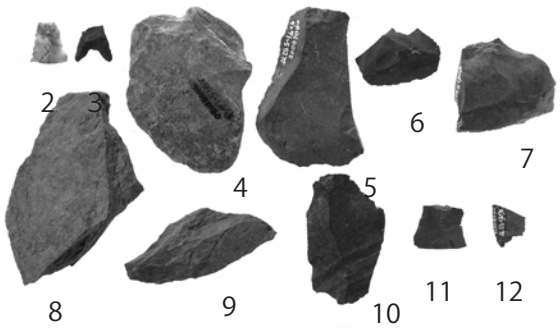


南区　土層断面（ＡＴ堆積状況）北東部南西より

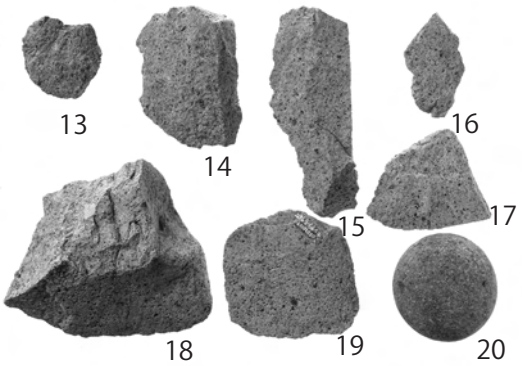
南区　（ＡＴ面傾斜堆積状況）中央部北西より



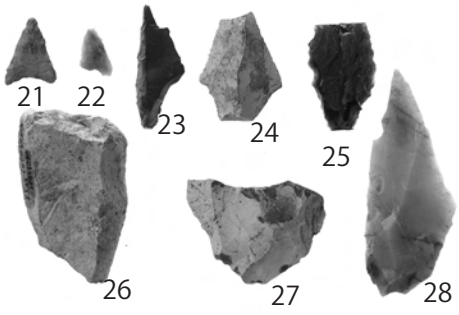
S104 出土遺物 (剥片)



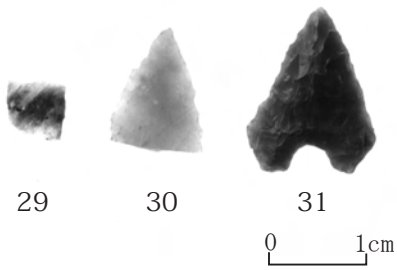
南区　旧石器～縄文時代早期出土遺物①



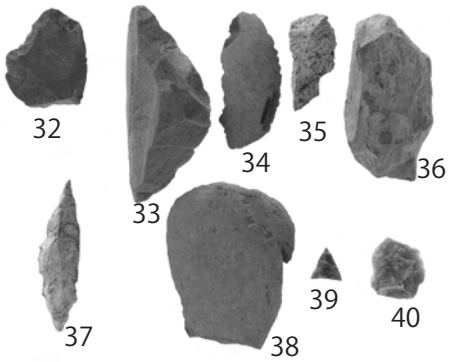
南区　旧石器～縄文時代早期出土遺物②



北区　旧石器～縄文時代早期出土遺物

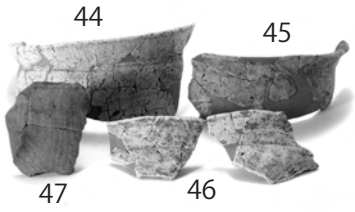


事前調査　旧石器～縄文時代早期出土遺物①

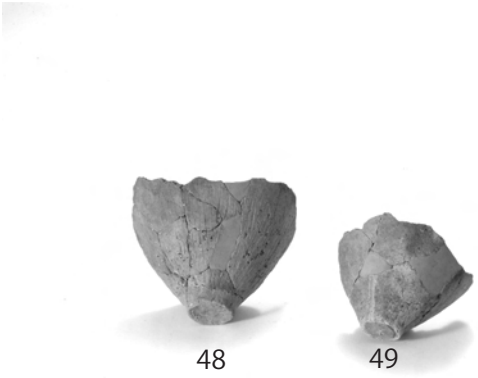


事前調査　旧石器～縄文時代早期出土遺物②

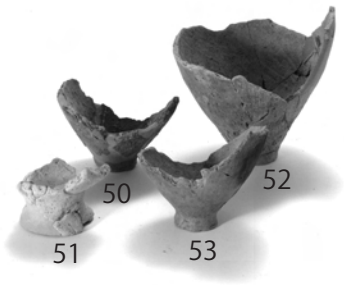
S1　(竪穴建物跡) 出土遺物①



S1　(竪穴建物跡) 出土遺物②



S1　(竪穴建物跡) 出土遺物③



S1　(竪穴建物跡) 出土遺物④

S1　(竪穴建物跡) 出土遺物④

S1　(竪穴建物跡) 出土遺物⑤

S1　(竪穴建物跡) 出土遺物⑥

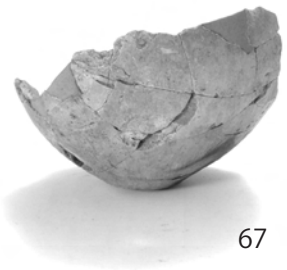
S1　(竪穴建物跡) 出土遺物⑦

S1　(竪穴建物跡) 出土遺物⑧

S1　(竪穴建物跡) 出土遺物⑨

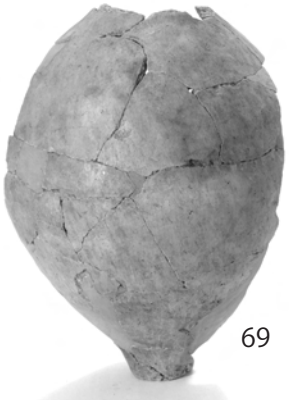
巻末図版６

S1　(竪穴建物跡) 出土遺物⑩



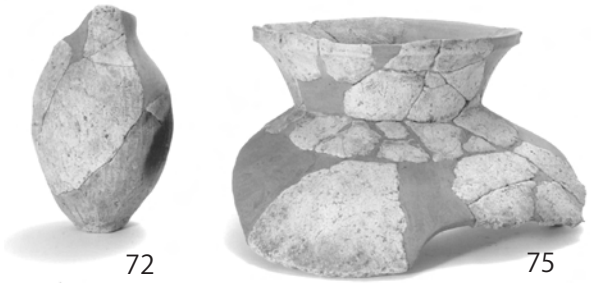
S1　(竪穴建物跡) 出土遺物⑪

S1　(竪穴建物跡) 出土遺物⑫

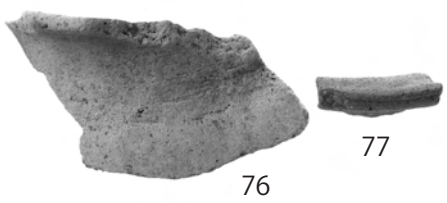


S1　(竪穴建物跡) 出土遺物⑬

S1　(竪穴建物跡) 出土遺物⑭



S1　(竪穴建物跡) 出土遺物⑮



S1　(竪穴建物跡) 出土遺物⑯

S1　(竪穴建物跡) 出土遺物⑰

S1　(竪穴建物跡) 出土遺物⑱

S1　(竪穴建物跡) 出土遺物⑲

S1　(竪穴建物跡) 出土遺物⑳

S1　(竪穴建物跡) 出土遺物㉑

S1　(竪穴建物跡) 出土遺物㉒

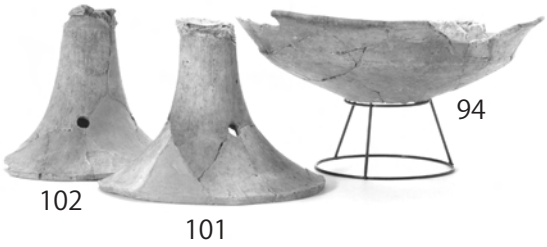
S1　(竪穴建物跡) 出土遺物㉓

S1　(竪穴建物跡) 出土遺物㉔

S1　(竪穴建物跡) 出土遺物㉕

S1　(竪穴建物跡) 出土遺物㉖

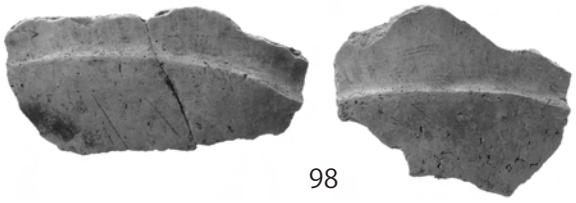
S1　(竪穴建物跡) 出土遺物㉗



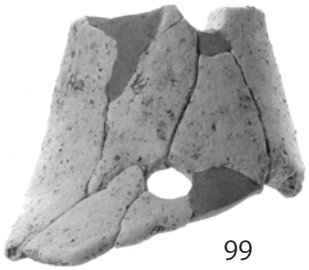
S1　(竪穴建物跡) 出土遺物㉘

S1　(竪穴建物跡) 出土遺物㉙

S1　(竪穴建物跡) 出土遺物㉚



S1　(竪穴建物跡) 出土遺物㉛



S1　(竪穴建物跡) 出土遺物㉜

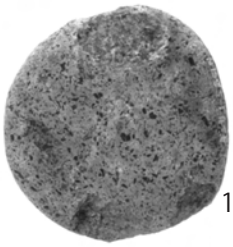
S1　(竪穴建物跡) 出土遺物㉝

S1　(竪穴建物跡) 出土遺物㉞

S1　(竪穴建物跡) 出土遺物㉟

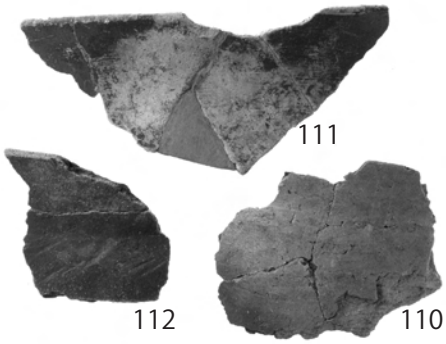
S1　(竪穴建物跡) 出土遺物㊱

S1　(竪穴建物跡) 出土遺物㊲



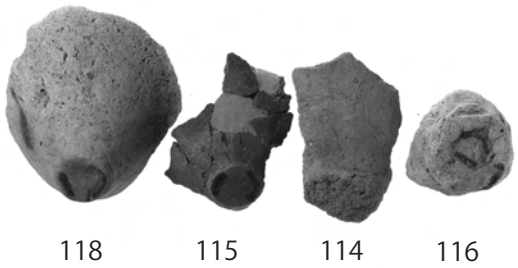
S51　(竪穴建物跡) 出土遺物

S95　(竪穴建物跡) 出土遺物①

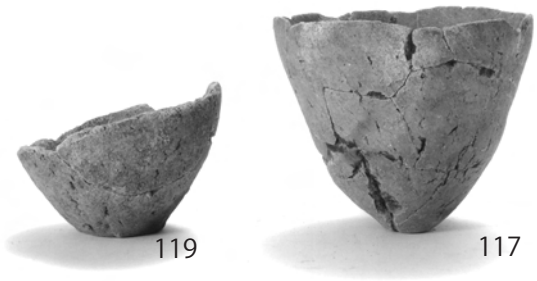


S95　(竪穴建物跡) 出土遺物②

S95　(竪穴建物跡) 出土遺物③

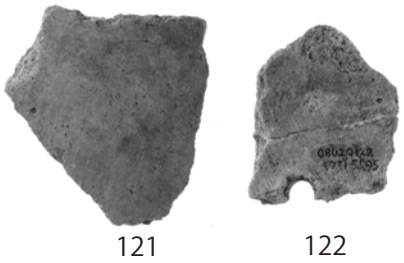


S95　(竪穴建物跡) 出土遺物④



S95　(竪穴建物跡) 出土遺物⑤

S95　(竪穴建物跡) 出土遺物⑥

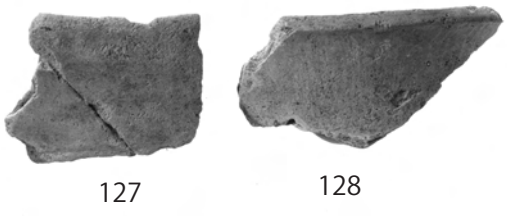


S95　(竪穴建物跡) 出土遺物⑦

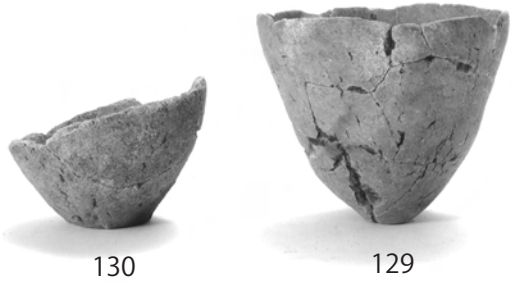
S95　(竪穴建物跡) 出土遺物⑧

S95　(竪穴建物跡) 出土遺物⑨

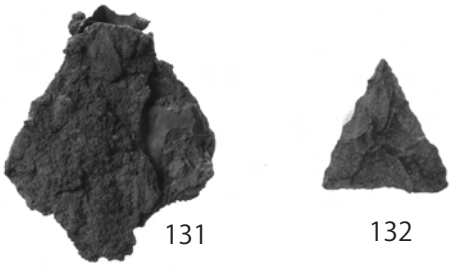
S95　(竪穴建物跡) 出土遺物⑩



S44　(竪穴建物跡) 出土遺物①



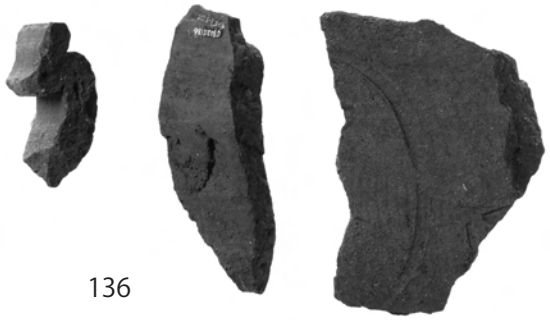
S44　(竪穴建物跡) 出土遺物②



S44　(竪穴建物跡) ③　　南区Ⅱ層出土遺物

S2　(竪穴建物跡) 出土遺物①

S2　(竪穴建物跡) 出土遺物②

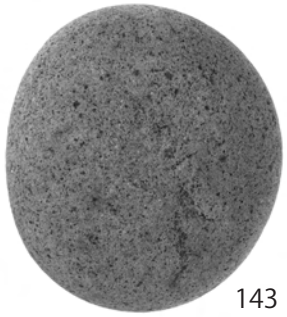


S2　(竪穴建物跡) 出土遺物③

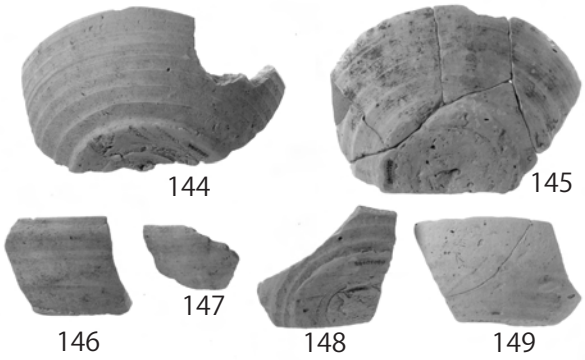
S3　(竪穴建物跡) 出土遺物①

S3　(竪穴建物跡) 出土遺物②

S3　(竪穴建物跡) 出土遺物③

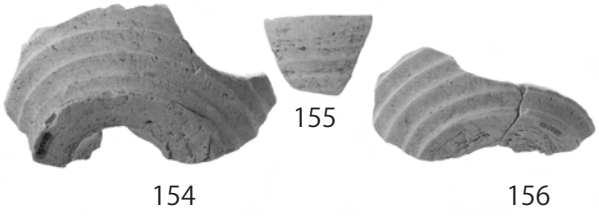


S3　(竪穴建物跡) 出土遺物④

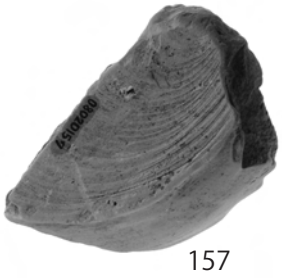


S262・264　(掘立柱建物跡) 出土遺物①

S262・264　(堀立柱建物跡) 出土遺物②

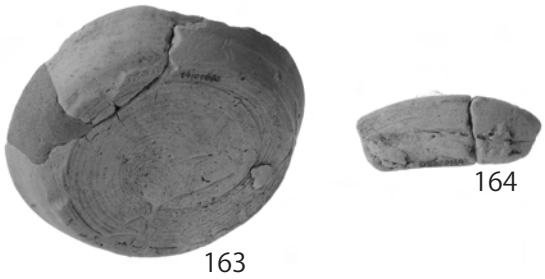


中世：南区出土遺物①

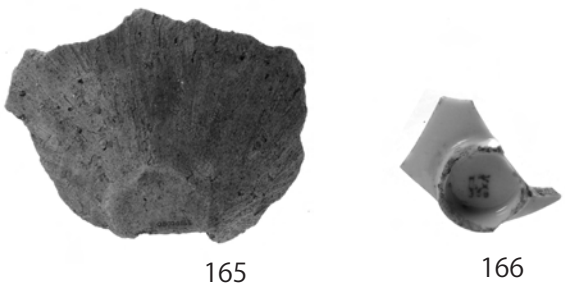


中世：南区出土遺物②

中世：南区出土遺物③

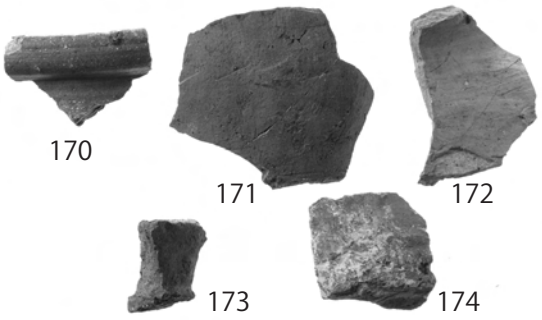


中世：南区出土遺物④



S49(土坑) 出土遺物

南・北区　表土・Ⅱ層一括　出土遺物①

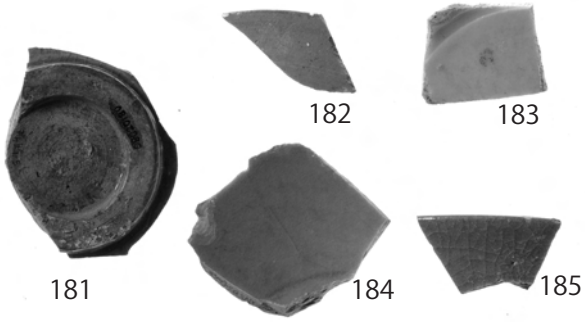


南・北区　表土・Ⅱ層一括　出土遺物②

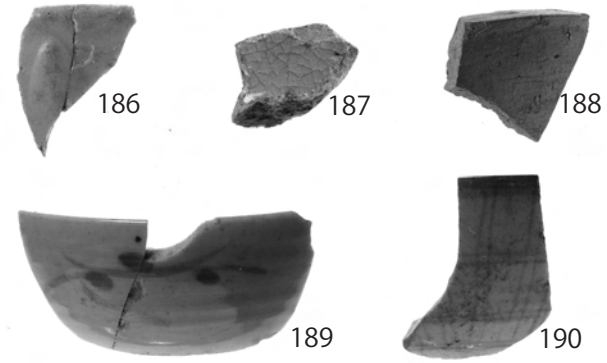
南・北区　表土・Ⅱ層一括　出土遺物③

南・北区　表土・Ⅱ層一括　出土遺物④

S229(ピット)・南区Ⅱ層Ｐ３グリッド一括　出土遺物



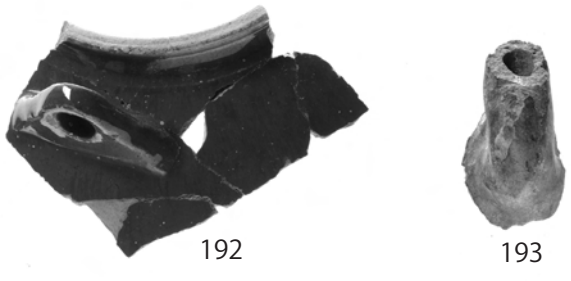
南区表土・グリッドⅡ層一括　出土遺物



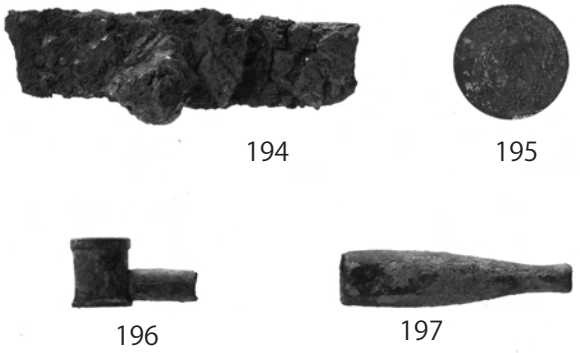
北区表土・南区グリッドⅡ層一括　出土遺物

南区グリッドⅡ層一括　出土遺物

巻末図版 14



南区グリッドⅡ層・北区表土一括　出土遺物



南区攪乱・北区表土一括　出土遺物

事前北区、北区・南区表土一括　出土遺物

宮崎県児湯郡川南町出土　装飾高坏

報　告　書　抄　録

ふ り が な	ぎんざだい1いせき　(５じちょうさ)
書　　名	銀座第１遺跡　(五次調査)
副 書 名	東九州自動車道 (都農～西都間) 建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	６４
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第１９４集
編 著 者 名	吉野達三・松本　茂・今塩屋毅行
発 行 機 関	宮崎県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒880-0212　宮崎市佐土原町下那珂４０１９番地　TEL 0985-36-1171
発行年月日	2011年1月25日

ふりがな 収蔵遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ぎんざだいいちいせき 銀座第１遺跡 ごじはっくつちょうさ 五次発掘調査	みやざきけんこゆぐん 宮崎県児湯郡 かわみなみちょう 川　南　町 おおあざかわみなみ 大 字 川 南	45405	0941	32度14分 16秒付近	131度30分 34秒付近	2008年 7月28日 ～ 2009年 4月8日	3,600㎡	東九州自動車道(都農～西都間)建設に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
銀座第１遺跡 五次発掘調査	集落跡	旧石器 縄文 弥生 古墳 中世 近世	陥し穴状遺構　４基 集石遺構　２基 土坑　７基 竪穴建物跡　４軒 掘立柱建物跡　３棟 竪穴建物跡　３軒 土坑　４基 溝状遺構　１条	ナイフ形石器・細石刃 石鏃・磨石・剥片 台石・石錘 弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器・鉄製品 銭貨・煙管	S1竪穴建物跡から装飾高坏が出土

要　　約

銀座第１遺跡は宮崎県川南町の沖積扇状地上に位置し、東九州自動車道(都農～西都間)建設に伴い発掘調査を行った。平成14年度から平成16年度まで一次～四次調査を実施し、「縦横に走る溝によって方形に区画された土地に成立した中世の集村」の存在が明らかになった。

銀座第１遺跡(五次)は、一～四次調査区の隣接部分で、緩やかに傾斜した台地上に位置する遺跡である。ここでは、旧石器時代から縄文時代早期以前の旧地形(自然流路)に沿って存在する陥し穴状遺構や、弥生時代後期から古墳時代前期に相当する竪穴建物跡と装飾高坏を含む土器等の遺物、中世に相当する竪穴建物跡や掘立柱建物跡と土師器(ヘラ切り・糸切り)、陶磁器(青磁・白磁)等の遺物が確認されている。これらの成果は、各時代の実態を知る上で注目されるだけでなく、遺物を通し、川南町と近隣圏との関係を考える上でも重要である。

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 194 集

銀座第 1 遺跡 (五次調査)

東九州自動車道 (都農～西都間) 建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 64

2011 年 1 月

発　行　宮崎県埋蔵文化財センター
〒 880-0212 宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地
TEL　0985(36)1171　　FAX 0985(72)0660

印　刷　有限会社　いろは企画
〒 889-1603 宮崎市清武町正手 3 丁目 1 9 － 2
TEL　0985(85)5889　　FAX 0985(85)5889